

349

294



始





IT 1K75

349-294



4









4



349-294

巴  
子



与谢野宽  
品子合著

大正  
3. 5. 15  
内交



「巴里より」の初めに

予等は日夜歐羅巴に憬れて居る。殊に巴里が忘れられない。滞留期が短くて、すべて表面計りを一瞥して来たに過ぎない。予等ですら斯うであるから、久しく歐洲の内景に親んだ人人は幾倍か此感が深いことであらう。

近日、友人徳永柳洲君は畫を、予等夫妻は詩歌を以て滯歐中の所感を寫した「歐羅巴」一冊を合作しようとして計畫して居る。其れは同期に歐洲に遊んだ畫家と詩人の記念であるのみならず、互に「海のあなた」の戀しさを紛らさうとする手ずさびである。

併し、此「巴里より」一冊は其様な意味から世に出だすのではな



予は明治四十四年十一月八日に横濱から郵船會社の熱田丸に乗つて海路を取り、予の妻は翌年五月五日に東京を立つてシベリヤ鐵道に由り、共に前後して歐洲に向つた。

予等は旅中の見聞記を毎月幾回か東京朝日新聞に寄せねばならぬ義務があつた。猶晶子は雜誌婦人畫報などに寄稿する前約があつた。そして新聞雜誌の性質上、予等の通信は豫め「通俗的に」と云ふ制限を受けて居た。

予の歐洲に赴いた目的は、日本の空氣から遊離して、氣樂に、且つ眞面目に、暫らくても文明人の生活に親むことの外に何もなかつた。實に筆を執つて皮相の觀察を書くことなどは少からぬ苦痛

なのである。自然予等は通信の義務を懈ることが多かつた。

今ここに、書肆から望まれるに其等の見聞記を集めて讀み返して見ると、すべて卒爾に書いた杜撰無用の文字のみであるのに赤面する。初めから一冊の書とする豫期があつたのなら、少しは讀者の興味を刺激するに足る經驗や觀察を書き洩さずに置いたものを。

何れの地の記事も蕪雜であるが、伊太利の紀行中、羅馬に就ては數回に亙る記事を一括して新聞社へ送つた筈であつたのに、其郵便が日本へ着かずに仕舞つた。ナポリ、ボンベイ等の記事も同様である。其等の郵便を予自身に郵便局へ赴いて差立てなかつたのが過失であつた。人氣の悪いナポリの宿の下部に托した爲めに



巴里よりの初めに  
故意に紛失さされたのであつた。さりとして今更記憶を辿つて書き  
出す氣にもならない。此書の爲に益々不備を憾むばかりである。  
予と船を同じうして歐洲に遊び、予より一年遅れて歸つた徳永  
柳洲君が、在歐中の畫稿から諸種の面白い材題を撰んで此書の挿  
畫と装幀とに割愛せられたのはかたじけない。柳洲君の才筆を添  
へ得て初めて此書を世に出だす意義を生じたやうに思ふ。  
予等は主として巴里に留つて居た。従つて此書にも巴里の記事  
が多い。「巴里より」と題した所以である。

大正三年五月

よさの・ひろし

### 「巴里より」目次

- 上海(一)
- 香港(七)
- 新嘉坡(一七)
- ハナン(三三)
- コロムボ(三七)
- 地中海(四九)
- マルセエユ(五四)
- 巴里の除夜(五八)
- パンテオンの側から(六四)
- モンマルトルの宿(八一)
- 畫室と墓(八五)
- サン・セルマン(九六)
- 文人の決闘(一〇一)
- 謝肉祭(一〇八)

巴里より目次



巴里より目次

- 芝居の後 (一一〇)
- 巴里のいろは (一一二)
- 「日本の聲」 (一三四)
- 「モリエールの家庭」 (一三五)
- 魔術街 (一四五)
- 五月一日 (一四九)
- 巴里のいろいろ (一五四)
- 飛行機 (一六二)
- 巴里まで (一七〇)
- ツツルの二夜 (一八三)
- 「暗殺の酒場」 (一九六)
- 巴里にて (二〇一)
- ノオトル・ダム (二〇九)
- ロダン翁 (二一一)
- レニエ先生 (二二四)
- 巴里の旅窓より (二二八)

- アミアン市 (二四三)
- 海峡の船 (二四六)
- 倫敦より (二四九)
- 倫敦を立たうとして (二六三)
- 倫敦の宿 (二六七)
- ブリュッセル (二七一)
- アントワープ (二七八)
- 巴里の獨立祭 (二八六)
- 歐洲婦人の髪 (二九四)
- 日記の一節 (三〇〇)
- 杜鵑亭 (三〇三)
- 獨渡洞 (三一三)
- ミュンヘン (三一七)
- 維納 (三二六)
- 伯林停車場 (三三一)
- 伯林の一瞥 (三三七)
- 巴里より目次



巴里より目次

- 和蘭陀へ着いた夜(三四一)  
和蘭陀の二日(三四九)  
巴里に於ける第一印象(三五〇)  
妻を送りて(三六一)  
マダム・キキイ(三六四)  
未來派の藝術(三七五)  
ホテル・スフロオッラ(三八四)  
火曜日の夜(三九〇)  
平野丸より良人に(三九九)  
品子への書翰(四二六)  
ミラノ(四三四)  
ゴネチヤ(四四一)  
フイレンチエ(四四八)  
巴里を去らうとして(四五五)

装幀及び挿畫

徳永柳洲氏作

- 巴里の街のマロニエ(箱)  
巴里の女(表紙)  
セエヌ河岸の古木屋(見ガへし一)  
キャップエの夜(見ガへし二)  
畫室の女(三色版)  
巴里のノオトル・ダム(三色版)  
巴里のコメデイ・フランセエズ座の希臘劇「エザブ王」(コロタイプ版)  
ジュリヤンのアトリエ(コロタイプ版)  
リュグサンブル公園の池(コロタイプ版)  
巴里の肉市場の朝(コロタイプ版)  
巴里の祭日の見世物(コロタイプ版)  
巴里より目次



巴里より目次  
附録、巴里に於ける日本書家及び文人、リュクサンブール公園にて撮影。(コロタイプ版)



巴里より

與謝野 寛  
與謝野 晶子

上海

熱田丸から上陸した十餘人の旅客は三井物産支店長の厚意で五臺の馬車に分乘し、小崎用度課長の案内で見物して廻つた。上海へ来て初めてガタ馬車以外の馬車に乗つた人も少くない。勿論僕も其一人だ。南京路、四馬路などの繁華雑沓は銀座日本橋の大通を眺めて居た心持と大分に違ふ。コンクリイトで堅めた大通を柔かに走る馬車の





上海の南京路

乗心地が第一に好い。護謨輪は少しも音を立てず、聴く物は唯馬の蹄音ばかりである。自動車、馬車、力車、一輪車、電車、あらゆる種類の車と、あらゆる人種を交へた通行人とが絡繰としながら些の衝突も生じないのを見ると、神田の須田町や駿河臺下でうろうろして電車に膽を冷すのはまた餘程呑氣だと思ふ。

十字路毎に巡査が立つて電車の旗振の代り通行人の警戒とに當つて居る。旗を振るのでなく、赤い鉢巻をした、脊の高い、目の光つた印度人の巡査が直立して無言の儘靜かに片手を上る許りだ。日本の巡査も

交番を撤廢して斯う云ふ具合に使用したいものである。支那商店の軒頭からは五色の革命旗を街上へ長い竿を横へて掲げて居る。間に合せに出した白旗もあるが、二つ巴に五色で九曜の星を取巻かせたり、「我漢復振」などと大書したりしたものもある。申報の號外を子供が賣つて歩く。併し自然に中立地帯をなして居る土地だけに格別革命軍の影響は少い。東京での騒ぎの方が餘程大きい様である。

南京路から靜安寺路へ出て張園と愚園とを觀た。評判程の名園でも何でも無く、殆ど荒廢に屬して居て、つくね芋の様な人為的の庭石が目障りになる許りだ。愚園の方は小さな淺草の花屋敷で、動物の外に一寸法師や象皮病で片手が五十封度の重量のある男の見世物などがあり、勸工場や「隨意小酌」と貼出した酒亭もある。滿谷君外三人の畫家が象鼻を上げた様な奇態な形の瓦樓の一角を寫生し終るのを待つて一緒に郊外に出たが、何處までも路幅の濶い、そして黄ばんだ白楊の並木の續いて居るのが愉快であつた。

あちこちの畑の中に死人の棺をむき出しにして幾個も捨ててある。聞けば死者があ



ると占者がどの方角のどの地へ埋めよと命ずる儘に、誰の所有地であらうと構はず棺を持つて来て据ゑて置く。そして三年の後に土を着せる。土地の所有者は其れを拒む事が出来ない習慣であると云ふ。道理で見渡す限り點點として、どの畑にも草に掩はれた土饅頭が並んで居る。此分では天下の田は盡く墓となり相であるが、何れも無名卑民の墓であるから十年二十年の後には大抵畑主が鐵に掛けて崩して仕舞つて格別苦情も出ないのだと云ふ。其れにしても不經濟と不衛生とを兼ねた野蠻な埋葬法である。

李鴻章の廟を觀ようと思つて郊外へ出たが、廟は南洋大學堂の學生から成る革命軍の健兒の屯營に使用せられ、武裝した學生が門を守つて居て入る事を謝絶した。車上から伸上つて覗くとクルツブ會社から寄贈したと云ふ李鴻章の銅像の手に白い革命旗を握らせ、其前に祭壇の様な物が設けてあつた。自分には其れが兒戲の如くに見えて何の感動も起らず冷然として一瞥し去る外は無かつた。一體今度の革命軍と云ふものは内外人の心が北京の政治に厭き果たと云ふ都合のよい機運に會したので意外の勢力



上海のキニマの市場

となりつつある様であるが、實力を云へば西南戦争に於ける鹿兒島の私學校の生徒の如き者が各地に騒ぎ立つて居るのに過ぎないと思はれる。漢口の松村領事が居留民を引上させたのは大早計であつたと云ふ批難が上海では行はれて居る。松村君が自分の夫人だけを留めて置くに就ての岡焼ばかりでは無いらしい。

馬車を四馬路に返して杏花樓で上海一の支那料理の饗應を受けたが、五十品からの珍味は餘りに饒きに過ぎて太半以上喉を通らず、健啖家の某某二君も過易の様子であつた。自分は熱い二杯の老酒に酔つて更に



諸友と馬車を驅り、日本人の多く住む米租界の吳淞路を過ぎ、北四川路の新公園を觀、白石六三郎氏の別墅六三園に小憩した。白石氏は長崎の人で上海第一の日本酒樓六三亭の主人であるが、居留邦民中の任侠家として名高い。六三園は純粹の日本式庭園で、諏訪明神の祠があり、地蔵の石像があり、茶亭が設けられ、温室には各種の花が培養せられて居た。

歸途日本ホテル豊陽館の前で馬車を捨て、此處で一行は二隊に別れて隨意行動を取ることにしたが、もう日が暮れて居た。自分と徳永外三君とは領事館に西田書記生を訪うたが不在であつた。南京路へ出て徳永君の訪うた某齒科醫も不在であつた。十時に物産會社から特に出して呉れるランチに乗る迄には四時間以上もあるので、四馬路の方へ掛けて雜沓の中をぶらぶらと彷徨き廻つたが容易に時間を経たない。今一度日本人の住んで居る方へ行かうと決したが、其れが失策の第一であつた。反對の方角へ引返したけれど、行けども行けども晝間歩いた街へは出ない。路を問はうにも憐寸を自來火と呼ぶことを知つた以外に支那語を心得た者は無かつた。やつと英語の解る巡查に

出會つた頃は二十町ばかりも違つた方角へ行き過ぎて居た。後戻りをして某と云ふ怪しげな日本料理屋を見つけて漬物で茶漬を喫し終つた時は九時であつた。埠頭へ来てランチに乗つた頃雨が降り出した。十時を打つても満谷君等の一行は歸つて來ない。猩猩黨は何處かで飲み倒れて仕舞つたのであらう。熱田丸の濡れた舷梯を上つて空虚な室に一人寝巻に着更へた時はぐつたりと勞れて居た。枕頭に武田工學士からの招待状が届いて居た。武田木兄君が此處の領事館に在職して居たのは意外である。(十五日)

### 香 港

歐洲航路の船に横濱神戸から乗合せた者は大抵香港へ着く前に話題が盡きて仕舞ふ。碁や將棋は嗜好が無い者には興味を惹かないし、トランプは日本人に取つてきま





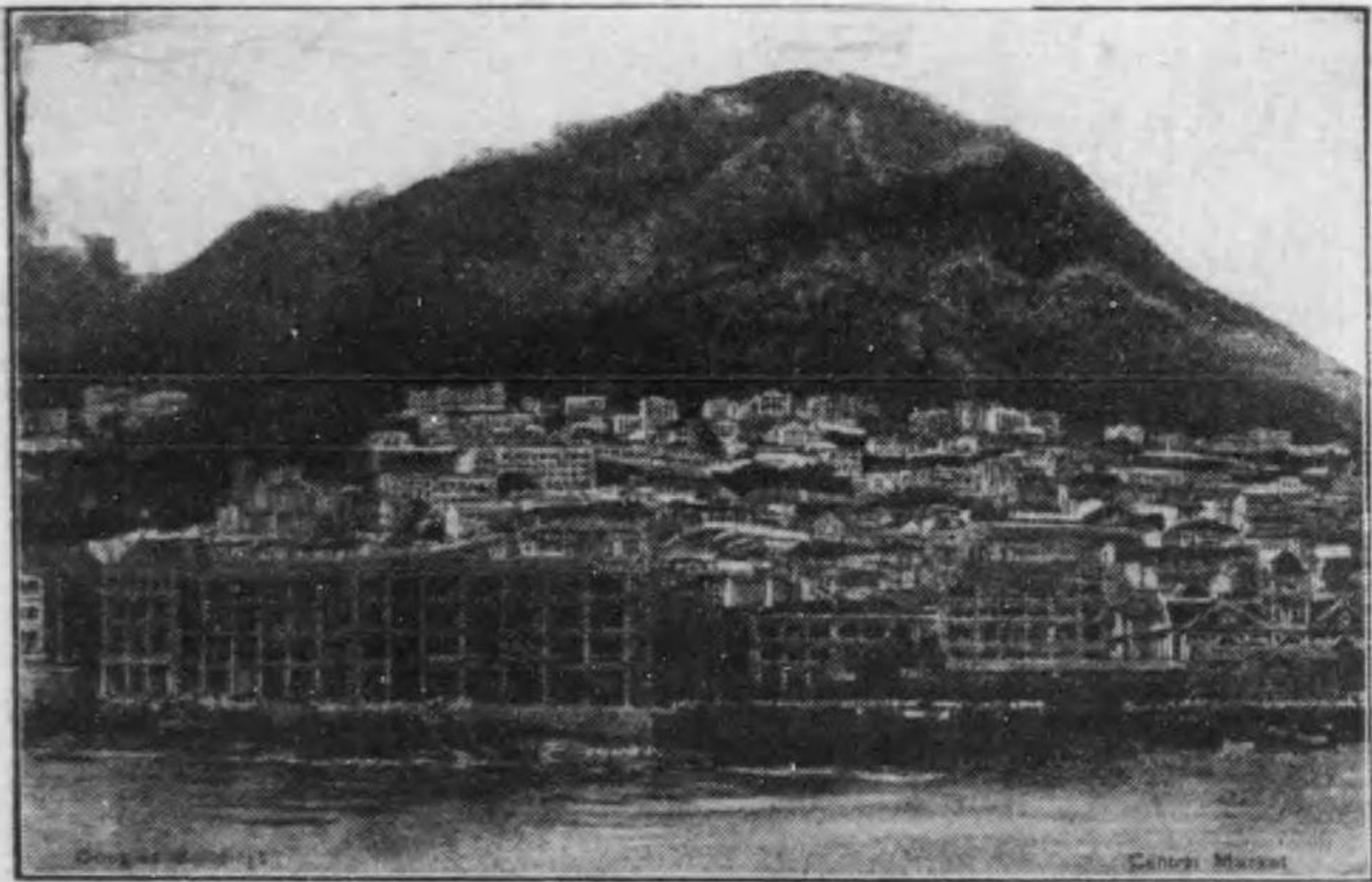
香港の全景

八  
て面白い物で無い。甲板球戯は我我に最も好く時間を費させ且つ運動にもなるが、晝間に限られた遊戯であつて其れも倦き易い日本人には二時間以上續け得ない様である。我我は何がな夜間の就寝までの時間を費す娯樂を欲して居る。或晩近江醫學士が偶然専門である婦人科の話を諸誌交りに述べ出すと奇怪な質問が續出して互に頷を解いた。支那、馬來、瓜哇あたりの賣春婦の通を話した人もあつた。蓄音機が持出されて僕に初めて呂昇を聴かせて呉れた夜もあつた。航海中は笑はされるのが何より好い。眞面目な話は禁物である。之は日本人の體質にも習慣にも由るのであらうが、讀書などに凝ると後で船暈を感ずる原因に成り易い。

香港に着く前夜に「第一回熱田演藝會」が一二等客と船員とに由て船尾甲板で催された。一等室の女給仕が三味線を把つて引き、端唄、手踊、茶番、假色、劍舞、手品などの續出した中で、徳永の鼻糞まろめ、長谷川の歌澤、三好のハモニカ、近江の追分などが我我二等客の選手の優なるものであつた。徳永と長谷川はウイスキーで元氣を附けたらしく意外に平氣な様子で遣つたが、近江の處女然と顔を赤くして居たのは愛嬌であつた。満谷、小林、三浦、僕等の如き隠し藝を持たない者は却て観客となる。幸を得た。牧野事務員が富樫に扮して滑稽勸進帳を演じて居る頃わが熱田丸は香港の港口に着いて居た。港内に於ける一日の碇泊料六百圓を節約する爲め今夜は港外に假泊するのである。

翌朝六時に船は港口に入り、暹羅の戴冠式に列せられる伏見若宮殿下の一行を載せて伊吹、淀の二艦と廣東から来た警備艦宇治の碇泊して居る間を過ぎ、維新前馬關砲撃に参加した英艦ティアマ號が武装を解いて白く塗られ記念品として繋留してあるのを左舷に見つつ港内の中央に碇着した。三井物産のランチに乗つて上陸しようとする時





望りよ内灣

一〇

僕は香港電信局からの通知を受取つた。日本から上海を経て轉送された電報が届いて居るから、墨國銀三弗十五錢を持參して受取れと云ふのである。僕は神戸や門司で五六通の電報を接手したが此處まで追送して呉るのは其等の祝電では無さ相だ。家庭に病人でも出来たか、子供が大怪我でもしたか、婦人と子供許りを残して來た家庭に何か不吉な危難でも生じたかと、平生から餘り呑氣でない神經質の男は俄に心配でならなかつた。多分此處から歸國せねばならぬ運命が來たのだらうと人知れず決心して兎も角も電報受領方を永島事務長に依頼



港香るたみ

一一

し、直に披いて見て至急を要する事なら電話を三井物産の支店へ掛けて呉と云ひ残して諸君と一緒にランチに乗つた。

井クトリヤ・ピンクは灣に臨んで屹立し、其山脈は左右に伸びて山腹と山下とに横長い市街を擁して居る。後に南支那大陸の九龍半島を控へて居る所は馬關海峡の觀があるが、ピンクの屹立して居る光景は島原の温泉が嶽を聯想するのであつた。埠頭は五階家が同じ格好の屋根を揃へて一線に列んだのを遠望すると、大きな灰色の下駄箱を並べた様に醜かつたが、近づいて見ると其れ程不快な色でも無かつた。棧橋へ上つて



東洋汽船會社の前あたりへ來ると、一本線の電車や二頭の牛を附けた撒水車や、赤い地に眞鍮粉の梨地をした力車などが先づ目を引いた。チエスタア・ロオドの三井物産の支店を訪はうとして横の小路へ入つた時、白い若くは水色の五階建が稍斜めに兩側を割つた間から浅い藤紫の色をした朝のピンクの一片が見えたのは快かつた。

三井物産の支店長が附けて呉れた社員に案内せられて山の手の街を二町程行つてケエブルカアに乗つた。三十度から四十五度の大傾斜六千尺を一條の鐵索に引かれて我が車は疾走しつづ昇る。兩崖には幹の白い枝から數尺の鬚を垂れた榕樹や、紅蜀葵に似た花を一年中つけて居ると云ふ樹や、紫色をした晝顔の一種五爪龍などが目に入る。崖腹にある二箇所の停車場には赤布を頭に巻いた印度巡査が黙つて白い眼を光らせながら突立つて居る。山上の幾處に建てられた洋人の家屋のとりどりに塗料の異ふのが車體の移ると共に見えなくなるのは活動寫眞の様である。七分間で最終の停車場に下車し、香港ホテルの門前に出て支那人の兒く長い竹の柄の擔ふ橋椅子に乗つた。橋夫は皆跣足である。山上の路は總てコンクリイトで固められて居る。石を敷いた所もある。例へば箱根の新道をコンクリイトで固めた様なものだ。

七十餘年前この地が英領となる迄は禿山であつたのを、東洋と熱帯地方との有らゆる植物を移して現に見渡す様な蒼蒼たる秀麗な山地とし、一方には上海に次ぐ繁華な都會を建設したのである。東區の山の如きは恰も岡山の操山を見る様な風に翠色を呈して居るが、其れが皆二十年前に移植した松だと云ふ。對岸の支那領に屬する地は赭色をした自然の儘の禿山であるのに香港側は全く人為で飾られた山だ。人間が自然を改造し得た偉觀を見ると肩身の廣くなる心地がする。

測候所を過ぎて絶頂の信號所に達した。其處にはナポレオン帽を被つてカアキイ色の服を着けた英國の陸兵が五六人望遠鏡を手にして立番をして居る。郵便船が入る度に號砲を打つのである。灣内の水は草色の氈を敷き詰めた如く、大小幾百の船は玩具の様に可愛い。概して鳥瞰的に見る都會や港灣は美でないが、此處のは反對に美しい。足下には層をなして市街の屋根が斜めに重なり、對岸には珠江の河口を抱いた半島が弓形に展開し、其間に瓢を割いた様な形で香港灣が藍を湛へて居る。振返ると背面の



入江は幾百の支那ジャンクを浮べて淺黄色に曇つたのが前面の忙しげな光景と異つて文人畫の様な平靜を感じしめる。畫家達が要塞地だから畫を描いては悪からうと問ふと、番兵は畫を描くのは構はないが草木の花を摘むなと答へた。自然を愛すると云ふ日本人に却つて是丈の植物を保護する心掛は無い様である。

再びケエブルカアに乗つて山を降り、香港公園で椰子類其他の珍奇な熱帯植物を觀、日本俱樂部で午餐を喫してから車に乗つて東區の福裕方を見て廻つた。回回教の寺院で白衣の尼の列を珍しがり、共同墓地に入つて大理石の墓の多いのに驚き、其處でバクレッツと云ふ樹の花の様な花の匂の匂き、愉園に入つて蒸す様な眩しい熱帯花卉の鉢植の間に椅子、二本のライチ樹の蔭の藤椅子を占領して居る支那婦人の一團を眺めながら、珈琲を取つて案内者某君の香港談を聞いた。

香港の今日の温度は六十四度である。人は猶夏服を着て居る。歩けば汗が出る。海から吹く風の涼しいのが嬉しい。此地に住んで居る支那人は平素は四十萬であるが、本國の革命騒ぎ以來廣東や遠く蘇州杭州あたりから來た避難民を合せて今は五十四五萬

に達して居る相だ。廣東が獨立して以來俄に斷髮者が殖えたので剪髮店が大繁昌である。其店頭の旗に「漢興剪髮」などと大書して居る。日本人の住者は醜業婦を加へて纔に一千足らずである。廣東へは對岸の九龍停車場から汽車に乗れば四時間で達せられ、澳門へは汽船二時間の航程だから、有名な賭場見物に行かないかと勧める人もあつたが、自分は少し腸を痛めて居るので辭した。

更に力車に乗つて引返し、西區の支那街を一周して買物をしながら埠頭へ出たが途中で畫家の柚木君の車が衝突して菓子



香港の風景



屋の昇いで居た荷を滅茶滅茶にし、車夫と菓子屋との大立廻りが初まり、荷揚場の苦力や彌次馬に取巻かれて車上の柚木君が青くなつたのは早速船内で發行する「熱田バツク」第二集の好材料となるであらうが、一時は自分等も驚いて車を下りた程であつた。夜に入つて船の上から観る香港の燈火は、全山を水晶宮とし其れに五彩の珠玉を綴つたとも謂ふべき壯観であつた。また兩岸の燈臺からは終夜探海燈で海上を照して居た。碇泊中の船舶では二萬噸のマンチユリアの燈火が最も光彩を放つて居た。サンパンに乗つた支那娼婦謂ゆる「水妹」が薄暗い燈火を點けて灣内を徘徊して居た。夜更けて歸つて來た某君の話に由ると日本の公娼を抱へた家は二十戸以上もあると云ふ。

今日牧野事務員に託してマルセイユ迄行く仲間丈甲板用の藤の寝椅子を買つて貰つたが、一個一圓五十錢づつとは廉い事である。氣掛りであつた電報は却つて「スベテアンシンセヨ、アキ」と妻から寄越した物であつた。こんな事で安心料三圓十五錢を香港の電信局へ支拂つた人間は永久僕一人であらう。(十一月二十日)

### 新嘉坡

快い北東の季節風に吹かれ、御納戸色の絹を展べた様な静かな海面を過ぎながら、十一月二十五日の朝蘭領のアノムバ島を左舷に見た。香港を發して以來毎日一二回の驟雨があるので想像して居たよりも涼しい。人人は食堂や喫煙室に入つて明朝新嘉坡から出す手紙を認めるのに忙しく、何時の間にか細君の名を互に知つて仕舞つて居るので三浦工學士のペンを走らせて居る後から「たま子さんに宜しく」と聲を掛ける者もある。昨日は美味い最中が出來たが今日の茶の時間には温かい饅頭が作られた。晚餐には事務長から一同浴衣掛で宜しいと云ふ許しが出る。食卓に就て見ると今夜は日本食が特に調理せられ、鰹の味噌汁、鮪の刺身、鯛の煮付、鮓と瓜の酢の物、澤庵と奈



良漬、何れも冷蔵庫から出された故國の珍珠である。日本酒の盃を擧げて明朝上陸する三吉、吉田外三氏と互に健康を祝し合ふ。道づれに別れるのは何となく淋しい。熱田丸記念會を數年後東京に開かうと云ふので會員簿に互に自署し、其れが蕪蕪版に刷られて直に配附せられた。原籍を知つて話し合ふと土居中尉の夫人が僕の妻の縁者である事が解つて奇遇に驚いた。夫人は一歳の赤ん坊を伴つて馬來に護謨栽培をやつて居る良人の許へ健氣にも初めて旅行するのである。船はもう宵の内に新嘉坡へ着いて居た。

翌朝は殆ど赤道直下である程あつて早天から酷暑の感がある。僕一人先づ目覺めて船甲板を徘徊して居ると、水平線上の曙紅は乾いた朱色を染め、他の三方には薄墨色を重ねた幾層の横雲の上に早くも橙色や白金色の雲の峰が肩を張り、曉の明星は強い金色を橋の横に放つて居る。渺茫たる海面に鯨が列を爲して現はれたかと思つたのは三連先の埠頭から二挺櫓を一人で前向に押して漕ぐ馬來人の小舟の縦列で、彼等は見る中にもわが船を取圍んで仕舞つた。何の小舟にも赤い帽と赤い腰巻及び白い目と白い



新嘉坡

新嘉坡の部

齒が光つて居る。中に一片の丸木船に杓子の様な短い櫂を取つて乗つて居る丸裸の黒奴が跣坐をかき乍ら縦横に舟を乗廻して頻りに手眞似で錢を海中に投げよと云ふ。起きて來た連中が一錢銅貨を投げる振をする。と彼は頭を振つて應じない。五錢白銅以上を要求するのである。白銅の持合が無いので一人が十錢銀貨を投入れると、彼は黒い大きな體を斜に海中に跳らせて銀貨が未だ波の間を舞つて居る瞬間に其れを捉へて上つて來る。ベックリンの繪の中の怪物の心地がした。土地柄として沼にも川にも沿岸の海にも鰐が棲んで居て、一寸端艇が顛覆



しても乗組人は一人も揚つて来ないのが普通なのに、此錢拾ひ丈が釣や鱈の害に遇は  
ないのは一つの不思議となつて居ると云ふことだ。

海上から望んだ新嘉坡は香港上海に比して遙に風致に富んで居る。ゴシックの層樓  
の多いのは早く出来た市街丈に保守的な英國風が餘計に保存されて居るのかも知れな  
い。一般に馬來全島が非常な低地であつて最高の山が纔に海拔五百九十九尺しか無いの  
だから、山と云つても都て丘陵の様なものであるが、其れに等を立てた様な椰子類の  
植物が繁茂して居るのは遠くから観ても山の形が日本とは全く異ふ。市街に向つて右  
のタンジョン・カトンの岬に伸びた一帯の大椰子林は新來の旅客の目を先づ驚かすも  
のである。又對岸の蘭領のリオ島外諸島が遠近に由つて明るい緑と濃い藍とを際立た  
せ乍ら屏風の如く披いて居るのも蠻土とは思はれない。灣内の小波は大魚の鱗の様  
に日光を反射して白くきらきらと光つて居る。

市街は概ね二階建てである。人口は支那人が二十五萬、馬來人が七萬、ヒンヅ種の印度  
人が之に次ぐ。何處へ行つても支那人の普及と彼等の商業上の實力の豊富なものには

感歎せざるを得ない。經濟上の實權は支那人の外に猶アルメニヤ人とアラビヤ人とが  
握つて居て英獨人も其等には敵し難い。市内の目ぼしい家屋の過半は此二人種の所有  
である。此地には一切營業上の課税が無く、唯だ家屋税を家主より徴收せられる丈であ  
る割に家賃は廉い。間口七間奥行十五間の二階家が一箇月八九十圓である。三井物産  
會社の支店などは可なり大きい立派な建物であるが百五十圓の家賃だ相である。

僕等は馬車を驅つて見物して廻つたが、途上の所見を少し並べて云ふと、土の色が概  
して印度黄若くは輝紅を呈し、其れが雨水に溶解すれば美しい橙黄色の水溜が出来  
る。驟雨が来れば涼しいが、大抵三十分で霽れて仕舞ふと林と眞晝の日光が直射す  
る。海上から来た我等は二三町の路すら歩く勇氣が無いのに、馬來人や支那人は平氣  
で傘もささずに跣足の儘歩いて居る。一體に土地に住んで居る者は西洋人でも雨の外  
は傘をささない。家造りが大抵歩廊を備へて居るから其下を歩めば日光や驟雨が避け  
られる。馬來人やヒンヅ人が黒光のする體に黄巾赤帽を戴き、赤味の勝つた腰巻を纏  
つて居る風采は、極熱の氣候と、朱の色をした土と、常に新緑と嫩紅とを絶たない熱



帶植物とに調和して中悪くない。

此處の人力車は大抵二人乗で、其が日本出來の金びか模様の有る物である。馬車も多  
いが自動車多數な事は上海に倍して居る。電車は香港と同じく一本電線を用ひて居  
る。荷車は二頭の牛に挽かせる物と定つて居るらしいが、牝牛はヒンヅ教でシゾ神の  
權化である所から絶対に使役しない。牝牛をも大切にする風があつて、其角を繪具で  
染め又は金屬で被うて居るのを見受けた。又牝牛の糞を幸福の呪に額へ塗つて居る  
ヒンヅ人にも澤山出會つた。ヒンヅ教の一寺院を訪うて見たが、屋上にも堂前にも牝  
牛の像を祀ること恰も天神様の前の如く、牛糞を塗つた四五人の僧は牛皮の靴を穿い  
て居る僕等を拒んで堂内に入れ無かつた。

海上から見えて居たタンジョン・カトンの大椰子林へ馬車を驅つて行つた。之は天然  
林でなく幾區劃にも分れて所有主を異にする植林である。凡て壯年期の椰子許りて、其  
間に近年護謨栽培熱の流行する影響から若木の護謨樹を植ゑた所もある。亭亭と大毛  
槍を立てた如くに直立し又は斜に交錯して十丈以上の高さ達して居る椰子林を颯爽

たる驟雨に車窓を打たれ乍ら、五臺の馬車が赤い土の水煙を馬蹄の音高く蹴立てて縦  
斷するのは、覺えず「好い氣持だ」と叫ばざるを得なかつた。柄に無い聞書をするが、  
椰子が成長して實を結ぶ迄には七八年を要し、他の熱帶植物と同じく常に開花し常に  
結實するので、一樹が一年に平均八十個の實を産し、一個の卸値段を三錢として毎年  
二圓四十錢の收入が一本の椰子から揚がる筈である。椰子油、椰子水、椰子酒の採收  
を初め、其他椰子の用途は頗る多いらしい。

椰子林の中の觀海旅館に少憩して海に近い廻廊で珈琲を喫し乍ら涼を入れた。ホテ  
ルの淡紅色の建物が周圍と好く調和して居た。頭上の屋根裏に這つて居る名物の守宮  
がクク、ククと日本の雨蛙の様に鳴くのはクラリネットを聞く趣があつた。日本の守  
宮と違つて人を咬む恐れは無いが、飲料が好きなので飲みさせた牛乳や珈琲を天井か  
ら落ちて來て吸ふ事が常にある相だ。守宮は市の場末の家にも澤山に這つて居る。今  
夜三井物産の社宅に泊つて前年日本の貴賓の寢られたと云ふ二つの寢臺へ得意になつ  
て横たはつた小林と三浦は、終夜この守宮に鳴かれて好い氣持がしなかつたと後で話



し居た。牛鳴をすると云ふ痛快な蛙も澤山に居る相だが僕等は聞かなかつた。  
 新嘉坡を過る旅客が必ず行つて観る價値のあるのは博物館と大植物園とだ。博物館の規模は東京のに比べて小さいが、馬來、印度、南洋諸島の動植物、古器物、風俗資料の彙類は可なりに豊富で、陳列法も親切に出来て居る。南洋の家屋に日本の神社の木や鯉木と同一の物を附し、水害を避ける爲めに床下を高くしたのなどを初め、祭具、武器、食器等に我國の上古と吻合する所の少くないのを観て僕の考古學的嗜好は頻りに刺戟せられた。熱帯の蝶や蛾が日本の其れと全く異つて多種多様の絢爛な色彩に富んで居るのは目が覺める様である、其他全身が美しい翡翠色をして細やかに甚だしく長い青蛇、支那人が二人掛りて容易に撲殺し好んで其肉を喰ふと云ふ馬來の大蛇バイソン、蠟斯科の蟲で身長二寸五分許り、ギオロンの形と色をしたカラビデエ、同じく群青色をして柏の葉を壓に二枚重ねた如き擬態を有し、葉莖、葉脈等を明かに示せるピリムシセ、又緑赤色をして南天の葉を四枚横に並べた様な擬態を現して居るク羅馬リイ等は此通信を書く時の記憶に鮮かに残つて居る。

植物園は如何にも大規模に熱帯植物の有らゆる種類を集めて居て、東京の植物園などは之に比べると不親切極まると云つてよい。少しは日本の温室で見受る物もある様だが概して初対面の物が多く、同じ蘭科でも種類が無数なのである。花卉も面白けれど、一體に熱帯植物は幹と葉の姿勢や色彩が奇抜に出来て居る。葉も花も多肉性と韌性に富み、色彩が濃厚鮮明である。四季の區別が無くて不斷に開花、結實、發芽、落葉を續けて居る。季候のせいだ發育の旺盛である胡瓜とか朝顔とかは、五六日で發芽し半月で花と實を持つ相である。日本では尺に満たない金星草が幅二尺高さ一丈に達して居る。五六丈の幹の上に芭蕉に似た葉を扇形に三十五六葉も並べて直立して居る扇椰子、滴る様な血紅色をした椰子竹の一種、紅蜀葵の様な花を椶の様な大木に一概に附けて、芝生の上へ圓形に其花を落すサンバ樹などの蔭を踏むと、極樂鳥と云ふ類の美しい鳥が熱帯に棲んで居るのも不思議でない氣がする。序に云ふが博物館も植物園も觀覽料を取らない。

其れから植物園附近のエコノミツク・ガーデンに入つて護謨林を見た。此處の栽培



法や採收法は以前模範的と稱せられたさうだが今は既に舊式に屬して居る。新式のは馬來半島のジョホオルへ行けば觀られると云ふ事だ。樹幹にはどれにも左右から矢の羽形に斜めに小刀で缺刻を附け、更に中央に溝として一線が引いてある。左右の缺刻から沁み出る護謨液が中央に集つて落ちるのを採收夫が硝子の小杯に受けて廻るのである。採收は未明から午前六時迄に終らねばならないと云ふ事だ。僕等も試みに小刀を取つて缺刻を附けて見ると直に牛乳の様な液が滴り、其れが端から凝結する。手に取つて兩指で引いて見ると、既に弾力性を持つて居て伸縮する。

近年護謨林熱の昂騰した頂上には當地の雜貨商中川某が百七十五エカアの林を三十六萬圓に賣つたのを第一として二三萬乃至六七萬圓の奇利を博した者があつて、護謨の價も一ポンド十四五圓まで暴騰したが、現今では其反動で二圓に下落して居る相だ。併し着實な其道の人の批判では假ひ一圓に下つても會社經營では四五割、個人經營では六七割の利益は確かだと云つて居る。現にジョホオルで護謨林を經營して居る日本人は三井の二萬五千エカア、三五公司(阿久澤等)の二千町歩を首とし、二三百エカ

アのアの小經營者は數十人に上り、一便船毎に護謨業關係者の日本から來る者が三四人を下らない有様だ。栽培後六年で採收期に達するのであるから是等經營者の成否は猶前途を待たねば斷じ難い。

ジョホオルでの護謨栽培は一年の借地料が一エカア五十錢だ。先づ山地の密林を伐り開いて無数の大木を燒棄するの費用が要る。此燒棄が容易で無い。其れから地ならしをして植附を終るまでの人夫其他費用一切が百エカアに就て千圓乃至二千圓を要し、監督者の家屋の建築に千圓乃至二千圓を要する。以上は創業費だ。次いで三年間の草取に使用する人夫の賃金が一萬五千圓乃至二萬圓、之は繼續費だ。其れで二萬圓乃至二萬五千圓の資本が無くては百エカアの植林は出來ないと云ふ事に現在相場が極つて居る。

護謨の苗木は十八尺四方の中に一本を植ゑる。採收は六年後からだ草取は三年間でよい。肥料は少しも要しないでよく發育する相だ。採收は六箇月すれば六箇月休止せねばならない。一本の樹から一日に凡そ一ポンドの採收が出來ると云ふのが眞實な



ら大した利益のある筈である。人夫には馬來人と支那人を使用して居る。彼等は甚だ勤  
 勉で一日の賃金(食事は自辨)が六十錢である。護謨林經營者の竊に憂ひて居る事は近  
 き將來に人夫の不足する事であるが、或人は一年後に濠洲の眞珠業が廢滅するに際し  
 日本へ歸る該地の人夫一萬人を此地で喰ひ止める事が出来ると云つて樂觀して居る。  
 新嘉坡へ輸入する石炭の總額は一年に六千萬噸だが、此半額は日本炭と撫順炭で占  
 め、他の半額は濠洲炭、英國のカアジフ、ホルネオ炭等である、近頃蘭領の某島で新  
 嘉坡と競争して石炭の集合地を彼に奪はうとする計畫がある。當地では石炭の出入に  
 棧橋費一噸につき三十五錢取られる如き費用を要するのを彼に於ては一切省略しよ  
 うとするのだ相である。

護謨林を出て馬車に乗り、案内者となつて呉れた三井物産の支店員から、故長谷川二  
 葉亭君の遺骸を此地で茶毘して追悼會を開いた時の話を聞き乍ら、前年護謨林に従事  
 して居た長田秋濤氏夫妻が住んで居たと云ふ林間の瀟洒たる一屋を過り、高地にある  
 三井物産支店長の社宅の樓上で日本食の饗應を受けた。刺身皿の鮪は此海で取れたの



新嘉坡

(坡嘉新)人士來馬るす居家に上の澤沼

だと云ふ。卓上に印度式の旋風布を吊し、其  
 網の一端を隣室から少年の黒奴が斷えず引  
 いて涼を起すのは贅澤な仕掛である。市街  
 の夜景を見て歩きたいと思つたが、最終の  
 小蒸汽が午後四時に出る外、その後は一切  
 出さないと云ふ窮屈な規定を憤慨しつつ本  
 船に歸つた。最も夜間に小舟を備へない事  
 も無いが、土人の船頭には脅迫的な行爲が  
 あつて危険だと忠告せられて斷念した。  
 翌二十八日は午前十時に諸友と再び上陸  
 し、數隊に分れて案内者無しに歩いた。滿  
 谷、長谷川、徳永、近江、柚木、志貴、酢屋、僕  
 の八人は何の目的も無く電車の終點まで乗



つて下車し、引返して偶然博物館の前に出て、満谷等は其附近を寫生し、徳永、志貴近江、酢屋と僕とは加特力教會の經營に成る當地の模範小學を參觀した。生徒は男子許りだが、小學科を七年、其上に二年の商科を通じて凡そ一千人を教育して居る。教師は英人と印度人、生徒は洋人を除いて雑多の人種を交へて居る。生徒は大抵跣足だ。併し感服した事には教授の用語に一切英語を用ひ、小學の一年生がナショナル讀本第二の程度の物を習つて居る。商科の生徒に長崎生れの木田と云ふ日本少年が一人居て三年前に教會から此處へ送られたと云つて居たが、寄宿舎に許り居るので日本語を忘れたらしく會話に困つては英語で答へるのであつた。

神戸から同船して來た津田の店を訪うて料らず馬來街の遊女街に出た。同じ様な公娼の街は四箇所あるが之が第一に盛だと津田が語つた。凡て同じ形に建てられた間口二間の二階造りて青く塗つた鐵の格子の入つた階下に一個の卓を据ゑ、籐椅子に凭つた獨逸、露西亞の娼婦が疲勞と暑さとで死んだ者の如く青ざめて沈黙して居る。日本娼婦は浴衣に細帯、又は半襦袢一枚の下に馬來人のする印度更紗の赤い腰巻をして、

同じ卓に凭つて花牌を弄んで居る者、編物をして居る者、大阪版の一体諸國物語を讀んで居る者、何れを見ても天草産の唐茄子面をした獐猛な怪物許りである。洋娼等は頻りに僕等の一行を呼掛けたが、日本娼婦は流石に同國人に對して羞恥を感じらなく何れも伏目になつて居るのが物憐れて、之が夜に入れば猿芝居の猿の如く、友禪縮緬の眞赤な襦袢一枚にこてことした厚化粧と花簪に奇怪至極の裝飾を凝し、洋人、馬來人、印度人に對して辣腕を振ふものとは思はれなかつた。

日本娼婦の数は坡港許りに現に六百四五十人（此外に洋妾となつて居る女は百人もある相だ）あると云ふから、印度、濠洲、南洋諸島へ掛けては六七千人にも上るのである。彼等は坡港を「都」と稱し、其他を「田舎」と稱して恰も東京から千葉や埼玉へ出掛ける位の心持で便船毎に其等の遠國へ往復する。昔の倭寇の意氣は彼等に由つて繼承されて居ると云つて好からう。

内地に居る日本人は海外の醜業婦と云へば一概に憂目を見、又墮落して居る者の様に考へるが其れは全く反對の觀察である。彼等の生活の贅澤な事は到底内地の藝娼妓



の想像も及ばない所だ。彼等の装飾品を供給する爲に日本の雜貨店の多數が何れ位海外で富を造つて居るか。彼等の三度の食事が何れ位美味に飽いて居るか。又彼等の愛國、愛郷、孝悌の情操が何れ丈根強くて、年年祖國を富ませて居る事が如何に大きいか。上海、香港、新嘉坡、何れの日本居留民中にあつても公共的の事業に物質上の基礎となつて居る者は常に彼等では無いか。識者にして是等の實情に通じたならば、貧乏な日本の現狀で實生活と懸け離れた骨董道徳を楯にけちけちする事の非を悟り、内地に於て賣れ口の無い女をどしどし輸出向として海外に出だす事の國益である事を主張するであらう。

日本娼婦の稼ぎ高は全く抱主と折半で、衣類を除いた外食物其他一切の雜費は抱主の負擔であり、此外内地と異つて纏頭の所得が多いと云ふ事だ。一人に就て一箇月の所得を尠くも五十圓と見積り、その半額を衣服に費すとしても二十五圓の貯金をする事は容易である。横濱や神戸、大阪あたりから渡來した女は情夫の爲に浮ぶ瀬の無い境遇に墮ちる者が多いが、長崎縣の女は意志が堅くて、情夫があつても物質上の損害を

被る事が少く、四五年も居れば大抵二三千圓の貯金を郷里に送る相である。(十一月廿八日)

### 彼 南



ヒンズ教の造物主ブラ  
アメの権化シヴの神

臙脂の中に濃い橄欖を鮮かに交へた珍しい曙光を浴びた我船は徐徐とマラッカ海峡の西の出口ペナン島の港に入った。名物男のガイドでシイ・井イ・ホテルの客引を兼ねた馬來人メラメデインが鈴木鼓村に酷似した風采をして見物を勧めに来る。「此男忠實にして信用すべき案内者なり」と云ふ様な證明や「但し見掛によらぬ辣腕ありと見え彼が妻は西洋人なり」と冷かしたものを





外 郊 の シ ナ ヲ

や、山内愚仙が描いて與へた彼の顔の寫生や、文部省の留學生某の彼を推讃した拙い歌やて一ぱいに成つた厚い手帳を出して見せ、莞爾として得意相である。

彼に託して馬車數臺を備ひ市外一里の官山にある極樂寺に遊んだ。途中は一面の大椰子林で、其奥へ折折消えて行く電車や、床下の高い椰子の葉を葺いた素樸な田舎の社がほつんと林の中に立つて居るのなどが氣に入つた。何處へ行つても道路は白好いが、鐵輪の響くのと石灰質の白

い土から反射する日光の強いのに閉口する。極樂寺は光緒十二年に建てた支那の寺院で、山厨を利用して幾段にも堂舎を築き上げ、巨額の建築費を要したものの丈に規模は大きい、中に安置した釋迦、觀音、四天は布袋の巨像と共に美術的の價値は乏しい。唯だ一體に清潔なものと觀望に富んで居るのが遊客を喜ばせる。永代供養を捧げる富家の信者が在任支那人中に多いと見え何れの堂にも朱蠟燭の明と香煙とを絶たない。茶の接待、水浴室の設備なども鄭重である。茶亭には花卉の鉢を陳べ乃木東郷兩大將の記念自署などが扁額として掛つて居



Picking Pine-Apples, Penang

(シナハ)集採のルブツナ・ンイバ



た。或堂で見た緬甸風の彌陀三尊の半裸像は一見して横山大観の「燈籠流し」の女の粉本と成つたものらしかつた。最高樓から先刻通つて来た大椰子林を越えて市街、港内、對岸の島を眼下に收め、左右兩翼を披いた山の樹間に洋人のホテルや住宅の隠見するのを眺め乍ら、草を圍んで涼を納れた。

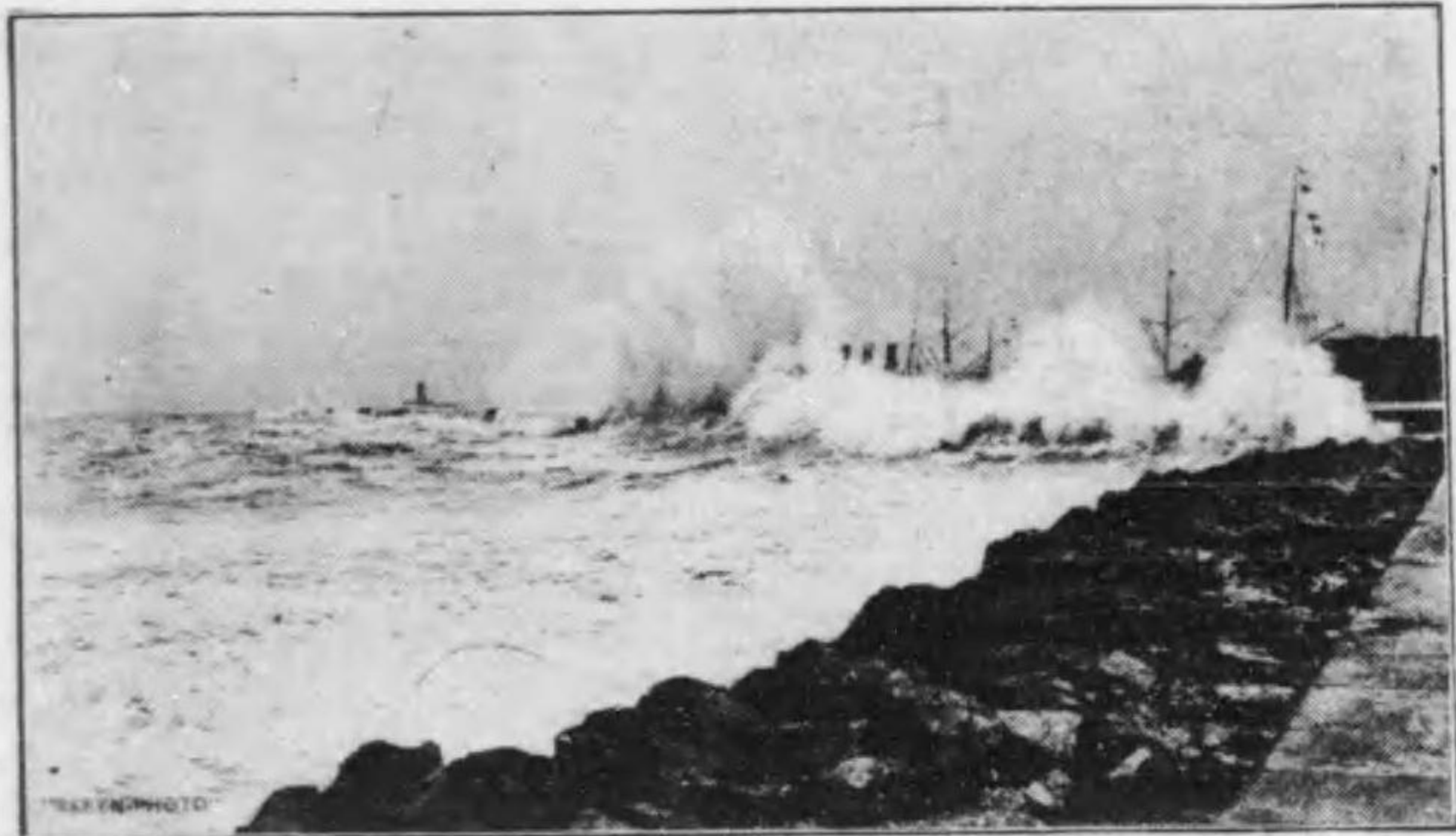
案内者のメラディン爺が望む儘に満谷等は彼を寫生し、三浦工學士と僕とは彼の手帳へ證明を與へてやつた。頻りに渴を覺えたが危険を恐れて一切飲料を取らず、寺僧が施本として呉れた羅狀元の「醒世歌」を手にして山を下つた。四人の畫家連は寫生の爲に林中に留り、小林近江等は瀑布と植物園とへ廻り、僕と三浦等は市内を一週して先に歸船した。馬車料は一臺三圓案内者へは一人二十錢宛を與へた。此港では釣が出来ると云ふので甲板の上から牛肉を餌にして糸を垂れる連中がある。三浦は黒鯛に似た形の、暗紫色に黄味を帯びた二尺許の無名魚や「小判冠り」を釣つて大得意である。翌朝早く起きて、船に凭つて居ると、數艘の小船に分乗して昨夜出掛けた下級船員の大部分が日本娼婦に見送られ乍ら續續歸つて来る。須臾にして異様な莫斯綸友染と

天草言葉とが我船に滿ちた。正午に碇を抜く迄彼等は別を惜むのである。(十二月一日)

コロムボ

ペナンから印度人の甲板旅客が殖えた。稼ぎ儲めて歸る勞働者だが、細君や娘は耳、鼻、首、腕、手足の指まで黄金づくめの寶石づくめの裝飾で燦燦して居る。大した金目だ。彼等回回教徒の習慣として他人種の煮炊した物は食はない、炭薪携帯で唯だ水の給與を船から受ける丈、而して自炊した食物を大皿に盛つて右の手で掴んで食ふ。一切箸を用ひない。食指大に動くと云ふ語は彼等に適切である。食ひ終つた指は洗ふ代りに綺麗に砥めて仕舞ふ。贅澤な連中は食後に青い椰子の實を鉋で割いて核の中の水を吸ふ。レモンの様な味で一個の實に三四合入つて居る。彼等は左の手を不潔な場合





コロムボの防波堤

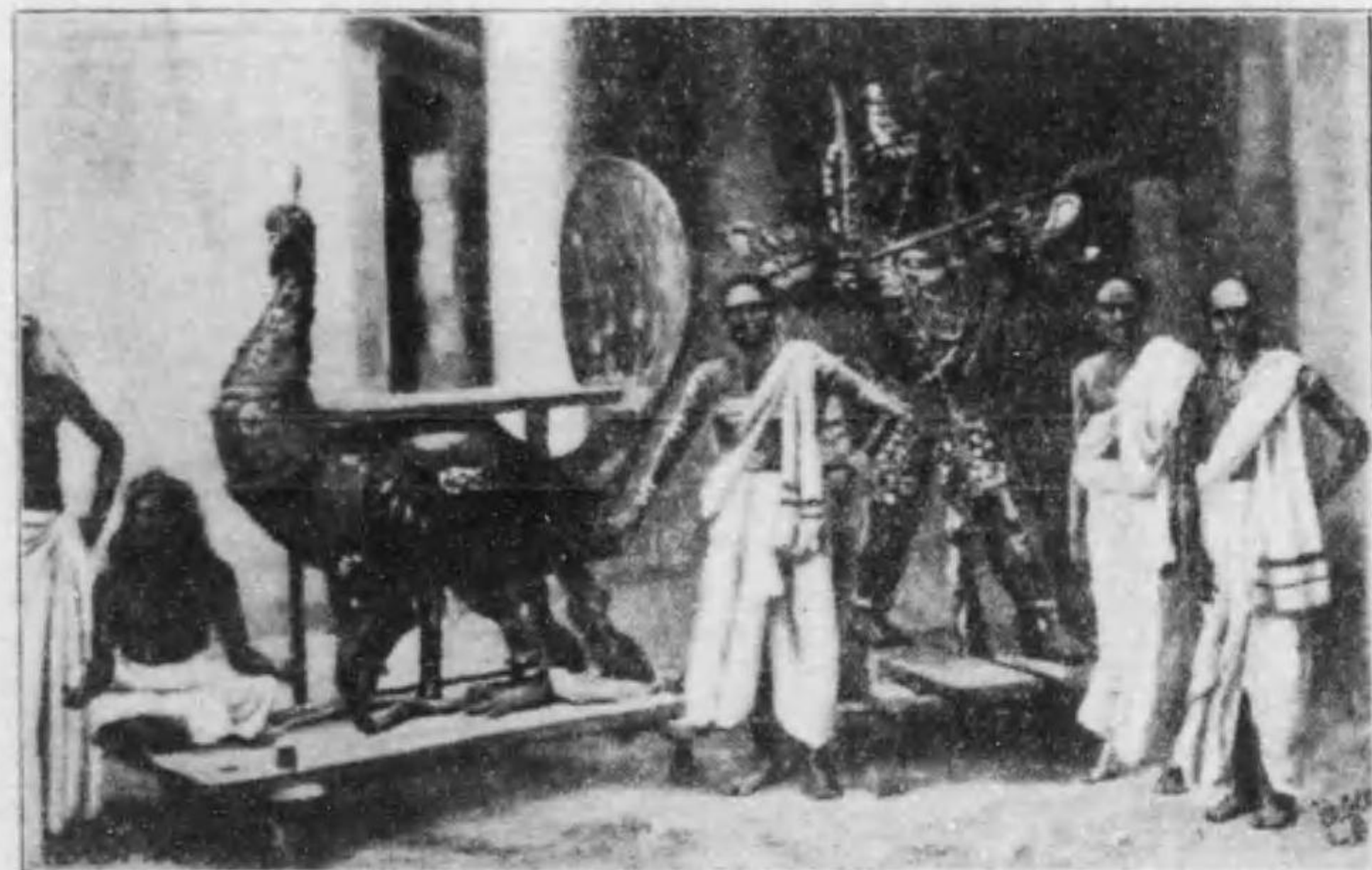
の手と定め、食事用の右の手を尊重して居る。僕はベナンを出帆してから郵船會社の厚意で一等室へ移して貰つたが、幸ひ相客が無いので、広い涼しい部屋を一人で占領する事となつた。一等船客には千頭、宮内などと云ふ海軍大尉が乗つて居る。氣の置け相にない連中だが、まだ馴染が浅いので食堂で顔を合す許り、僕は相變らず二等室へ出掛けて日を暮して居る。スマトラを左舷の遙彼方に望んで印度洋に掛つたが、豫期して居た程の暑さも無く、浪らしい浪にも遇はない。夜などは室内に毛布を掛けて寝て少し涼し過ぎる位である。雨季で夕立の多い加減もあらうが、此様な好都合づくめの航海は珍らしい。

いと船員が驚いて居る。

新嘉坡から乗つた印度の労働者が名の解らない急病に罹つた。言語が通じないので船醫が見計らひで藥を飲ませたが、黒い顔に白い目を据ゑる白い齒を出して黙つて苦痛を忍んだ儘死んで仕舞つた。同國人に遺言に頼む氣色も無かつた。制規の時間を置いて翌朝暗い内に水葬に附した。臨終に計つた熱が三十九度あつたと云ふので肺ベストでは無かつたかと俄に氣に仕出す連中がある外、死者に對して格別同情する者も無かつた。

コロムボに入港する晩僕は船長の許しを得て船橋に立つて居た。十哩前から見えたコロムボ市街の燈火は美しかつた。月が照り乍ら涼しい雨が降つて居た。世界一と云はれる大きな防波堤が左右に伸びて、燈臺の回光機は五秒毎に明るくなる。港外で一吋停船すると小蒸気で遣つて來た英人の水先案内が上つて來て、軽い挨拶を交換するや否や船長に代つて號令し初めた。航海日誌を書く船員が端から其號令を書き留める。偉大な體格の、腹の突き出た諾威人の船長は兩手を組んだ儘前方を見て動かない。麥葉



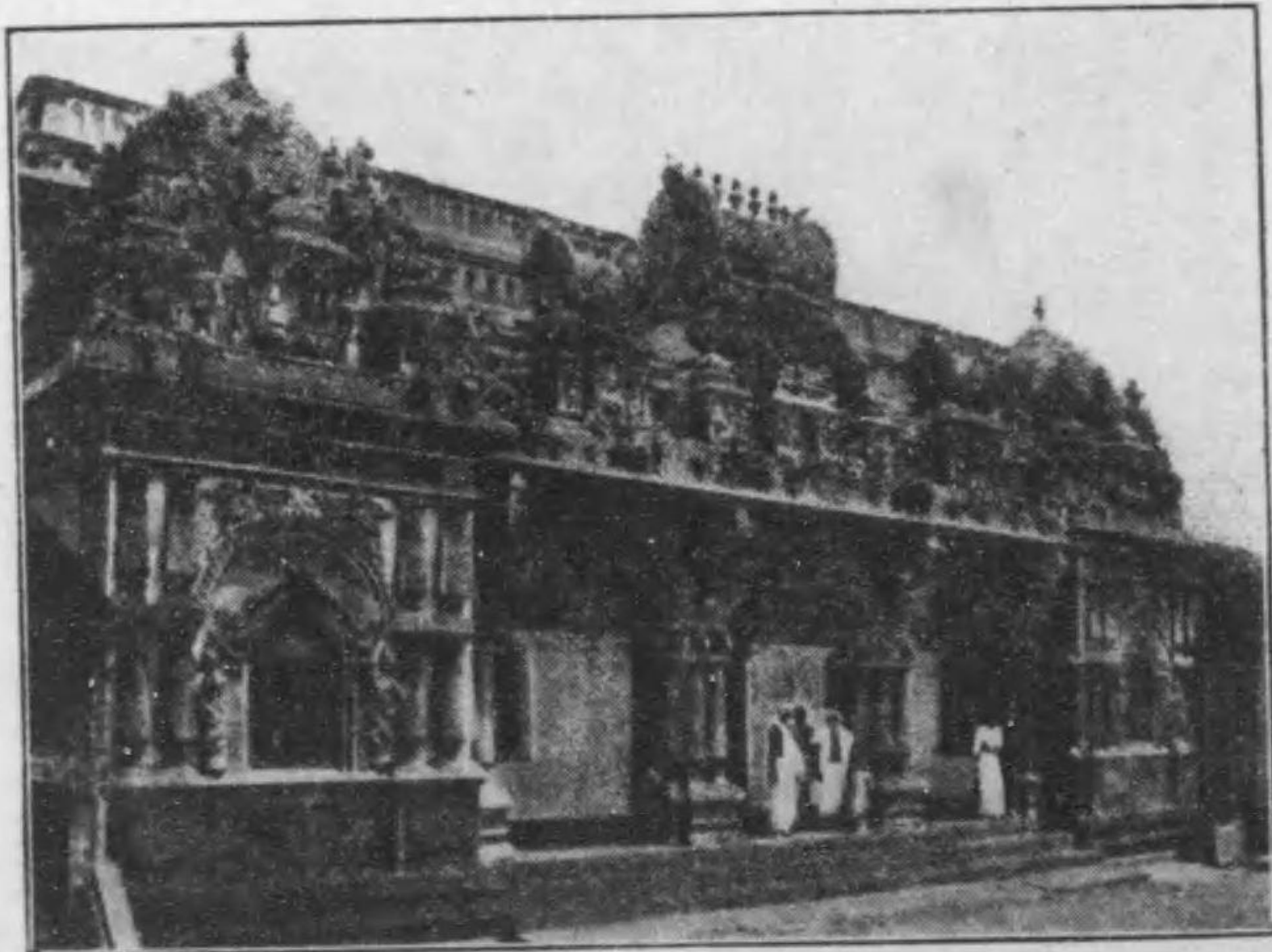


祭のグシフ行に旬中月二の教グシヒ  
(雀孔る乗のチラスラサ神女と儀のグシ)

四〇  
帽を冠つた優形の水先案内は軽快に船橋を左右へ断えず歩いて下瞰し乍ら響のよい聲で號令する。船は狭い港口を徐徐と入つて港内に碇泊して居る多くの汽船の間を縫つて行く。此二三十分に僕は初めて高級船員の威厳と興味とを感じた。其晩の八時から二等室で日本人の酔屋と英人のカタアと兩人の爲に僕等の仲間て心許りの送別會を開いた。酔屋は横濱の貿易商で孟買とカルカッタとに十年前から店を持つて居る。孟買と聞くと僕等の門外漢には大分に日本商人の勢力が及んで相に想はれるが、三井物産と郵船

會社との支店を除いて個人の經營する商店と云へば酔屋丈だ相である。夫を酔屋は憤慨して居る。一己の利益から云へば競争者の無い方が好い様な物の、印度の本土一般に亘つて日本絹の販路は無限である。日本商人の爲に同業の競争者の多数に起る事を望むと言つて居る。其方面の事情を委しく聞きたい人は横濱市元濱町三丁目の酔屋定七君の本店へ問合されるが好い。氏は三箇月毎に日本へ往復して居る。「スヤ」と云ふ姓は印度人の最も嫌ふ「豚」の印度語と似て居るので、印度の店は

コロムボ



(コロムボ)院寺大の教グシヒるへ訪の子



別所と云ふ従弟の姓を用ひて居る相である。

カアタアは一二等客の西洋人を通じて最も教育ある最も品格の高い老人である。本國ではエスベラント語の會の副會頭をして居る相だ。日本議員の男で、十七年前に一度日本へ来たが、今度も六十歳を越えた老人の身を氣遣つて娘が見合せよと云つたに拘らず出掛けたと云つて居る。林檎の様に赤い顔をして大きな煙管を啣へて離さず、よく食ひ、よく語り、よく運動する元氣のいい爺さんである。近年細君に死なれてからは各國で職に就いて居る子供の處へ遊んで廻るのを樂みとして居る。此處から船を乗替へて南阿のトランスバアルに居る末子の許を訪ふのだ相だ、而して到る處でエスベラントの普及を計るのだと言つて其方の印刷物を澤山荷物として携へて居る。世界を家とし老いて益壯なカアタア君は僕等の理想的老人だと告げたら、彼はエス、エ、エと云つて喜んで居た。彼は日本酒に酔ひ乍ら卓上演説をなし、又明快な聲で長篇の詩を朗詠した。

一等室に怪しい外國婦人が二三人乗つて居る。一人の英國婦人は全體が餘りに大作

りて妖怪的な感を感じ難いが、顔丈見れば一寸美人である。此熱田丸が此前日本へ歸る時にベナンで同行の情夫を乗せて竊に上陸し去つた女だ相であるが、今度は一人で香港から乗りベナン迄の間に早くも某外人を捕獲して仕舞つたとの評判である。劇しいヒステリー症の女で前の航海には船醫が大分惱まされたと話して居る。其女が今夜突然また此處から上海へ引返すと言出した。事務長が理由を問ふと、先に棄てた情夫が俄に戀しくなつて矢も楯も堪まらないのだと言ふ。

コロムボの防波堤の大規模にも驚くが、其れに會て一千萬圓を投じた英人の遠大な經營に更に驚く。防波堤が無かつたら直ちに印度洋の荒海に面したコロムボは決して今日の如く多數の大船を引寄せ得る良港とは成らなかつたであらう。其れに何れの英領へ行つても感じる事であるが、陸上の道路の立派な事も驚かれる。英人が先づ運輸通商の便を計つて新領土の民心を收めようとする遣口は兎角武斷の荒事に偏する日本の新領土經營と比べて大變な相違である。

錫崙の土も新嘉坡と同じく赤く、雨水が溜れば朱の色となるのは美しい。驟雨を衝



いて力車に乗り市内を見物して廻つたが、椰子は勿論、大きな榕樹、菩提樹、ババイヤ樹、瓜哇竹などの多いのが眼に附く。柏に似た葉のポオビス・アウスが到る處に



僧教佛るけ於にボムロコ

明るい緑の若葉を着けて居るのも快い、赤い粗末な瓦屋根も天然と調和して見える。其れに支那人の勢力がベナン限で此處まで及んで居ない所から不潔と悪臭とに満ちた支那人街を全く見ないのが好い。流石に黒奴の本國丈に黒奴が威張つて居る。又黒奴にサアやナイトの爵位、立法

成らない。

併し英國政府も印度人の教育を高め過ぎた事を近頃少し後悔して、徒弟學校、工業學校の様な方面の教育に人心を向けようとして居るが既に時機が遅らしい。元來冥想的な事に長けた印度人だから哲學や法律の理解が好く、自由思想は日本の學生よりも概して徹底して居るので段段英政府の施設が面倒に成つて來た相だ。革命的の思想も此地は然程で無いが印度本土には可なり盛だと云ふ事で、新聞は支那の革命戰爭の記事を小さく幾二三行で済ませて居る。昨今は英帝が印度皇帝としての戴冠式を擧げる爲に孟買に行幸して居られるが、革命黨が何か仕出かしはしまいかと半年前から非常な警戒だ相である。併し頭許りで手の疎い國民である上に英政府が多年の巧妙な經營に馴致されて居るのだから、支那の革命黨の様な實行の危険は永久に起るまいと思はれる。

印度人と一口に云つてもヒンズ、タメル、マホメダン、波斯人、錫崙土人其他種種に分れて居る。彼等の間で富んだ者と云へば直に一億圓以上の財産を有つた者を意味



する程富豪が多い。三浦工學士の友人の弟の臼井清三と云ふ青年が、柔術の教師として招聘されて居るサラムと云ふ一家などはコロムボで第二流の富豪だと云ふが、椰子林の収入丈でも毎月一萬圓を越える相だ。三浦と僕は臼井が船へ伴れて来たサラムの一人息子と語つたが、家が古い基督教徒で英國の教育を施して居る丈に流暢な英語で元氣よく政治や文學を話すのは十七歳許りの少年の思想及び態度とは思はれなかつた。一般に南國人は早熟なのであらう。

サラムの息子は一箇月も僕等に滞留する暇があるなら田舎へ象狩と鴈狩とに同行したいと云つて居た。本年の象狩には一百頭の象を柵内に追込む事が出来た程の大獵であつた相だ。象一頭の價格は六千圓して居るから大した獲物である。

一二等客の日本人は船の永島事務長を加へてクックの案内で佛牙寺のあると云ふキヤンデイへ汽車旅行をした。四人の畫家と三浦と僕とは加はらなかつた。キヤンデイは昔の錫崙王の都で、峨峨たる石山に取圍まれた要害の地丈に最後迄英軍に反抗した古戦場だ。英軍が氣長に洞道を切り開いたので漸く陥落したのである。昔罪人を石山



シテホ・イギ・イシのガムロコるれ取を餐午の等子

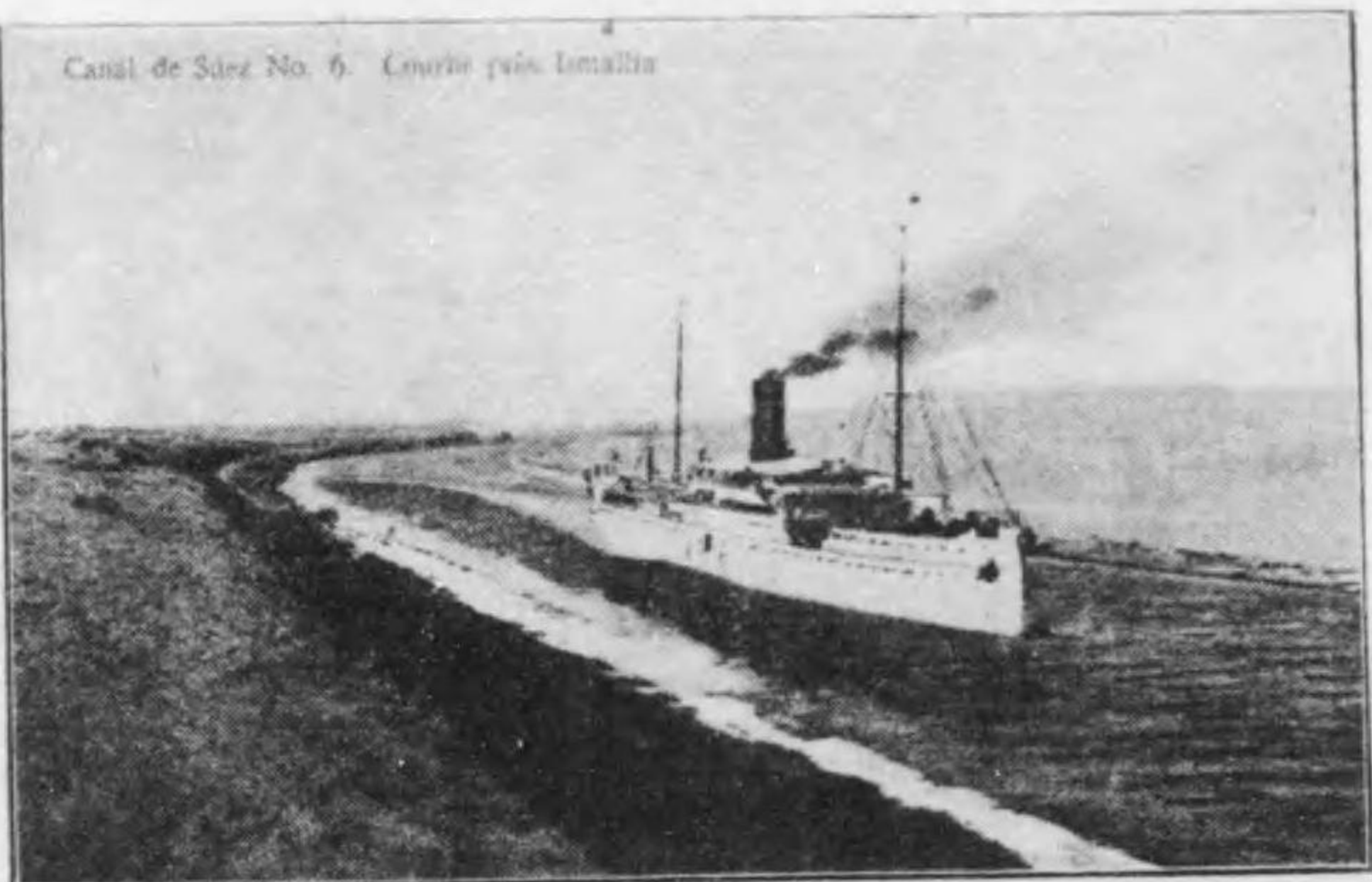
の絶頂から生き乍ら棄てた斷崖も名所として遺つて居る相だ。釋迦の齒の眞物は異教徒に焼かれて今のは象牙で偽作した物だと聞いた。先年並羅から日本へ贈つて来た佛牙も大方此類であらう。

コロムボで名高い釋迦佛陀寺を訪うたが、近年スマンガラ僧正の歿後は僧堂の清規も振はないらしく、大勢の黄髮姿を着けた修行僧は集まつて居るが、寺内の不潔に呆れる外は無かつた。聞けば僧正の歿後惡僧に由つて幾か二百金で一俗人の手に賣



渡されたのだと云ふ。釋迦堂其他を開扉して呉れたが美術的の價値の無い俗悪を極めた物許りであつた。僧正の遺品だと云はれる經卷が鼠糞に委せられて居た。僕の長兄も律宗の僧であると告げたら寺僧は無造作に其經卷の貝多羅葉數枚を引きちぎつて呉れた。庭内の老菩提樹には神聖の樹として香花を捧げ、又日本の奉納手拭の如き小切を枝に結び附けて冥福を祈る信者が斷えない。參籠堂とも言ふべき所には緬甸から來て印度の佛跡を巡拜する中流以上の老若男女の大連が逗留して居て、中に日本の處女かと思はれる美人が多く混つて居た。大樹の蔭に淡黄色の僧堂と鬱金の袈裟を卷きつけた跣足の僧、この緑と黄との諧調は同行の畫家のキャンパスに收められた。(十二月)

### 地中海



地中海

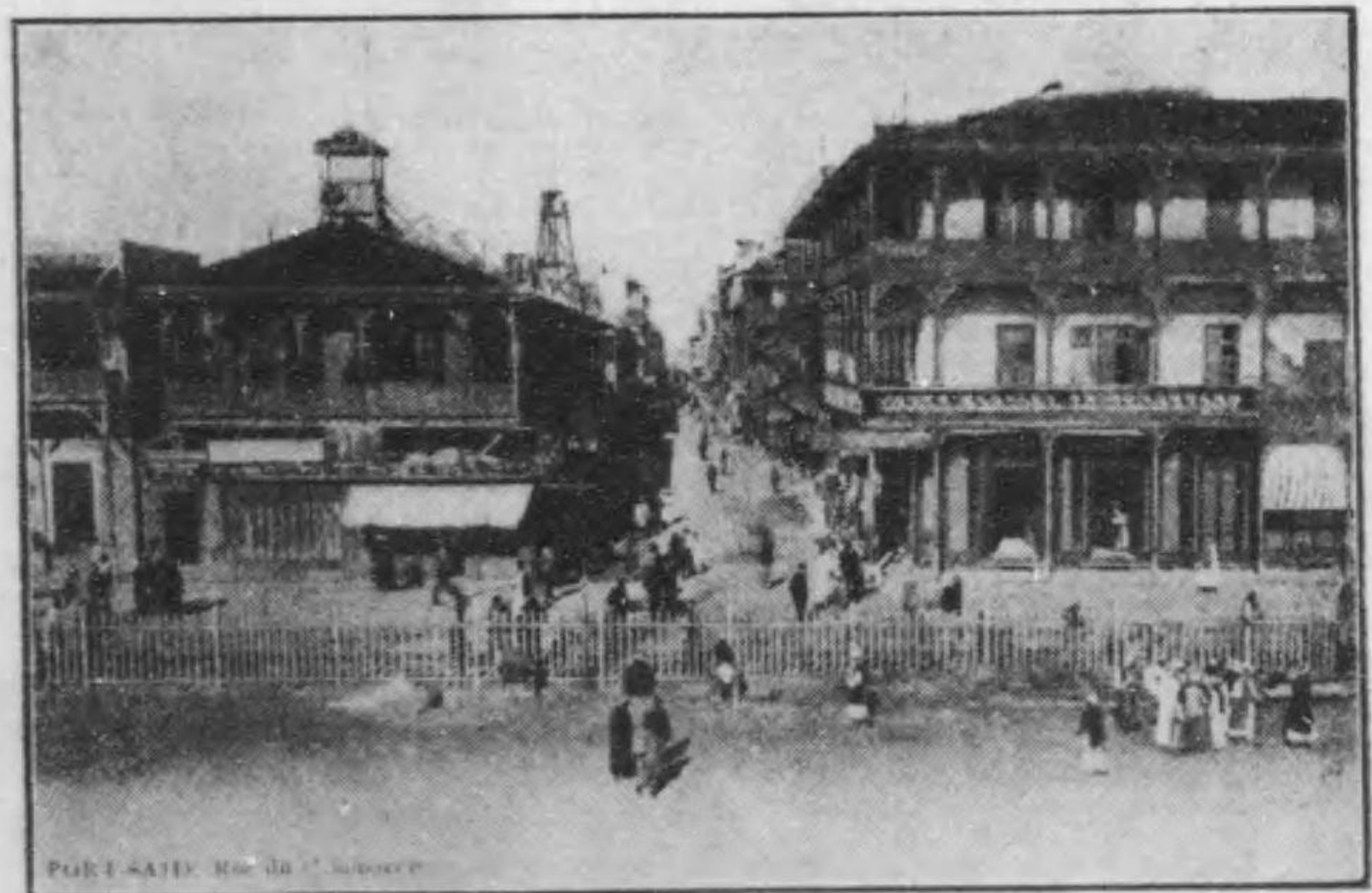
#### スエズ運河

コロムボを立つてから數日の間海水は猶九十度の温を持つて居た。十日目にアラビヤと亞弗利加が稍近く見え初める様に成つて夜間は毛布を重ねて寝る必要があつた。午前四時頃シナイ山らしい山を右舷に望んだ其日の夕暮に蘇西の運河へ這入つた。見渡す限りセビヤ色の砂丘が連続し、蘇西の市街や運河の其處此處にある信號所の附近を除いては全く一草一木も生えて居ない。埃及の空に落ちる日の色は紫褐色を漲らして居た。隅田川の半分も無い運河の幅は、屢々八千噸の熱田丸を擱砂させ、其度に御納戸色の水が濁つた。河底が餛飩粉の様に



巴里より

柔かいし船の速方も三分の一に減ぜられて居るので擱砂しても故障は無い。唯だ行き合ふ船がある場合に信號所の命ずる儘に何れかが一方の岸へ繫留させられ其度に四五十分を費す。運の好い時には他の船ばかりを避けさせてずんずん通過する事が出来る相である。行き合ふ時雙方の船客が帽やハンカチーフを振り互に健康を祝つて叫び交す。又信號所の附近にある人家の樓上から女子供が「ボン、ヴォアイヤアヂユ」などと佛蘭西語で呼び掛ける。夜が更けるに従つて秋めいた星月夜となつたが、河筋を傳つて北から吹く



ボト・サイドの海岸

風が今日俄に取出した冬服を徹して寒い。寥廓たる萬古の沙漠を左右にして寝て居るのかと思ふと、此沙漠の中から豫言者が起つたり、行き暮れた旅客に謎を投げると云ふスフィンクスの傳説が生じたりするのも自然らしい事の様之感ぜられた。



埃及の既婚婦人

翌朝はボト・サイドに着き、出帆までに纔に餘された二時間を利用して港に上つた。コロムボ以來十三日目に土を踏むのである。蘇西の河口の洲の上に建てられた此市街は狭い乍らも歐洲の入口丈に餘程東洋の諸港と異つた感があった。どの酒舖にも茶店にも早天か

ら客が詰め掛けて居る。髪を長くした伊太利人の樂師がマンドリンとギタルを合奏するのを聴き乍ら、店頭卓に凭つて麥藁でレモン・カアツシュを呑氣に吸ふ客がある



かと思ふと、酒舗の奥の一隅では目を赤くして麥酒を傾け乍ら前夜から博奕を引續き



アキラヤ人の祈禱

して一層毒毒しい紫黑色をして居て、肉も血も骨までも茄子の色を持つて居相に想は

關はして居る一團がある。官衙の掲示も商店の看板も英佛埃及の三語で書かれて居る。清國の革命騒ぎも此處では最早問題に成らない代りに伊土の戦争が適切な問題に成つて居る。土耳其人に聞けば伊太利が結局は負ると云ひ、伊太利人に聞けば其れと反對な事を云つて居る。カイロまで行く途の無い旅客の爲に埃及土産を賣る商店が幾軒もある。僕等は埃及模様の粗模な趣のある布を數枚買った。繪葉書屋へ入ると奥まつた薄暗い一室へ客を連れ込んで極端な怪しい寫眞を買附けようとするので驚いて逃げ出した。此處のアラビヤ族の黒奴は馬來や印度の比

れる。わが船が着くや否や集まつて来た石炭船から幾百の黒奴が齒まで黒く成つて現は



埃及の風景

れ、曇つた空の下に列を作つて人交り石炭を積み初めた時は鬼の世界へ来たかと思ひ恐ろしく感ぜられた。地中海

海から吹く北風に石炭の埃が煙の様に渦を巻



地中海に向へおるトオサドイ

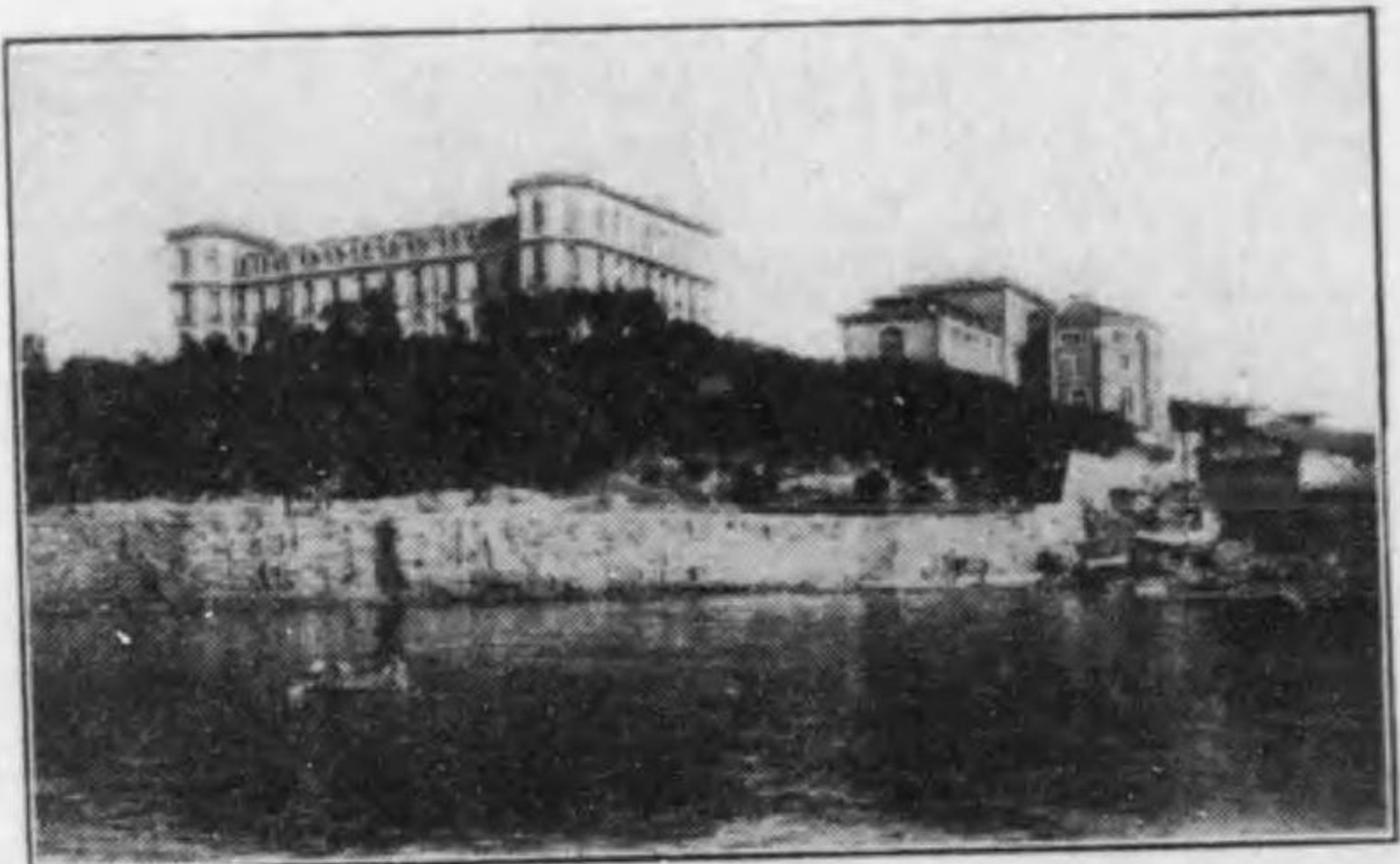


て少時の間に美しい白塗の熱田丸も眞黒に成つて居た。出帆時間が来た。地中海に面した港の口に運河の設計者レセツプスが地圖を手にして突立つて居る銅像を左舷に見ながら愈々歐洲に一步踏み入る旅客となつた。(十二月廿三日)

マルセエユ

地中海に入つて初めて逆風に遭ひ、浪の爲に一時間五哩の速力を損失する日が二日程つづいた。艦の方の友人は大抵僕の室へ来て船量を逃れて居た。伊太利のメシナ海峡を夜半に通過する事に成つたのでエトナ山もブルカノ島も遠望が出来なかつたが、夜明にストロンポリ島の噴火丈を近く眺めた。模糊たる曉色の中に藍鼠色をした圓錐形の小さい島の姿が美しかった。山麓に點點たる白い物は雪であらうと云つて居たが、

望遠鏡で望むと人家であつた。噴煙は噴き出る端から雲と成つて薄いオレンジ色に染まつて居た。



マルセエユの港口の古城

船が一日遅れたのでマルセエユの聖誕祭を観ることに出来ないのを洋人の乗客は残念がった。船中のクリスマスは相應に立派な飾り付が出来たが、二等室は動搖がひどいので日本人の大部分は食卓に就かなかつた。一等室の食卓では西洋人も予等も互に三鞭の盃を舉げて祝合つた。此日の午後一時にサルヂニアとコルシカの間を通つた。コルシカ島の禿げた石山が夕煙の中に白く隠見して居たのはいい感じであつた。米國の一宣教師は十二歳の息子に奈破命の話聞かせて居た。翌日の朝マルセエユに着いた。

砲臺のある灣口の島に並んで有名なシャトウ・ド・ディツフの牢獄の島が白く曇つて

マルセエユ



居た。市街の向つて右の石山の上にはノートル・ダムの尖塔と黄金の女神像とが聳えて居る。大洋に向つて石垣の一横線を築いた新港の規模の偉大な事はコロムボの築港などの及ぶ所て無いと思はれる。港内の左右には幾十の荷揚場が列り、殊に陸に沿うた左の方には天井を硝子張にした堅牢な倉庫が無数に並んで居る。閘門が数箇所に設けられて其上に架した鐵橋は汽船の通過する度に縦に開く仕掛に成つて居る。併し此新港も最う新しくは無い。熱田丸以上の大きな船を自由に繋ぐ事の困難なのを想ふと舊式に屬するらしい。船の進行に伴つて可愛い十三四の二人の娘が緋の色の裳を圓く揚げながら、母親らしい女の弾くマンドリンに合せてマルセイユズの曲を舞つて甲板の上の旅客に錢を乞うて居る。其れを觀て初めて佛蘭西へ來た氣がした。

お寺や博物館を見物する爲にマルセイユに二日滞在する事にして、夜は永島事務長と牧野會計とをジュネエブ・ホテルに招待し、一二等船客の日本人相寄つて心許りの別宴を催した。一人三分間の卓上演説に何も話す事の無い僕は二度お辭儀をした。此處から猶英國まで續航する日本人は五人である。三井の小林君はビスケエ灣が荒れると

聞いて僕等と一緒に汽車で行く事に改めた。

其晩は葡萄酒に酔つて船へ歸つて寝た。翌朝は春雨の様な小雨が降つて居る。此様に温かいのは異例だと此地に七八年案内者をして居る杉山と云ふ日本人が話して居た。マルセイユは港として盛ではあるが、市街は甚だしく穢い。道路の悪い上に大通りから少し横町へ入れば糞便が溝を成して居る。博物館は休日であつたけれど、守衛に特に乞うたら直ぐに入れて呉れた。シャヴンスのマルセイユを描いた二枚の壁畫、古い所でベルヂノやリュウパンスの作品が目を惹いた。巴里のペエル・ラシエエズの墓地にあるバルトロメの「死」の塑像の模作もあつた。植物園の黄昏に松や芭を眺めてバ

ンクに憩うた時は日本の晩秋のうら寒い淋しさを誰も感ぜずに居られなかつた。今日の午前近江は一人でミュンヘンへ立つた。僕等の巴里へ行く五人に倫敦へ行く小林を加へて午後八時にマルセイユを立つ時、今夜遅く伯林に赴く三浦財部の二學士を始め久しく船中の生活を共にした永島事務長や牧野會計が停車場へ見送りに來て呉れた。日本語許を使つて居た世界から愈々別れるのであると思ふと横濱を離れる時



よりも淋しかった。發車の間に牧野の音頭で「しやん、しやん、しやん」と三度手打をしてプラット・フォームの群衆を驚かせた。車中には正月の用にと云つて熱田丸から大きな「数の子」の樽を積んで呉れた。(十二月二十八日)

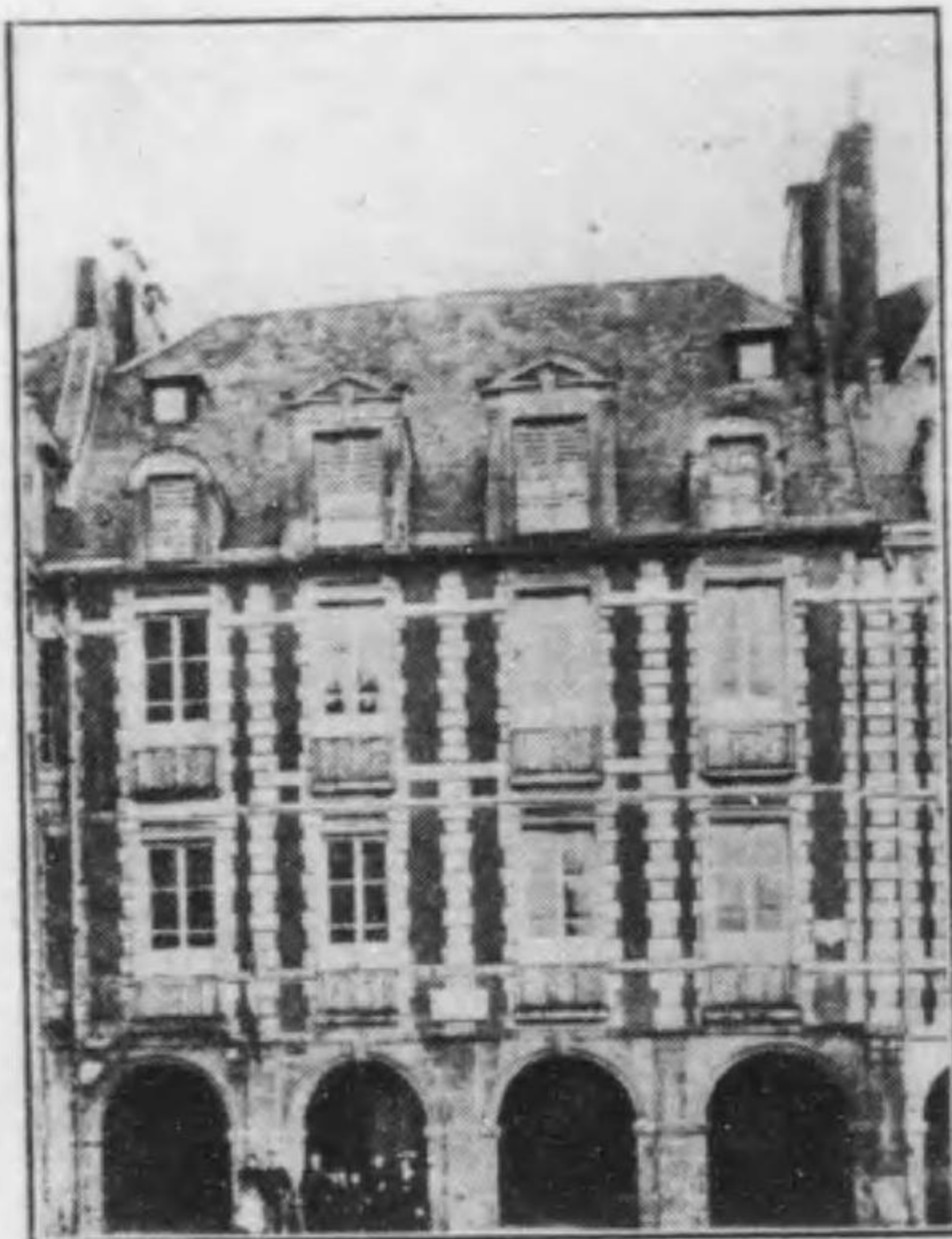
### 巴里の除夜

巴里へ着いてから四日目の朝だ。ホテル・スフロウの二階で近いスルボン大學の鐘を聞き乍ら病院に居る様な氣持で白い寢臺の上から窓を眺めた。陰鬱な冬曇りが続く。巴里全市は並木も家も薄墨色の情調に満ちて居る。正午前に石井柏亭が来た。此間停車場へ小林萬吾と一緒に迎へに来て呉れた時も既に感じた事であつたが、揉上をよい程に短く剃り上げて見違へる程色の白い美しい男に成つて居る。小脇に挟んだ英國の

一雑誌には頼まれて寄稿した柏亭自身の論文や繪が巻頭に載つて居る。其論文は最近日本の藝術に就て大分に氣焰を吐いたものであつた。相應の確な研究と一種の突つ込んだ直覺とから得た斷案を率直に

語る此人の藝術批評は面白い。相變らず話の中で折折吃るのも有り餘る感想が一時に出口に集まつて戸惑ひする様で却て頓挫の快感を與へる。

リュウ・デ・ゼールの通りへ出て大學前の伊太利亞料理で午餐を済ませた後、地下電車に乗つてユウ

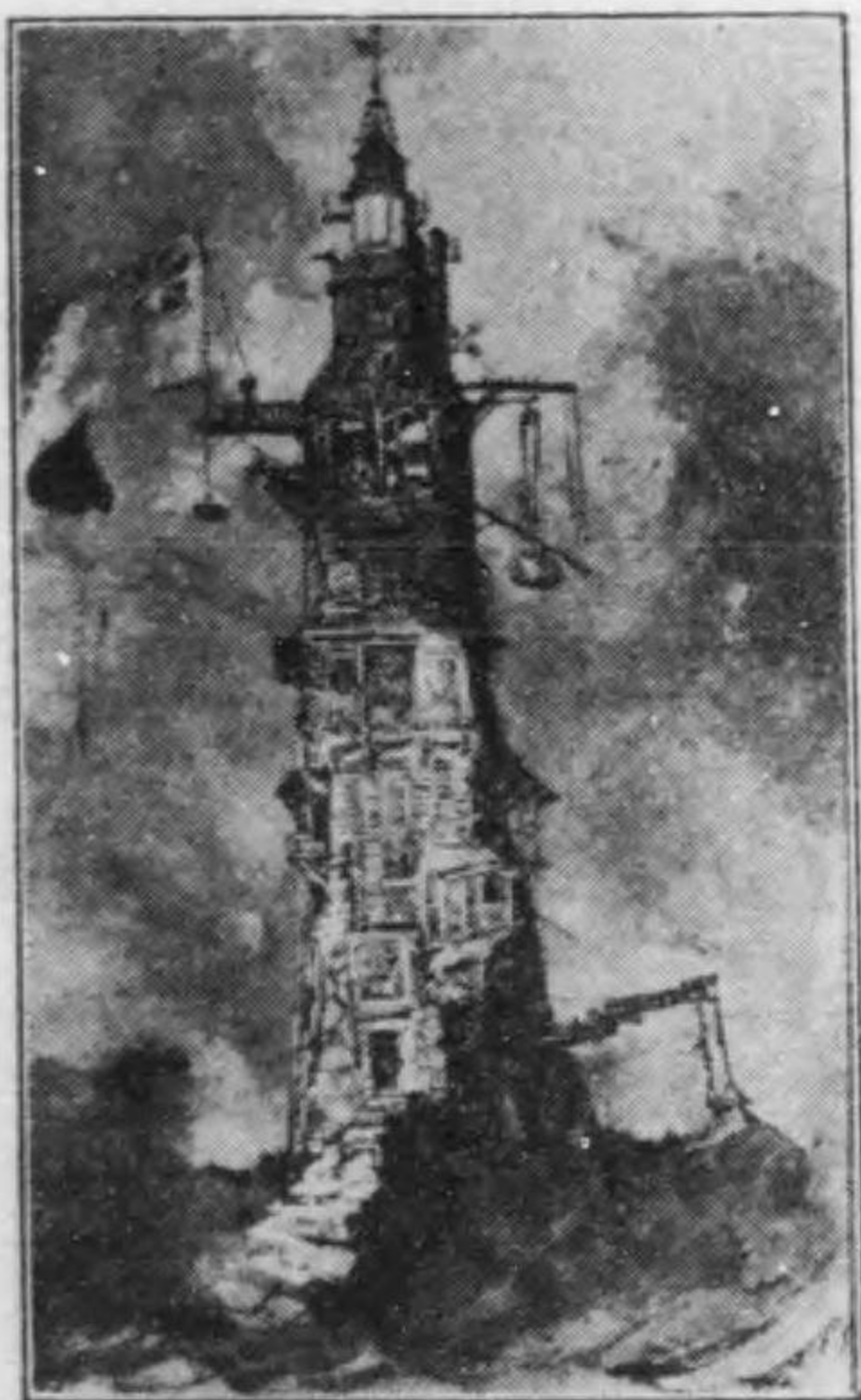


家のおヨウ・ユ・ルトクギ

ゴオの舊宅をプラス・デ・ヴスチル街に訪うた。舊宅は十八世紀の建築だと云ふ一廊の中に在つて、屋上に三色旗が翻つて居る。故文豪が一八三三年から一八四八年まで

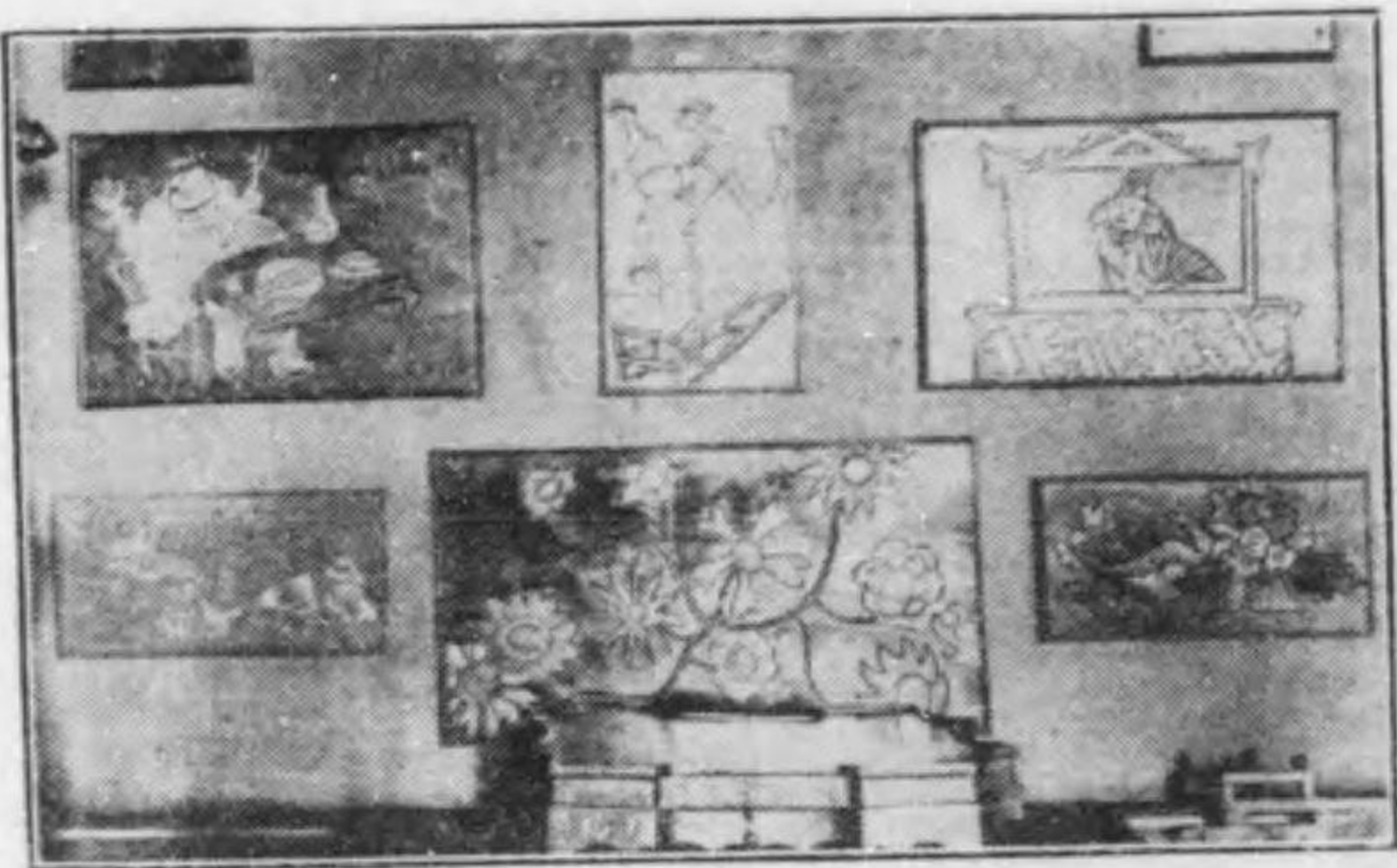


住んだ家だ。ユウゴオを記念する小博物館として大抵の遺作、遺品、故人の著作に挿んだ繪の下繪、著作の廣告に用いた繪、其他故人に關係ある雜多の物が陳列されて居る。故人の大理石像の前に「シエキスピアの家より」としてユウゴオの今年の誕生日に英國から贈つて來た花環が青枯れた儘捧げられて居た。文豪の舊宅が互に贈答をする習慣も奥ゆかしい。ユウゴオの手澤の存する一卓の上に故人の用いた鷲筆と銅のインキ壺を始め、友人であつたラマルチン、アレキサンダア・ヂユウマ、ヂョウヂ・サン三人の筆や墨壺が載せてあつた。



ユウゴオの描いた繪の多いのに驚いた。ロマンチックな物ばかりではあるが、確な寫實が根柢と成つて居る。故人の狂熱と沈毅と凝り性とが其等にも窺はれた。東洋趣味の珍らしがられた時代に故人

も支那の漆器の色や模様などから暗示を得て自身の意匠で作らせた一室がある。サル・ジャボネエ（日本室）と名づけられて居るが、實は少しの日本趣味も無く、全く支那趣味ばかりである。



其室の鏡の枠の模様には一莖の蔓に全く故人の空想から出來た奇抜な雜多の花と葉と實とが生じて居た。壁には大きな向日葵の花の中から黒牛が頭を出して居る繪もあつた。其等のユウゴオの「夢の華」が毫も不自然で無い許か、空想の天地に自適して如何にも樂し相である偉人の心境が流露して居る様に思はれた。柏亭と僕とは番人の婆さんから繪葉書を買つて其家を出た。

夜は柏亭、満谷、徳永外二人とギニョル座の芝居を観に行つた。除夜とは云へ巴里人には此月から最う正月の芝居である。芝居のはねる





ユルリゴアのの

六二

のは元日の午前一時前になるので、十二時を越すと観客は互に「おめてたう」を交換して居た。よい席は豫約があつて僕等は後の方に分れて坐らざるを得なかつた。此座の出し物には凄じい物が多いと聞いて居たが、材料を支那に取つた「紅雀」二幕と「鬼を見て来た男」一幕は不気味なものである代りに「妖惑する女」や「隅の部屋」の様な大甘な喜劇を取合せて氣分の平衡を計つてあつた。すべてが新作である。中にも「紅雀」は青い被ひを着せた紅雀の籠が何事かの象徴であるらしく終始観客の心を引付け、支那の貴人の家の静かな男女の舉止應對が全く沈鬱な氣分を舞臺に漲らせた。何時の間にか前の幕で紅雀の紛

失して居たのは隣人の盗んだのである事を主人自ら後の幕で静かに問ひ詰め、突然その隣人の喉に蛇の如く辯髪を巻き付けて締め乍ら、隣人が「それは自分だ」と二聲自白する間に兩方の顛顛を悠然と一刀づつ刺す。主人の妻が「あッ、あッ」と夜天に鳴く五位鶯の様な聲をして驚き倒れる機會に鳥籠が顛倒かへると、籠の中から隣人と不義をした妻の生首が現はれて幕に成つた。支那人の残忍な氣持が我日本人の解して居るよりも徹底して表現されて居るやうに想はれた。婦人の観客が上衣を脱いで肉色の勝つた胸衣の美しいのを誇りに見せるのは大阪風に似て居る。外へ出ると何の酒場も珈琲店も徹宵して除夜を送る客で満ちて居た。(二月四日)

パンテオンの側から

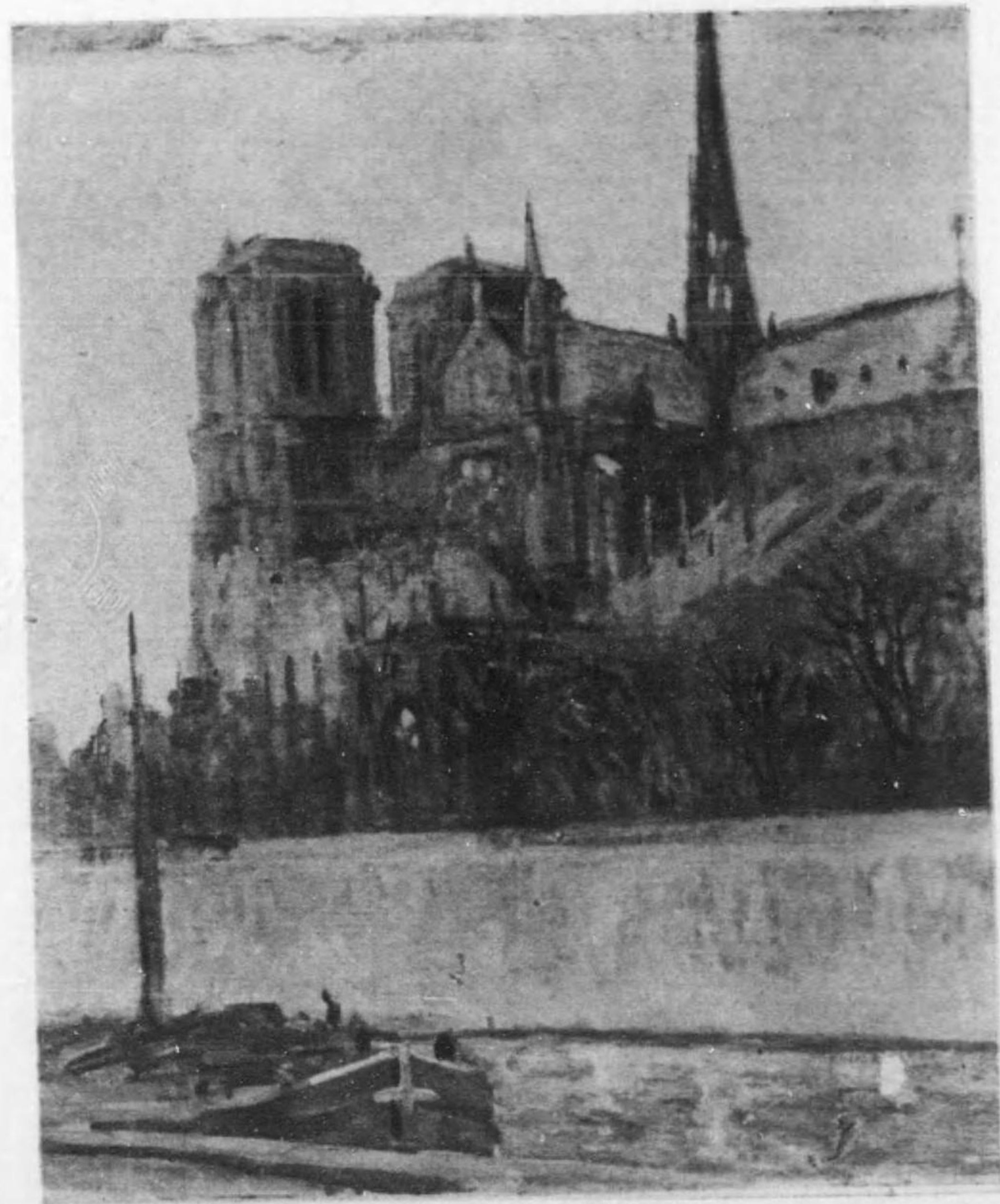


(一)

此頃の巴里はよく深い霧が降る。倫敦の霧は陰鬱だと聞くが、冬曇の續く巴里では却つて此霧が變化を添へて好い。ゴシツクの塔が中斷せられて意外な所て尖を見せたり、高い屋根の並ぶ大路が地下鐵道の洞の様に見えたりするものも霧のせいだ。偶太陽を仰ぐ日があつても終日霧の中でモネの繪にある様な力の弱い血紅色をした小さい太陽を仰ぐ許、東京の様なからりと晴れて汗えた冬空を僕は未だ見ない。併しながら風が少しも吹かず、一體に空氣が濕つぽく落着いて居て、夕方から後、街に灯が點くと、霧を透す温かい脂色の光が凡ての物に陽氣な而も奥深い陰影を與へ、華奢な男女も忙しない車馬も一切が潮染の様な濡色をして其中に動く。何となく「海の底にある賑やかな都」と云つた風の感がある。

グラン・アルヴァルを初め、目ぼしい大通を歩いて人道から人道へ越すときの危険なさ。地方から東京へ初めて出た人が須田町の踏切でうろろろするのは巴里に比べると









パントオンの側から

巴 里 市 街

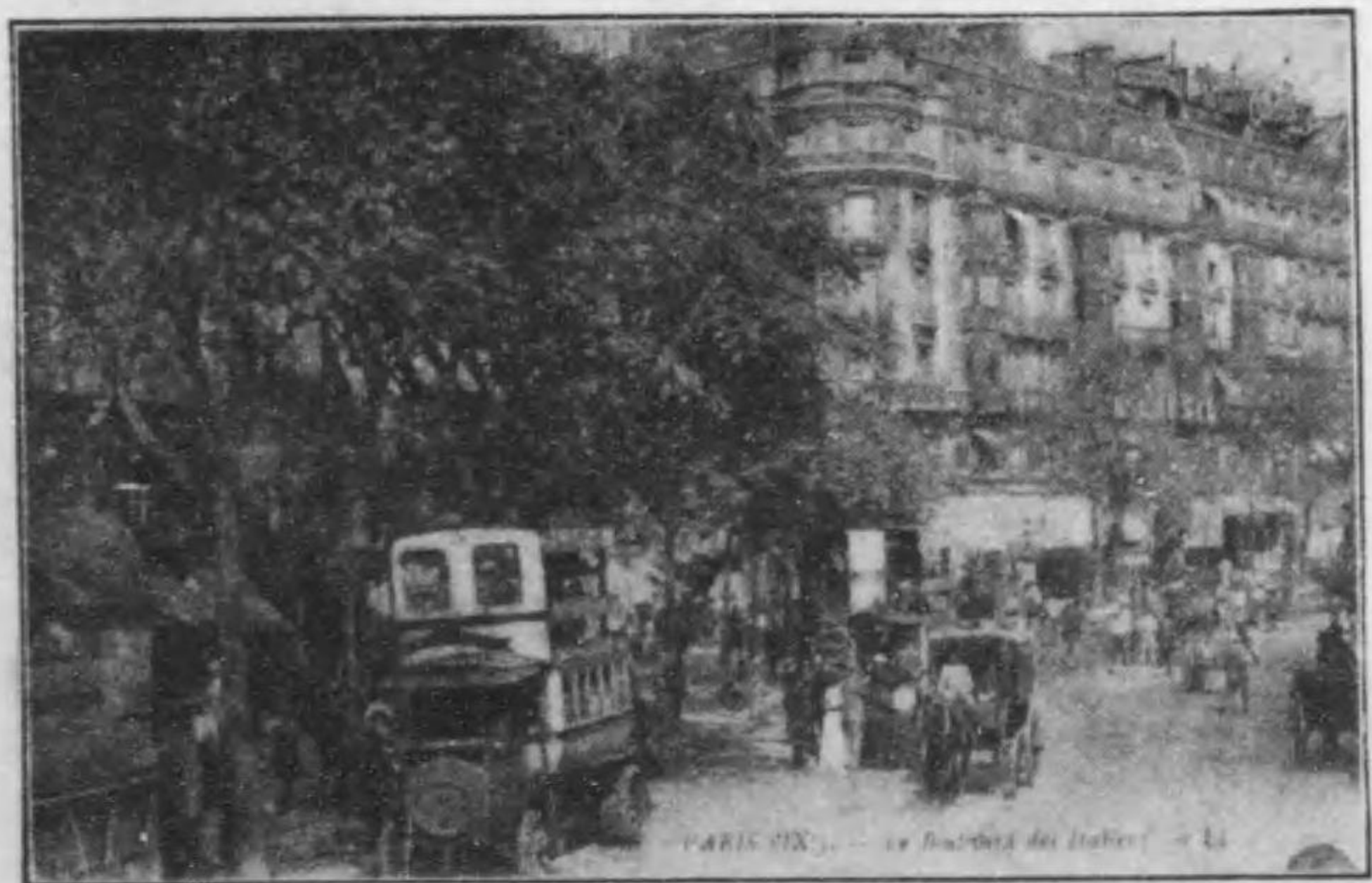
未だ餘程呑氣である。前後左右から引きも切らずに來る雑多な車の利那の隙を狙つて全身の血を注意に緊張させ、悠揚とした早足に半越して中間にある電燈の立つた石疊を一先づ足溜としてほつと一息つき、更に隙を縫うて向ひの人道へ駆け上り又ほつと一息つく氣持は然は云へ痛快だ。だが又セエヌ河へ出て見ると、一週間前から洪水で通船が止つた騒ぎであるに關らず、水に浸つた繫船場の河岸の其處彼處で黒い山高帽の群が朝早くから長い竿を取つて釣をして居る。近づいて見ると女も幾人が混つて釣つて居る。石垣の上に涯も無く本箱を載せた、



僕が其處を通る度に何時も馬場孤蝶君と一緒に覗き込まないのを遺憾に思ふ名物の古本屋の前には最うぞろぞろと人だかりがして居る。一所の本屋の主人である、肥太つた體へこてこてと着込んだ婆さんが僕をつかまへて「新しいロスタンの脚本なんかよりユウゴオ物をお読みなさい」などと勧めるのを観ると、身内の筋が悉く弛んですつと胸が開く様な暢達な氣持を覺える。斯う云ふ緩急二面の生活を同時に味はつて居るのが巴里人なのであらう。

一週間ほど前の夜、僕が最う寢巻に着更へて居ると扉をこつこつ遣る人がある。誰

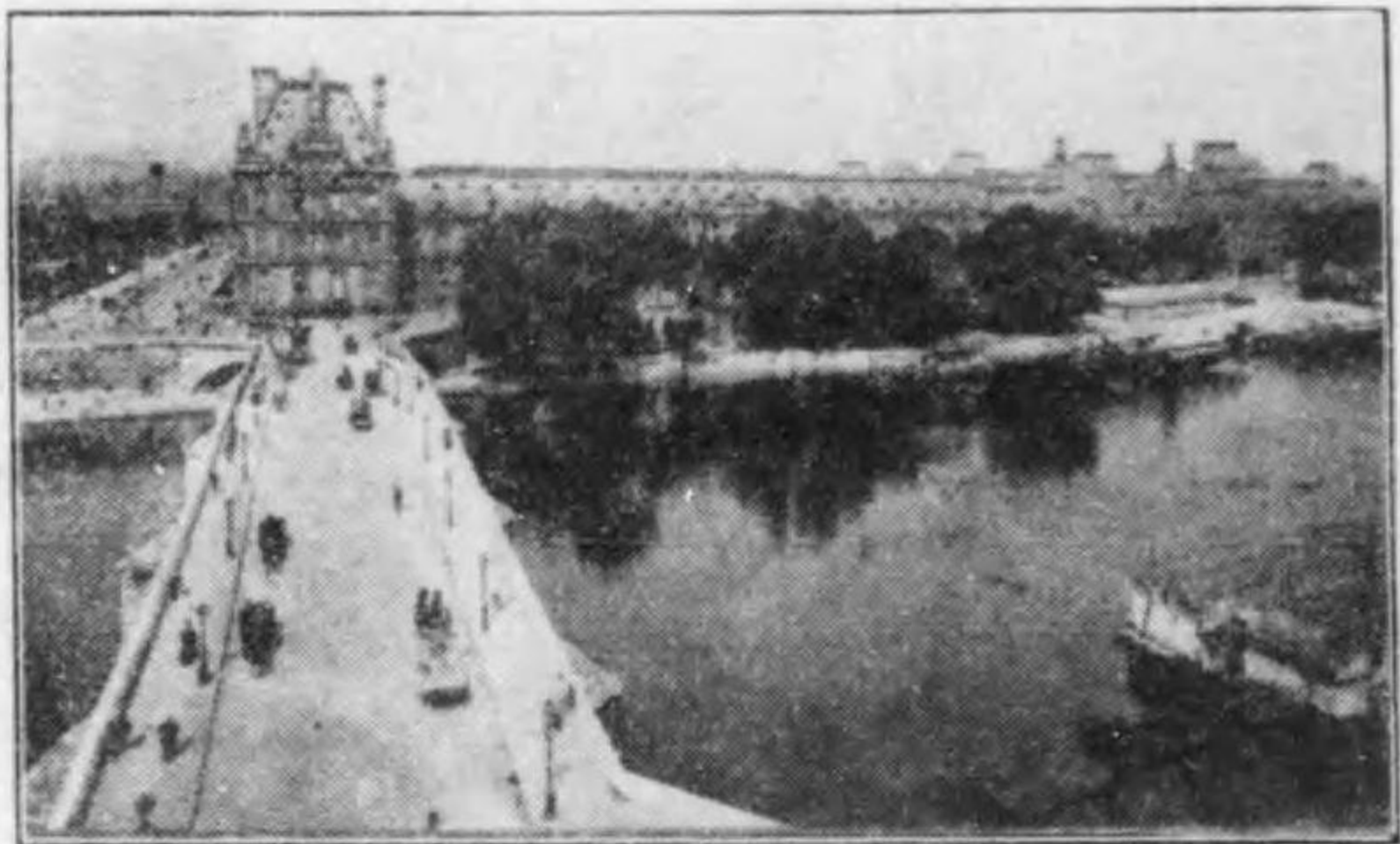
巴里より



街市の里巴

六六

かと思つたら大谷繞石君だ。倫敦を今朝立つて來た。巴里に二泊してマルセユから船で日本へ歸る積だ」と云ふ。繞石君に逢はうとは思ひ掛けなかつたので、扉を開けて這入つて來たのも、少時話した後で曲つた梯子段を寒い夜更に降りて行つたのも芝居の人物の出入りの様な氣がしてな



宮ルダウルむ望てて隔を河×エセ

らなかつた。呆氣ない別れが其時は當然の事の様に見える。想はれて格別何の感じも無かつたが、後になつて考へると何だか淋しい。二人で何を話したかも覺えず、唯繞石君の暫く散髪をしないらしい頭と莞爾して居た顔とが目に残つて居る許りである。

昨夜は柏亭とゲエテ街のカジノ・ド・モンバルナスと云ふ寄席へ行つた。巴里東部の場末に近い所だから此街の附近には労働者が澤山住んで居る。どの横町も灰色の夜陰に閉ぢられて灯

パンテオンの側から

六七



影が少く、ゴルキイの「夜の宿」の様な物凄さを感じないでもない。其中で活動寫眞、寄席、酒場、喫茶店などの軒を並べて居るゲエテ街が地獄の色の様な火明に赤く煙つて居た。従つて寄席の客の大半は労働者で帽や白襯衣を着ない連中が多く、大向から舞臺の歌に合せて口笛を吹いたり足踏をしたりする仲間もあつた。演じた物には道化した踊や流行唄や曲藝などが多かつた。若い女の大使ひが三匹の黒犬を寢室に入れ、終始無言で犬と一緒に夜食の卓に就いたり、燈を消して裸に成つて寝たりしたのは一寸凄い氣持を與へたが、盗人が忍んで來て犬に吠えられ短銃を亂發して防ぎながら終に咬殺されて仕舞ふのは、其れが見せ場である丈俗悪な結果であつた。寄席が散ねて少時は街一ぱいになつて歩く汚れた服の労働者の群に混つて歸つた。(二月十五日)

(一)

今は其季節で無いに關らず、いろんな繪の展覽會が各所に催されるのは嬉しい。新しい其等の會を毎日一箇所づつ觀て廻つても不足しない様である。此間美術商として

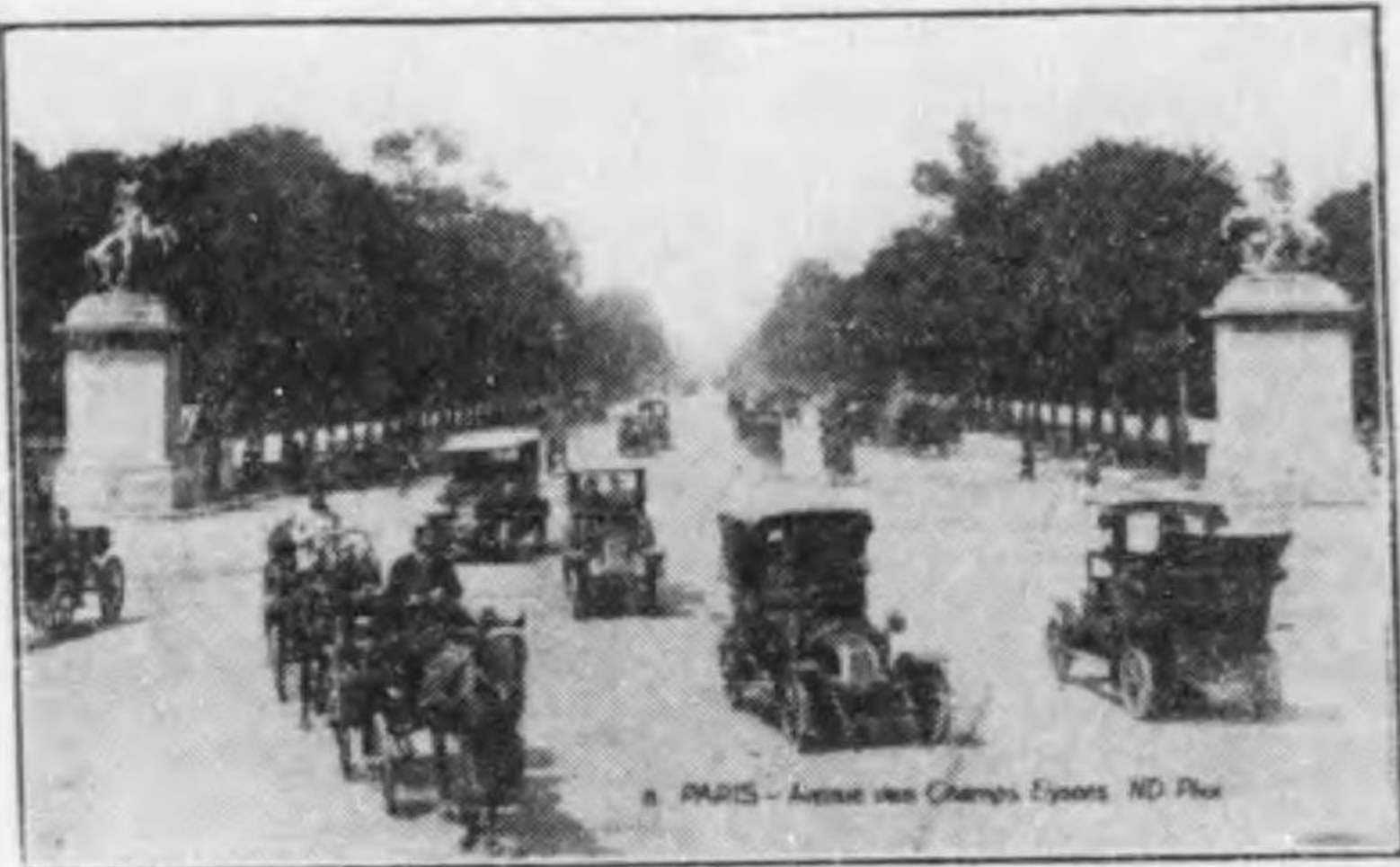
名高いドユラン・リュイル氏がその藏幅を毎火曜日の午後に公開するのを其私宅へ觀に行つた。客室を初め多くの室を食堂から寢室まで其日に限り開放して陳列室に供し、各室にフロックコートを着た係員を置くこと云ふ行き届いた設備がしてある。幾百と云ふ藏幅は大抵モネ、ピサロオ、セザンヌ、シスレエ、ドガア、ルノワアル等近代名家の作家の作品で満ちて居る。何れも其等印象派の畫家が未だ名を成さない時代に買ひ集めたものが多いらしく、リュイル氏が愛藏して賣品としない物許りである。

一昨日は巴里の好事家が大勢寄つて二月の中頃までルウヴル博物館の傍で公開する裝飾美術展覽會を訪うたが、二百五十室もあるのに到底一箇月掛かつても觀盡せるもので無かつた。中にモロオ氏が一人で出品した十餘室の繪畫は凡て前に擧げた印象派名家の初期の作許でリュイル氏の藏幅と併せて此派の發達した經過を研究するのに甚だ有益を感じた。シスレエが珍らしく屋内の人物を描いた「鍛冶屋」や、マネが最初に物議を惹き起した「草の上の晝飯」などもあつた。又幾室かに互つて歌麿の版畫が陳列せられて居るのを觀て、斯んなに多數の歌麿が巴里に愛藏せられて居るかと思つて驚か



された。おまけに日本に居ては僕達に観る機會の無い逸品が多かつた。聞けば去年は清長の展覧會があつて澤山な出品であつた相だが、此秋あたりには廣重の展覧會が催されるだらうと云ふ事だ。一體に巴里人の趣味が一方に雷同して傾く事なく思ひ思ひに自分の素性の同感する所を擇んで自由に其れを研究し樂んで行く風の盛なのが面白い。例へば此裝飾美術展覧會へ来て觀ても然うだ。伊太利、西班牙、印度、埃及、支那、日本のどの室にも縦覽客が満ちて居る。自國を過重して異邦を毛嫌ひしたり、新しい作品に許り趨つて前代を蔑視すると云ふ風が無い。歌麿の室で一一繪の線を蟲眼鏡で觀て廻る熱心家があるかと思へば、工人を伴つて來てルネッサンス前の伊太利の古い寢臺の寸法を取らせて自家用に模造させようとする紳士があるのを見受ける。劇ても同じ事、國立劇場で政府が保護して常に前代の傑作を演じさせて居るのは勿論、外の劇場でも舊い物と新作とを斷えず交替に演じて居る。新作物が大入を占めるからと云つて餘り續けて打つと、見識ある劇評家や識者から抗議が出て一般人に反省を促すと云ふ風だ。是でこそ深沈な研究と逼き同情との上に立脚して動搖の無い確かな最新の

藝術が沸き出るのでと頷かれる。



パンテオンの側から

男童女六百人を伴つて行つて日本の文明を開いた」と斯う云ふ調子で凡てが書かれて

浮世繪の鑑賞許りで無く、いろんな方面に日本員の好事家が多いらしい。或未亡人などは日本の物事と云へば何でも愛着して、同じ仲間の婦人と竹刀を執つて擊劍をしたり御經を讀んだりなんかする相だ。又日本の粗末な器物や米醬油の様な食料品を賣る家も巴里に幾軒かあるのを見受る。併し其等の好事家が何處まで深く日本を領解して居るかと思像すると甚だ怪しい。此間ガウチエと云ふ人が新しく書いた「ル・ジャボン」と云ふ薄片な本を、アカデミーの一員ジャン・エカアルの推稱した序文に絆されて讀んで見たが、「支那の始皇帝の侍醫であつた徐福が童



居たのでがっかりした。

満谷と柚木が當分ロウランスのアトリエへ通ふ事になつて昨日その同學生との顔繋ぎの式があつた。新入生が一人三十フラン宛の酒代を出して饗應するのである。「カフェエヘ」と云ふ塾監の聲を聞いて今迄繪を稽古して居た五十餘人の同學生が「オオ、ラ、ラ」と一齊に叫び立ち、各自分の椅子を片足に掛けてアトリエの前のリュウ・ド・ドラゴンの通に引ずり出し、裸で立つて居た三人のモデル女が服を着る違も無く、外套を引掛けた儘で學生に胴上をせられ、通りの真中に据ゑられた椅子の上に卸されると、忽ち五十の椅子が其れを圓形に圍んで歌ひ初めた。向ひ側が直行き附けのカフェエに成つて居る。之が爲に幾臺かの自動車が少時交通を遮られる騒ぎであつた。一同がカフェエの二階へ繰込むと新入生に對する道化まじりの祝辭を述べる者、踊る者、歌ふ者、芝居の真似をする者、凡て無邪氣な遊戯の限を盡して杯を舉げたが、二時間後には大風の過ぎた如く静まり返つて再び皆アトリエの中に繪筆を執つて居た。(二月十六日)

(三)

パンテオンの側のオテル・スフロウに泊つてから一箇月近く経つた。此宿は最初和田英作君などの洋畫界の先輩が泊つて居た緣故で巴里へ來る日本人は今でも大抵一先づ此處へ落ち着く。其頃のスフロウは随分きたない宿だつたと聞くが、今は電燈やステイムの設備も出來て居る。併し持主が二度も變つたので宿の者に以前諸君の遺した記念になる話を知つて居る者も無い。一緒に泊込んだ満谷君等の四人はもう既に畫室や下宿を見附けて引越して仕舞つた。僕も梅原君の世話でモンマルトルの方に下宿は見附かつて居るが、會話の稽古に行くミッセル夫人の下宿が近いのと、喫茶店に氣に入つた家があるのとでまだ越さずに居る。

ミッセル夫人と云へば其れがオテル・スフロオの初代の主人の細君だ。割合に教育のある、品の善い、親切な婆さんで、二十年間に世話をした日本人の寫眞を出して見せては自分の育てた子供の話をする様に得意相である。和田英作君の留學時代の若若し





サン・ミッシェル街の眺め

い寫真と近頃のとを比べて「斯んなに變つたか」と問ふ。肥満つた赤顔の主人は御人好で、にこにこし乍ら僕が行く度に外套を脱がせたり着せたりする。うちの細君は英語も出来るし、日本人に教へつけても居るから語學には便利だ」とか「兵隊に成つて居る長男を見て呉れ」とか云つて自慢する。才走つた人づきあひの好い細君は「併し日本から詩人として巴里へ来たのはお前さんが初めてだ」などとお世辭を言ふ。日本人がいろんな物を遺して行つたり、わざわざ日本から送つて呉れたりするので日本品の小さな陳列場が出来ると云つて夫婦は喜んで居る。

て居る。



ユルグン公園

其れが衛生的でも教育的でも無いのは、日本の中流以上の娘の子の晴着と稍趣が似

パンテオンの側から



て居る。子供が軽快に遊戯する爲めの服装で無く、母親が子供を自分の玩具にしたたり他人に見せ附けたりする爲にこてと着飾らせるのである。娘の子の装も圓く踊子の様に披いたのて無く、大人の女の服装と同じく日本の衣物の様に細く狭く直立したのが流行つて居る。日本の七八歳迄の娘が被る圓く張金が入つて上に斜にリボンの掛つた帽は、巴里へ来て見ると却て大學生の正帽であつて、子供には見掛けない。猶何かの儀式の外そんな正帽なんか平生に被る大學生は居ない様である。(二月二十一日)

(四)

土曜の午後から日曜にかけては殊にどの公園にも人出が多い。飛行機の本國だけに自製の飛行機の模型を試験的に飛ばせに來る研究家も少くない。二三人は必ず男女の畫家が寫生に來て居る。ベンチに凭掛つて晝日中居眠をして居る立派な服装の細君もある。伴れて來た五六匹の犬が裾の所で戯れて居るなどは吞氣だ。犬を婦人が可愛がることは子供を可愛がる以上とも云ひたい位だ。犬には寒さを防ぐ爲に大抵物が着せ

てある。腰から以下を二分割にし上半身の毛を長く伸ばして獅子の形にした犬などは憎さげだ。夫婦づれて乳母車を押して來るものもある。乳母車は大抵長い外套を着て頭から裾迄大幅のリボンを二筋垂れた一定の服装の襟母が押して居る。車の中の赤ん坊は水色か何かの毛布に埋まつて全く人形の様だ。此寒空に外へ出してよく病氣に成らない物だと思ふが、東京の様に乾風が吹かないせいもあらう。又巴里の様に日當りの悪い構造の建築では室内に子供を置く事が却て病氣を惹起し易からう。併し一體に巴里人は十五歳以下の子供を屋外に出さない。夜間は勿論晝間でも巴里の市中に子供を見る事は至つて少い。見掛るのは小學校の往復の時間位なものである。其れで土曜から日曜の兩親や監督者の暇な日に一時に公園へ伴れて出る。と云つて幾つかの大公園に遊んで居る子供は巴里市内の子供の總數から云へば千分の一にも當るまい。ル・マタンの記者が口を極めて子供を公園へ出し屋外の空氣に觸れさせよと勸告して居るのは道理である。巴里の母親は餘に自分の遊樂に耽つて子供の自由を顧みないと記者は言つて居る。



パンテオンは羅馬の其れに擬して佛蘭西の偉人を國葬する寺だ。ロダンの作で有名な「思想家」が入口の正面の空地に圓い屋根、圓い柱の大伽藍を背負ふ様に少し屈んで、膝の上の片腕に思慮と意志との堅實な顔載せて居る。堂内の數数の壁畫の中で何時見ても飽かないのはシャヴンヌの作だ。僧が斧で斬られた自分の首を攫んで居るボンナアの壁畫は思ひ切つて寒い色が目を引く不氣味な物である。案内者に導かれて地下の墓洞へ下りて行くと、毎に學者政治家達の石棺が花環に飾られて藏まつて居る。案内者が名と小傳とを高らかに云つて呉れる中で、僕の耳にはルツソ、ヴォルテエ、ユウゴオなどの文學者の名が強く響く。三四年前反對派の大騒ぎがあつて改葬されたゾラの棺はユウゴオと同じ籠の中に向合せに据ゑられて居る。

僕は夕飯後によく有名な「リラの庭」と云ふラタン區のキャツフェエへ行く。僕より一月早く來て巴里の珈琲店通に成つて仕舞つた九里四郎が初め伴つて行つて呉れたのだ。其處は以前から詩人や畫家がよく集る所で、謂ゆる「自由な女」などは殆ど來ない。品の好い變り者計りが集つて、杯を前に据ゑる乍ら原稿を書いたり、座談をしたり

雙六や骨牌を靜かに弄んだりする。大學生も田舎臭くない氣の利いた連中が同窓の大學生と伴つて立つて遣つて來る。若い詩人仲間の保護者を以て任じ、偶には詩の一つも作ると云つた風の貴婦人も其若い仲間を取巻かれ乍ら長閑に話して居る。(十三日)

(五)

石井柏亭が一月二十三日に西班牙から北部伊太利への旅行に出掛けた。其二三日前七八人寄つて送別の積りて夕飯を一緒にした歸りに、徳永、九里、川島、僕の四人でチュイルリイ公園に沿うた氷宮へ氷滑りを觀に行つた。設備は巴里に幾つもある舞踏場と似て居るが、人造の水で踊場を池の様に張詰めて其上で入場者が自由に踊り狂ふ所が異ふ。之は巴里に一箇所しか無いから晝夜とも賑はつて居る。場内には教師が幾人も居て滑り慣れない者に手を執つて教へる。僕等が行つた時は肥つた一人の貴婦人と淺黒い顔の猶太人とが危なつかしい腰附で徐徐と人込の中を教師の手に縋つて歩いて居た。併し見渡した所大抵熟練した連中許りて然う見苦しい素人は居ないやう





踊舞の(宮水)フラグ・ド・エレンバ

八〇

だ。舞踏場で踊る事が既に贅澤な遊びであるのに、危険の伴ふ氷の上で自在に踊るのは二重の愉快であらう。其上に婦人は流行の新装を見せびらかす楽しみもある。十分間の休憩を置いて管絃樂が始まる度に下手な連中は引込んで、四方の觀棚の卓を離れて出る一雙宛の人間が入亂れ乍ら素晴らしい速度で目も彩りに踊つて廻るのは、美しい鼓蟲の大群を蟲目鏡で眺めて居るかと思ふ程の奇觀だ。踊る事の出来ない國から來た僕等は鈍い動物が人間を観る様に二階から黙つて珈琲を喫んで見下して居た。入場者は男より女の方が多し。女同志で幾組も踊つて居る。お母さんと娘とで踊つてる組もある。一人紫紺の薄手な盛衣を着て白い胸飾をした、細りと瀟洒なひどく姿

の好い女が折折踊場に出では相手を求めずに單獨で踊の群を縫ひながら縦横に駆け廻る。其女が現れると妙に場内が引張り、引込むと流星の過ぎ去つた後の様に物足らなかつた。餘り僕等が注視するので其女も氣が付いたらしく、後には僕等の下を通る度にわざわざ見上げて微笑んで居た。此處で木曜日には特別に舞踏の巧い連中許が踊る。其れて平生の入場料は三フラン(一圓二十錢)だが、其晩に限つて六フラン取る事に成つて居る。歸途に大陸ホテルの前を過ぎると丁度今の季節に流行る大夜會の退散らしく、盛装した貴婦人の群が續續と自動車や馬車に乗る所であつた。ホテルの門前を警衛する騎兵の銀の冑が霜夜の大通に輝き、馬の吐く氣息が白く這つて居た。(一月二十五日)

### モンマルトルの宿



僕はパンテオンの側から河を越して反対に巴里の北に當るモンマルトルへ引越して来た。パンテオン附近と異つて學者や學生風の間人は少しも見當らず、畫家(殊に漫畫家)や俳優や諸種の藝人が多く住んで居る。名高い遊樂の街だけにタバランとかムウラン・ルウジュとか云ふ有名な踊場を初め、贅澤な飲食店や酒場や喫茶店が多い。派手な遊樂の女謂ゆるモンマルトワアルの本場であるのは言ふまでもない。晝日申また夜を徹して曉まで僕の下宿の附近には音楽と歌が聞えると云ふ風である。初めて越して来た日に重いトランクを女中のマリイと二人で三階へ引上げる時は泣き出したくなつた。日本の十疊敷許りの所に赤い絨氈を敷き詰めて、淡紅い羽蒲團の掛つた二人寝の大きな寢臺を据ゑ、幾つかの額と二つの大きな鏡の懸つた可なり立派な部屋だが、半月程暖爐を焚かなかつたので寒さが僕をがたがたと慄はせた。石炭を燃べても煙べても容易に温まらない部屋の中で僕はしみじみと東京の家を戀しいと思つて居た。併し夜になつて初めて家族と一緒に食卓に就いた時は、何だか僕の好きな大阪の家庭で食事をする様な親しさを感じて少し心が落着いた。下宿人は多勢居るが家族と一緒に



寺ルウク・エレグサと地高のルトルマンモ

食事をするのは僕の外に四人の美しい娘だけだ。此家の細君が餘程變つて居て間があればピアノに向ふか、てなくは踊の真似をして高い聲で歌つて居る。食事の間にも肉刀で食卓を叩き乍ら歌つたり、年下の亭主の首を抱へて頬擦りをしたり、目を刺いて怒る真似をしたりするので、家の内は常に笑を斷たない。其れに下宿人の娘の一人も飄輕者で細君に調子を合せて歌ひ、何かと冗談を言合ひ乍ら其末が直ぐ二人共歌の調子に成る。美男の亭主は何時でも「然うだ、然うだ」と言つて莞爾して居る。フツフツ、ユウユウと云ふ流行唄の二つの間投詞を取



つて名づけた二匹の小犬が居て食卓の下で我我の足に突當り乍らうろろする。膝へ  
 驅上つても来る。其度にきやつきやと笑ふので小犬等も亦食卓を賑す一つに成つて居  
 る。樂天的な滑稽けた家庭だ。之が純巴里人の性格の一種を示して居るのであらう。  
 或友人から巴里人は儉素だから家庭へ入るのは不愉快だと聞かされて居たが、一概に  
 然うでも無さ相である。食事なども並の料理店で食ふより旨く、又何時にも「充分だ」と斷  
 らねば成らぬ程潤澤だ。驚くのは巴里の女は概して然うなんであらうが、細君や例の  
 下宿人の娘等がよく酒を飲む事である。シトロンでも煽る調子で食事毎に葡萄酒や葡  
 萄酒を飲む。そして夜ふかしをするので、大抵午後一時頃に起きる。僕は此女連中の化  
 粧する所を興味を以て観て居るが、いろんな日粉を顔から胸や背中へ掛けて塗り、目  
 の上下にはバステルの繪具のやうな形をした紫、黒、群青さまさまの顔料を塗るの  
 は、随分思ひ切つた厚化粧だが、仕上を見ると大分に容色を上げて居る。男らしい酒  
 落な性格の細君の他の一面には怖ろしく優しい所があつて、越して来て五日目に風を  
 引いて僕が寝て居ると、毎夜午前二時頃に橙を入れたアメリンカンと云ふ熱い酒や

玉子焼などを拵へて見舞に來て呉れたりする。僕は伊太利へ旅行するまで此家庭に居  
 ようと思ふ。宿は21 Rue Victor Masséにあるが、宿の主人の名は Louis Piroley  
 である。(二月二日)

### 畫室と墓

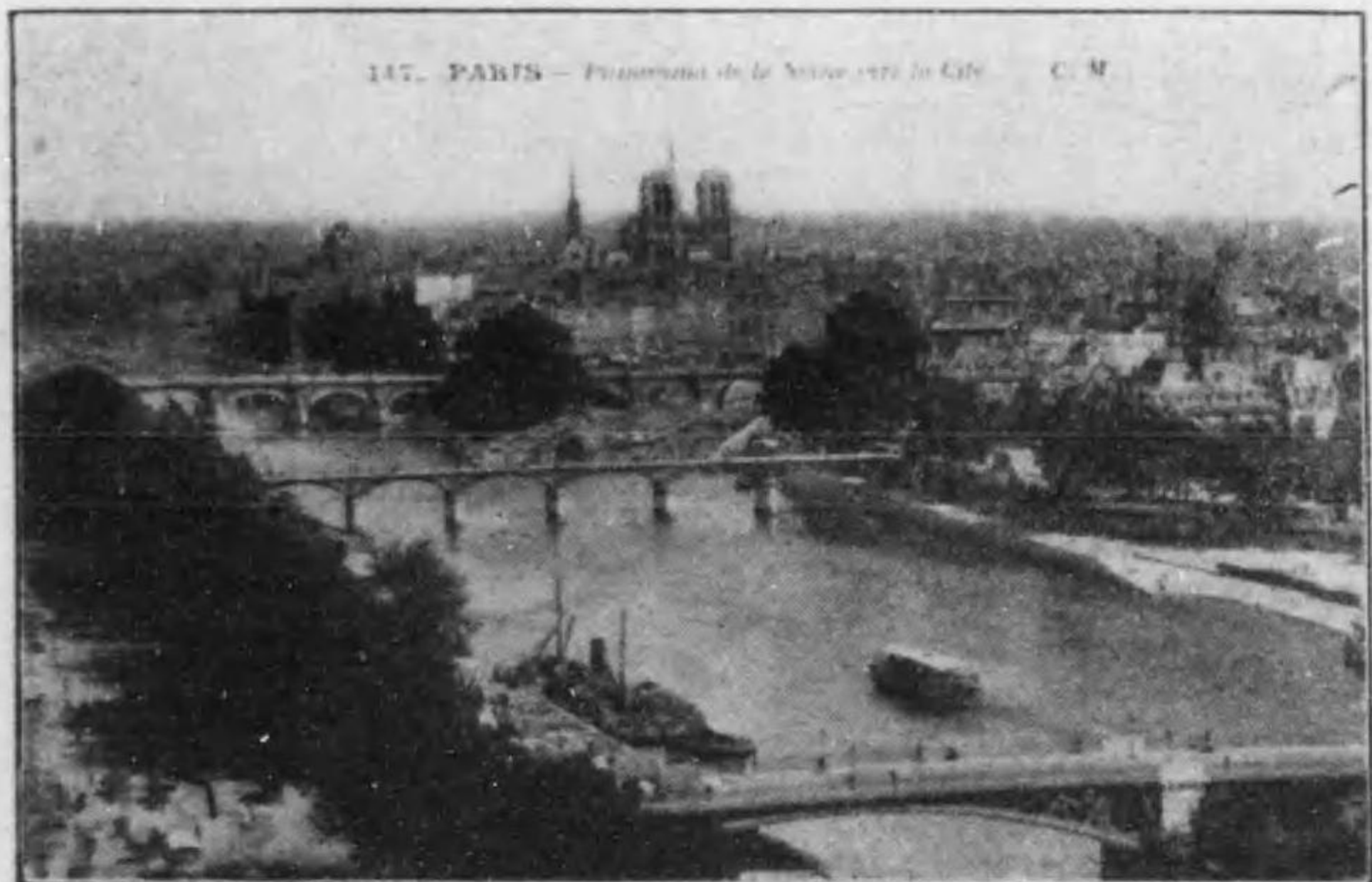
二月の最初の土曜日だ。ロオランスの教へに來る畫室を參觀に行かうと徳永に約束  
 がしてあつたので珍らしく早起をした。其晩には薄い初雪が降つた程朝から寒い日だ  
 あつた。暖爐の火が灰がちな下に昨夜の名残の紅玉の様な明りを美しく保つては居る  
 が、少しも暖く無いので寢巻の儘楊枝を遣つて居た手を休めて火箸で搔廻すと、昨夜の  
 儘の盛高な形をして居た火は夢を見て居た塚の中の骨の様に脆く崩れて刹那に皆薄白



い灰に成つて仕舞つた。生中いちくらずに置けば美しい火の色丈でも見られたものを、下手に詩に爲た許に本の面白い感情が失はれたのと同じ様な失望を感じた。女中のマリイの汲んで置いて呉れた水が顔や手先を針の様に刺す。今朝は急ぐので剃刀を當てることを止めて服を着ようとすると新しいコルへ前の釦が容易に入らない。窓から射す薄暗い明りの中で厭な姿が二つの大きな鏡へ映る。大將、だいたい弱つて居るぢや無いか」と僕の心の中の道化役の一つがひよつこりと現れて一言の白を投げた限引込んで仕舞ふ。「フム、フム」と黒幕の中で鷹揚に鼻の先の軽い一笑を演じる一つの心が其れに次ぐ。後は氣の乗らない沈黙。其間に腕に腕を居た首と手とは漸とのことで釦を入れ終つた。洋服を着て仕舞へば、時計、手帳、墓口、手巾、地圖、辭書、萬年筆と、平生持歩く七つ道具は彼の棚と此卓とに一定して置かれてあるので、二分と掛らないで上衣、下袴、外套の衣囊へ各所を得て收められて仕舞つた。部屋に錠を下して置いて暗い階段を三つ下る。入口を出て臺所の硝子戸をコッコツ造つて見たが未だマリイは起きて居ない。熱い珈琲と牛乳とを啜つて行く事は出来なかつた。口を堅く閉

ぢて鼻で深呼吸をしながら門を出た。南北地下電車では往復八錢の切符を呉れた。車中は男女の労働者で一杯に成つて居る。女は大抵帽を被つて居ない。未だ東京で三年前に買った儘のを被つて居る僕の帽も此連中の垢染みた烏打帽や龜裂れた山高帽に比べれば謙遜する必要は無かつた。序に日本人は平氣で烏打帽を被るが、巴里では専ら労働者の被るものである。シテエ・フワルギエルの十四番地へ來ると徳永は最う起きて居た。早く遣つて來ましたね、君。でも七時半だよ。ゆうべ長谷川君と遅く迄話し込んだので僕は朝寝をして仕舞つた。衣替をする間待つて居て呉れ給へ。満谷は起きてるか知ら。彼處で待つて居よう。向には煖爐も消えてないだらうから。ては然うして呉れ給へ。ゆうべ隣のKが何うしたのか歸つて來ない。知つてる獨逸人の紹介で俳優なんかの來る宴會へ出掛けたのだが。尤も昨日錢が届いたからね。併しあの男は堅相ぢやないか。僕は三階を下りて近所の満谷の畫室を叩いた。僕の聲を聞いて直に右隣の畫室から柚木が顔を出した。寒いぢや無いか。寒いね。満谷さんは寝てるかも知れん。まあ僕ン所へ入り給へ。君の病氣は最う好いかね。難有う。熱は高かつた





寺ムダ・ルトオノと河×エセ

八八

が一寸した風邪だつたんだね。ゆうべから起きたよ。大きな物を描き出したね。此方は長谷川かい。随分凄さうなモデルだね。」

「長谷川君と二人で遣つてゐるんだが、實際其通り目の下のどす黒い女でね、よく喋るんだ。満谷が起きた様だから行つて見ると小豆色の寝巻の儘で黒い土耳其帽を被つた満谷は「ゆうべ汲んで置くのを忘れたら、今朝水道が凍つて水が出ない」と云つて水瓶を手にした儘暖爐の前に立つて居た。病氣は何うだい。」

「四五日で癒つて仕舞つた。」

「さう早起なんかして盛返しはしないかい。」

「大丈夫だ、今日は徳永が君達の行つ

てる畫室を観せると云つたから六時に起きたよ。」

「そいつは行けなかつたね、徳永が知らないんだ。先生が来て批評する日は參觀は許さないんだ。併し一寸行つて先生の来る迄に歸り給へ。」

「然うかね。然うしよう。」

此間満谷が和田三造の所へ行くと來合せて居たモデルに和田が「イレエ、モン、ペエル」と言つた相だが、満谷の今朝の寝起姿を見ると僕も「此人はおれの父親だ」と一寸言つて見たく成つた。

八九

満谷、徳永、柚木、長谷川の四人と一緒に掛けた。長谷川丈はマチスの弟子分だと云つてよいワン・ドンゲンの畫室へ通ふのである。ドンゲンの事は去年サロン・ド・オトンスの批評の中で柏亭君が日本へ紹介したらうと思ふ。近頃巴里では斯う云ふ新しい畫家の畫室へ通ふ青年畫家が月毎に殖えて行く相だ。尤も長谷川は斯う言つて居る。ドンゲンが新しいから通ふのちや無い、又ドンゲンに心酔する程ドンゲンの繪が解つて居るのでもない。東京から巴里へ來る畫かきが皆同じ老大家の所許へ集るのも氣が利かないと思つて少し變つた人の所へ出掛ける迄だ。」

と言つて居る。南北地下電車に乗つた。ロオランスの出るジュリヤンの畫室の前にある珈琲店で皆熱い珈琲と



麵麩とを取つて廉い朝飯を腰も掛けずに済めた。  
 畫室の入口の扉を押すと月謝を納める所がある。狭い、穢い、薄暗い冷たい所だ。  
 以前東京の神田あたりにあつた英漢數に國語簿記何んでも教へる隨意科の私立學校を  
 聯想せずには居られなかつた。も一つ扉を抽くと階下は外の先生の出る畫室で、朝の  
 生徒が三十人程一人の男のモデルの裸を圍んで畫架を立てて居る。引返して二階へ上  
 つた。其處がロオランスの畫室だ。同じく朝の組の生徒が二十四五人瘦せた裸のモデ  
 ル女を圍んで黙つて一所懸命に木炭をさしらせて居る。満谷等が入學の日に大騒ぎを  
 した呑氣な連中だとは全く思はれない。早速一緒に行つた諸君も畫架に向ひ始めた。  
 四方の壁には天井に沿うて競技に一等賞を得た生徒の繪が掛つて居る。日本人では古  
 い所で中村不折、鹿子木孟郎諸君の一枚づつ、近頃で安井の繪が三枚何れも目に着  
 く。ロオランス翁の來ると云ふ十時ならぬ前にジュリアンを出て、オデオン座の廊  
 で書物や雑誌を買ひ、リュクサンブル公園をぶらぶら横斷して小林萬吾君の畫室へ來  
 た。叩くと、主人は扉を細目に開けて、



(てに里巴)イテケハ・キシイ プンル・ツツリウフ シロヒ・ノサヨ

「やあ、今モデルが裸になつて居る所だ。」  
 「仕事をしてるんですね。用は無いんだ。歸ら  
 う。」  
 「歸らなくてもいい。遊んで行き給へな。僕は  
 勝手に最う少時仕事をするから、日本の新聞も  
 來て居るよ。」  
 「それぢやあモデルには僕も畫かきだど云つて  
 置いて呉れ給へ。」と云つて僕は内へ入つた。小  
 林は裸を描き乍ら話した。  
 「ルンプが急に獨逸へ歸つたよ。君に宜しくと  
 云つて、其れから寫真代の取替とか割前とかを  
 君に渡して呉れて預けて行つたよ。」  
 「歸るとは云つて居たが俄に立つたんだね。伴



れて居たロオゼンベルグと云ふ女は何うしたかしら。情婦の様でも情婦で無い様でも思はれたね。」

「僕は其女をよく知らなかつた。」

「ルンブは伯林でエミール・オオリックの所で一緒に繪を習つた相弟子だと云つて居たが、描いた繪は見なかつたけれど、なんでも伯林の女子美術學校を卒業したと云ふので、絹物の繡の圖案のオリヂナルに富んで居た。下圖は作らずに頭から布へ打附に繡を造つて居たよ。巴里でも其意匠を仕立屋へ賣つて喰つてたらしい。頻りに日本行きたがつて居た。一寸見識もある變つた女らしかつた。」

「ふん・そんな女だつたかね。ルンブも君此秋は復日本へ往くと云つてたよ。」

「僕にも然う云つた。何でもルンブの考へでは此秋に佛蘭西と獨逸とが確に戦争すると云ふんだ。先生、兵隊だから召集を逃げる爲に東洋へ往くと云つてた。親父の錢許り遣つても居られないから、丁度此頃巴里の美術商が二三人組合つて革命騒動のどさくさ紛れに北京へ行つて支那の古い美術品を廉く買ひたい、其顧問に成つて呉れと頼ん

で居るのを機会に、一萬圓の旅費を出させて行かうと今相談して居る、と話してた。急に立つたのは其でも纏まつたのかも知れない。斯んな話をして居る内に小林は繪を描き休めてモデルを歸した。其れから近所で麵と鹽豚とを買つて来て午飯を食ひ初めた。

「今日は日本飯で無いね。」

「うん、僕が麵を食ふと言ふのは實際珍らしい。此畫室へ来て今日が初めてだ。夜分には例の土曜日に遣る日本飯の會が僕ン所であるんで和田、町田、大住なんて連中が集まる。晩に御馳走があるから畫は淡泊済まして置くんた。」

僕は買物を小林君に預けて置いて、以前から一度入つて見ようと思つてた、通りを一つ隔てた直ぐ前のモンバルナスの大墓地の門へ入つた。バウドレルの墓が最初に解つた。墓碑には詩人の半身像を、墓の上には詩人の臨終の臥像を刻し、臥像の臺石に小さく詩人の名と生歿の年月とを記した丈で、外には何も書いて無い。墓地の大きな路の一つの突當りにあるのでよく人の目に着く墓だ。墓碑には青い羅が這上つて居



た。マウバツサンの墓が見附からないので廣い墓地を彷徨いて探して居ると、瑠璃紺の鍔だらけのマントウを被つた老人の墓番が一人通つたので呼留めて問うた。墓番は思つたよりも老人で、酒の臭ひをさせて居る。

「あなたは支那人かね、日本人かね。」

「僕は日本人。」

「日本はいい美しい國だ。わたしは以前歩兵でね、横濱、それから江戸へ行つた。二月滞在して居た。」

「それは珍らしい。幾年前。」

「四十年前。いや、もつと前。あなたは日本の大使の墓をも訪ひますかね。」

僕は老人に導かれて千八百八十八年に巴里で歿した全權大使ナホノブ、サメジマ君の墓を料らずも一拜した。マウバツサンの墓の上には桃葉衛矛と狗骨とを植ゑ、後の碑には名のみを太く書き、碑の前には開いた書物の形をした鑄銅の上に生歿の年だけを記したものが据ゑてあつた。狗骨は珊瑚珠の様な赤い實を着けて居た。僕は手帳の

上へ老人に記念として名を書かせた。エス・ブリゲデイエと署名して僕に幾度も聲を出して讀ませた。少し酔ばらつて居る老墓守は「一九一二年三月三日」と書くべき所を「一月三日」と書いて平

氣で居た。

「お前さん、もう一人

よい詩人の墓を訪はう

と思はないかね。」

「誰だね。」

「ル・コント・ド・ロイ

ル。名高い詩人。」

「おお、ル・コント・ド・

ロイル。僕はその墓が此處にあることを忘れて居た。シル、ヴウ、ブレエ。」

老人は得意になつて案内して呉れた。其れはマウバツサンの墓から遠くは無かつた。



墓のンサツマワマ・ド・イキ



墓の上にはリラを植ゑ、後の圓い蠟石の碑の上には詩人の半身像が据ゑてあつた。また像を掩うて今は落葉して居る一樹の長春藤が枝を垂れて居た。ブリゲデイエ君に禮を云つて酒手を遣らうとしたが中頭を振つて受けない。西洋人としては珍らしい男である。強ひて老人の衣囊へ押込んで置いて早足に墓を出た。門を出る時一度振返つて見たら、よろよろして墓の奥へ入つて行く後姿が石碑の間へ影の如く消えた。古い佛蘭西の歩兵よ、老いた墓守よ、僕に取つてお前は今から墓へ入つたも同じだ。もう再び會ふ日は無いであらう。(二月五日)

サン・ゼルマン

二月に成つたら一層寒くなる筈の巴里が今年は何うした調子外れか好い天氣が続い

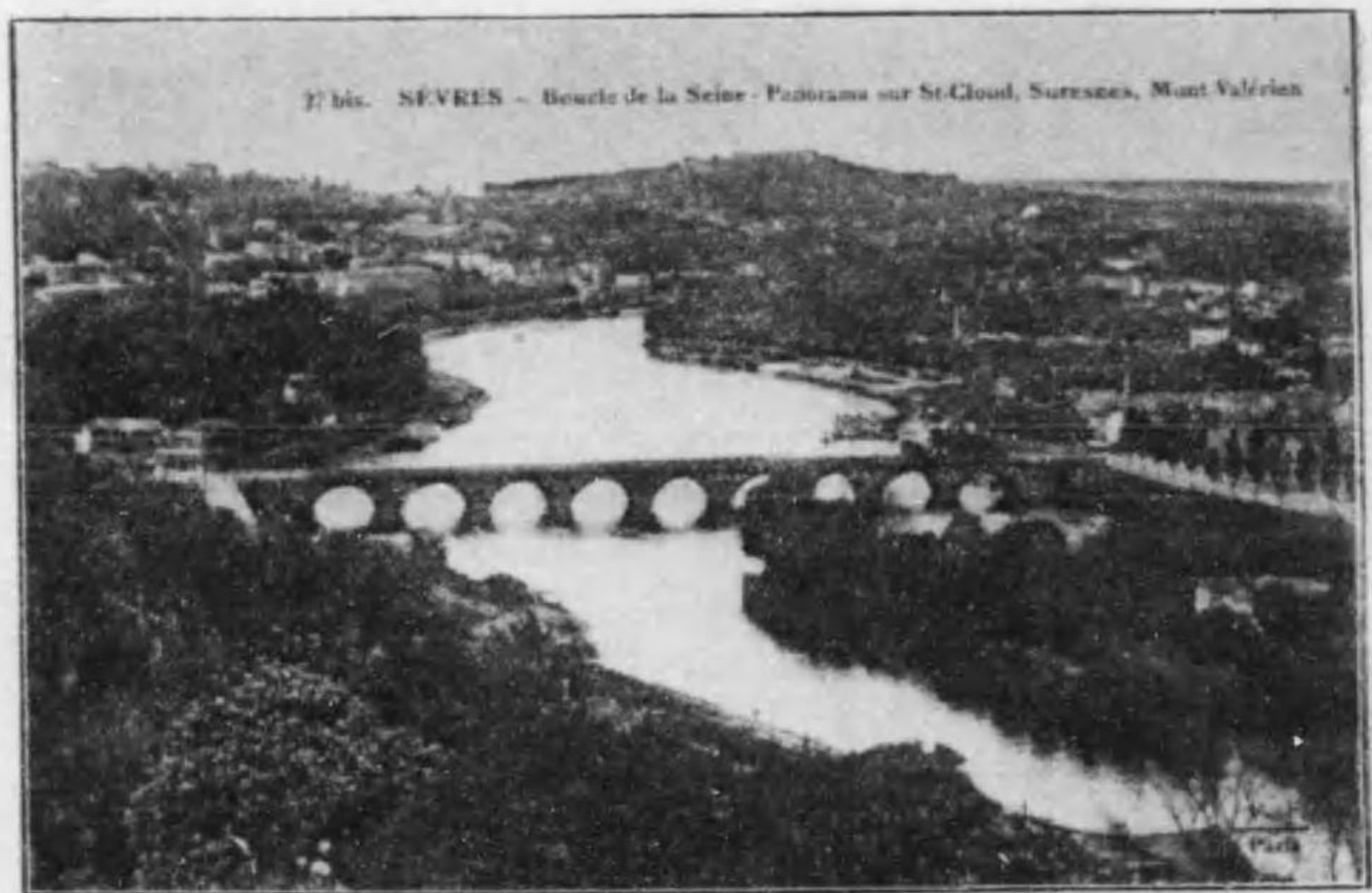
て僕の部屋などは暖爐を焚かなくつてもいい様に成つた。少し街を歩けば外套が脱ぎたくなる程の温かさだ。斯うなると何處か郊外へ出掛て思ふ存分日光に浴し新しい空氣を吸つて、一月以上陰氣な巴里の冬空と薄暗い下宿の部屋とに壓へられて居た氣持を忘れない。約束をして置いたら寢坊の九里が遠方のカン・ブルミエのアトリエから朝早く遣つて来た。案内をして呉れる梅原は朝飯を食つて居るのか、お化粧に暇が居るのか容易に近所の家の七階ある頂邊の畫室から降りて来ない。サン・ラザアルの停車場から汽車に乗つたのは十時であつた。セエヌの下流は蛇が曲線を描いて走る形に迂廻つて居るので、汽車が眞直に其曲線を突切つて三度河を渡るとサン・ゼルマンの街に着いた。巴里から此處へは四十分で達せられる。土地の感じは京都から伏見へ行くのと似て居る。昔の城や王政時代の離宮の跡などがある。舊い街丈に何處か落着いて光澤消しをした様な雅な趣が漂うてる。

停車場の前には御者臺に鞭を樹てて御者帽を被つた御者が手綱を控へて居る品の好い客待の箱馬車が十五六臺靜かに並んで居た。直ぐ左手に昔の城を少し手入して其れ



に用ひた博物館がある。之は佛蘭西唯一の考古學的遺物の多い博物館として名高いものだが、其れを観るのは再遊の時に譲つて僕等は街の中を何と云ふ當も無く縦横に歩いて廻つた。割合に多い骨董商の店を覗いて立止りもした。小學校の土塀の崩れから田舎の小娘の遊んで居る群を眺めもした。此街の人は我我外國人に對して少しも不思議な顔せず、格別振返つて見る者も無い。巴里の場末の人間が妙な目附で覗き込んだり「あれは支那人か」なんて後で噂したりするのに比べて大變に氣持がよい。一方の街外れへ來たら次第に坂路に成つた。セエヌが其處にも流れて居るのだらうと云つて降りて行つたが、河は無くて果知らぬ丘陵の間に野菜畑が續き、散らばつた百姓家の庭で鶏が鳴いて居た。佛蘭西の野は大體に霜が少いから草が何處にも青んで居る。白楊やマロニエの冬木立に交つて最う芽立の用意に梢の赤ばんで居る木もあつた。とある矮い石垣の上に腰を掛けた九里は大きな煙管を啣へて快さ相に燐寸を擦つた。

腹が減つたので異つた路を登つて街へ引返したが、黒塗の大きな木靴を引ずつて敷



河マエセとルゲエセ外郊の里巴

石の上に音をさせ乍ら悠然と歩く肥つた老人が土地で一流の料理屋「アンリイ四世樓」を教へて呉れた。此サン・ゼルマンは一體に高い丘陵の上にある街だが、僕達が晝の食事をした其レストウランは街外れにある名高い「サン・ゼルマンの森」を背にし、十七世紀にル・ノオル王が切り平させたところ云ふ横長い岡の上の一隅に建てられて、直下に淺黄色のセエヌを瞰下し、ベック其他の小さい田舎の村を隔てて巴里の大市街を二里の彼方に見渡して居る。食堂では泊り客の英國人の大家族と、馬に乗つて來たらしい山高帽を被つた四人の佛蘭西婦人と僕



等との三組が食事をした。飲んだ葡萄酒は千八百八十幾年かの物であつた。

巴里やセエヌや平原を眺め乍ら二十町もある例の横長い岡の上を氣永に歩き切つて、それから名高い森の中へ入つて行つた。黒ずんだマロニエの木立に白樺がまじつて居て落葉の中に所所水溜が木の影を映して居る。縦横に交叉して居る大きな路は時馬車の地響を擧げ乍ら、其先は深い自然林の中に消えて仕舞ふ。折折木靴を穿いた田舎人が通る。細君と娘とを伴つて散歩して居る陸軍士官にも遇つた。九里と僕とは梅原から巴里の芝居の話聞き乍ら歩いた。又何か冗談を言合つては晴やかに笑ふ事が出来た。先に横長い岡を歩いてる時うっかり僕が「氣持のいい海岸へ来たね」と言つて笑はれ、森の木がどれも青い粉の様な苔を附けて居るのを「鶯餅の木だ」と言つて又笑はれた。九里は又マロニエの幹を長い棒麩、梢の枝振を箒、白樺を「砂糖漬の木」などと言つた。而して三人が歩き乍ら、

森の、野の上の、海岸の、

巴里とセエヌを見下すサン・ゼルマン、

鶯餅の、長い長棒麩の幹の、

さうして箒のマロニエ、其れに交つた砂糖漬の白樺の棒綯。

斯んな物を綴り合せて笑つた。後から思へばたわいも無いが、之が、郊外を歩く伸びりした僕達の氣分を其利那によく現して居た。(二月八日)

### 文人の決闘

若手の戯曲作者として近年巴里の俗衆に人氣のあるガストン・アルマン・カイアエエ君と、巴里唯一の藝術新聞コマディアの記者で常に直截鋭利な議論を書く有名な若手の劇評家エミール・マス君との間に決闘沙汰が持上つて、その決闘が二月十六日の午前十一時からブランス公園の自轉車稽古場の庭で行はれた。事件の原因は略して言



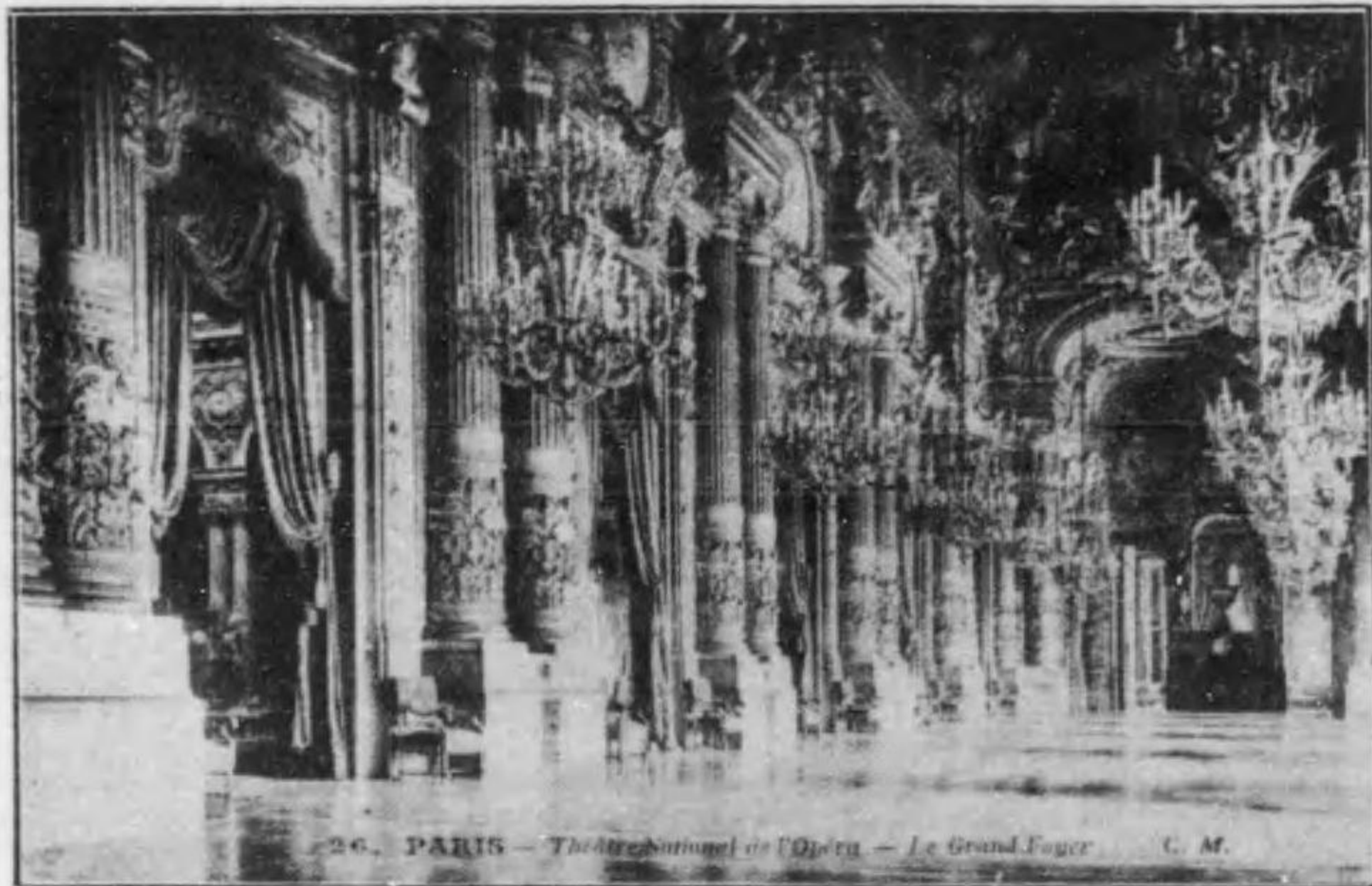
ふと、カイアエエ君の作つた「プリム・ロオズ」と云ふ平凡な脚本が俗衆の人気に投じたので、去年の冬以来引續き国立劇場のコメディ・フランセエズ座で毎週に三四回も演じて其度毎に大入を占めて居る。マス君は其れを十數回に亙つて攻撃した。マス君の論旨は、政府の保護の下に設けられて居るコメディ・フランセエズ座は普通の劇場と異ひ、他の美術品を博物館で國家が保存する如く昔の天才の作つた芝居を保存する國立の博物館である。勿論新しい作者の戯曲を選択して世間に紹介する事も國立劇場の目的の一部であるが、其れは他の劇場の多數が争うて新作を紹介する今日に國立劇場が積極的に力を用ふべき所ではない。新作の價値の定まるのは時を要する。急いで博物館へ藏めるには當らないと云ふのである。「プリム・ロオズ」の様な循俗的な脚本が毎夜の様に演ぜられて比較的第三流の俳優が登場し、名優ムネ・シユリイヤルバルディなどの得意とするコルネエユ、ラシニス、モリエールなどの鉅匠の作を演ずる日が削減されるのは遺憾なことであるから、マス君の議論は眞に發言の時を得たものであつた。單に「プリム・ロオズ」の作者に向つて許りて無く、藝術以外の情實に制せられる國立劇

場の諸役員と藝術上の鑑識を墮落せしめつつある多數の巴里人に向つて反省を促したのがマス君の論旨であつた。カイアエエ君もマス君も人氣のある文人であり且問題の關係する所が大きい丈に、マス君の議論が巴里人の視聽を惹いて何事か起らねば止まない氣勢が豫知せられた。果然二月十三日の晩フランセエズ座の見物席に腰を掛けて居たマス君の後から肩を軽く叩いた一人の男がある。其男と共に廊へ出たマス君は數語を交換した後で非紳士的な腕力の一撃を受けた。其男はカイアエエ君であつた。兩君が決闘するに到る迄の經過は以上の如くであるが、決闘沙汰の傳はるに従つて周囲の騒ぎが大きくなり、之れに對する名士の批評が多く新聞紙上に發表された。識者の同情は概してマス君に傾いて居てマス君の議論に正面から反對する様な批評は一つもない。巴里の批評家の團體はマス君の議論を正理の擁護だと非公式に認め、フランセエズ座の名優某は匿名の下に「カイアエエ氏の十三日の夜の行爲は神聖なるモリエールの家(國立劇場)を瀆したものだ」と述べ、また藝術専門の大新聞紙コメディエールの社長デス・グランヂユ氏は「マス君の議論は批評家としての權威の下になされたもの



だ。此位の道理は肉屋の番頭にも解ることだ」と云つてカイアエエ君を揶揄した。カイアエエ君は又仲介者を立てて此社長の文章を詰問して取消を請求したが、社長は應ぜざるのみか却て仲介者を説服した。仲介者はカイアエエ君に手紙を送り「貴下が不名誉なりとせらるる所は我等の最早立入るべからざる所に候」と云つて其任を辭した。カ君は更に社長へ直接手紙を與へて取消を求めたが社長は其手紙に添へて「貴意には應じ難い。此上は如何様の御相手をも辭するもので無い」と言ひ切つた。カ君は社長とも決闘沙汰に訴へざるを得ない形勢になつた。其處へマス君との決闘の日が來た。決闘の様を少し書かう。相手が互に巴里ツ子同士、流行ッ兒同士であり、其れが右様の事情の下に行ふ決闘であり、其上當日の決闘振が非常に壯烈であつたので、翌朝の新聞は何れも決闘場の寫眞を挿んで種種と激賞の辭を並べて居る。

大抵決闘場は關係者以外へ祕密にして置くものだが、巴里人の注目して居る決闘丈に其場所を嗅付けて二十三人の新聞記者、二十七人の寫眞師、五人の活動寫眞師が押寄せた。此通り多數の見物人を集めた決闘は近頃稀有な事だ相である。決闘場に立入



室歩遊大の場劇ラオ立國

る事を拒絶せられた寫眞師等は何うして空しく引取るものか、早速近所の喫茶店から長い梯子を奪ふ様に持出して自轉車積古場の亞鉛屋根へ澤山の寫眞機を据ゑて仕舞つた。

戦士は各二人の立會人と一人の外科醫と五六の親友とを従へて到着した。武器としては雙方長い劍を擇んだ。立會人等は協議の上二回迄の對戦を承認した。決闘場の土地の檢案が済まされ、兩者の劍が砥がれた。戦士は向ひ合つた。カイアエエ君は偉大な體格をして態度の沈着な男、之に反してマス君は日本て言へば正宗白鳥君の様に



優形な小作りの男で、一見神經質な、動作の軽捷な文人である。但し白鳥君には髯が無いけれどマス君には後へ撥ねた鬚がある。見物人には一撃の下にマス君が敗れ相に危まれたが、併しマス君は見掛に寄らず最後まで勇敢に戦つて立派に名譽を恢復した。

「行け、兩君」と叫ぶ第一回の指揮者ランナウ君の聲が沈黙を破つた。劍と劍とは半曇つた二月の空に、屢々相觸れて鳴つた。間隙の無い見事な對戦に觀る人の心は胸苦しい迄緊張した。マス君は屢々眞直な鋭い劍を送つたが、偶々其れを避け外したカ君の右腕から血が流れた。可なり深い負傷であるに拘らずカ君は戦闘を續けた。何うした機會かカ君の劍が中程から折れて敵手の上に飛んだ。其利那人人は鋒尖が必定マス君の腹部を突通したと信じた。中止の號令が下つた。併し折れて電光の如く跳つた鋒尖はマス君の袴を烈しく割いたに過ぎなかつた。人人は奇蹟の様に感じてホッと氣息をついた。

カ君は新しい劍を執つた。今度はドルシエール君の指揮の下に第二回の決戦が開か

れ、互に巧妙な突撃と迅速な回避とを交換して第一回にも優る猛烈な戦闘を續けて居る中、マス君は右腕に二回迄敵刃を受けた。止まれ」の聲と共に決闘は終つた。醫師は急いで兩君に綑帯を施し、立會人等は官衙へ差出す始末書を認めて署名した。併しカアエエ君とマス君とは此決闘に由つて満足するを肯じない。其れて和睦の握手を交換する事なく武装を解くに到らずして各自自動車に乗つて別れて仕舞つた。

若し之に續いてカ君とコメディアの社長との決闘が行はれ、凡てにカ君が抑遷の態度を示さず、フランセエズ座が此問題の騒ぎの中にも猶ブリン・ロオズ」を演じて居る如き執拗を改めないなら、批評家對戲曲作者及び國立劇場役員の葛藤は益々渦巻が大きくなるであらう。マス君は決闘のあつた翌朝の新聞にも國立劇場に與ふる論文を公にして「新作の劇はスフィンクスである。永久の傑作であるか如何かを容易く決し難い物に一週三四回も國立劇場を使用する事は無法だ。又國立劇場は私利を營む性質の芝居で無い。役員及び俳優が純正な戲曲に對する尊敬を忘れる場合に其れと抗論する爲に政府は劇場監督を置いて居る筈だ」と云つて正面から攻撃の鋒を劇場の監督



巴里より  
督に向けて居る。(二月十八日)

一〇八

## 謝肉祭

待ち焦れて居た二月二十日の謝肉祭、その前後五日に亙つて面白かつた巴里の無禮講の節會も濟んで仕舞つた。可なり謹嚴な東洋の家庭に育つて青白い生真面目と寂しい洗面との外に桃色の「笑」のある世界を知らなかつた僕が、毎夜グラン・ブルヴァルの大通の人浪に交つて若い巴里の女から「愛らしい日本人」斯んな掛聲とコンフェツチの花の雪とを斷えず浴びせられて、初の程こそ専ら受身で居たが、段段攻勢に轉ぜざるを得ない氣分に成つて大きなコンフェツチの赤い袋を小腕に抱へ乍ら相應に巴里の美人へ敬意を表して歩いたのは、若返つたと云ふより生れ變つたと云はうか、滿三十九

年間(一寸歐羅巴風に數へて)全く經驗しなかつた無邪氣な遊びであつた。女装をした男や男装の女の多いのは勿論、頗る振つた假裝行列や道化が澤山に出た。男女の大學生が東洋諸國の風俗に扮して歩いて居るのも見受けた。其中に日本の陣羽織を着て日本刀を吊した若い女大學生と話して歩いて頻に笑つて居たのは和田垣博士であつた。全身をアラビヤ人風に塗つて大きな作り鼻の中へ電燈を點けた二人の男が相抱いて舞踏し乍ら巧みに人込の中を縫つて早足に行き過ぐるのは喝采を博して居た。天下晴れての無禮講だけに見知らぬ女を抱きかかへて厭がるのも構はず頬摺をして歩く男も多い。若い男かと思つるとシルクハットを被つた生真面目な顔附の白髪の紳士も混つて居る。又孫の一人も有らうと思はれる老夫人が濟ました顔をし乍ら若い男と見ればコンフェツチを振撒いて行く。僕にも或婆さんが振撒いたから追掛けて行つて襟元へどつさり入れて遣ると「メルシイ」と禮を言はれた。巴里人の事だから無論多少の酒を飲んで居るに關らず日本の花見に見受ける様な亂醉者は全く無い。従つて執拗く悪巫戯をする者が無く、警察事故も生じない。巡查や憲兵までがコンフェツチの攻撃に遇つて



莞爾して居る。僕は梅原、九里の二人と伴立つて歩いたが、行きがちがひざまに僕の頬つべたへ類する野蠻なコンフェツチの投げ方をする者があるから、振返つて應戦しようと思ふと其れは満谷、徳永、柚木などの日本人であつた。毎夜珈琲店に夜更かしをして歸つて寝巻に着替へようとする度、襦衣の下から迄コンフェツチがほろほろと翻れて部屋中に五色の花を降らせた。併し巴里で第一に盛な祭は三月のミカレムだと云ふ。其頃は女の服装が一變するから色彩の點からも華やかな節會であらう。(二月二)

## 芝居の後

ユウゴオの百十回の誕生日(二月廿六日)の晩、文豪の遺作「樂める王」がコメデイ。フランセエズで演ぜられ、ムネ・シユライのサン・ヴリエ、女優ゼニアのブランシユ、

シルヴンの茶坊主ツリブレ、フヌウのフランソア一世と云ふ、佛蘭西現代の劇壇で全く申分の無い役割であつた。今夜の観客には學者、藝術家、政治家が多數を占め、中には其若盛の日からユウゴオの讚美者であつたらしい白髪の貴婦人連も交つて居た。幕間にサロンや廊を逍遙する群衆の中に平生と異つて時代遅れの服装や帽が際立つて多く目に着くのは、然う云ふ點に案外無頓着な學者藝術家の氣質を自然に現して居た。最後に文豪に對する莊嚴な禮讚式が行はれた。ユウゴオの誕生日に國立劇場で之を行ふのは千九百二年以來の事ださうだが、今年のクロスマンには舞臺の中央に据ゑたユウゴオの彫像の向つて右に女優エベエル、パウル・ムネ、シルヴン、女優ドユツサン、女優ゼニア、左には女優ララ、フワルコニエ、フヌウ、ムネ・シユライと云ふ順で並び、背後には今夜の芝居の五幕を通じて登場した俳優の凡てが控へて居た。式長はムネ・シユライである。エベエル、ララの二女優が文豪を讚歎する二篇の詩を交代に歌つて満場總立の拍手の中に式が終つた。

廊へ出て預けた外套を受取つて居ると、同じく見物に来て居たドリヴル君が梅原の



肩を叩いて「一寸ムネ・シュリイに會つて行かないか」と云ふ。ドリヴル君はホルト・サン・マルタン座に居る知名な壯年俳優で、ムネ・シュリイの弟子分丈に悲劇を得意とし、近日此國立劇場へ選ばれて入ると云ふ評判のある男だ。梅原と僕とはドリヴル君の後に從いて樂屋へ入つて行つた。

悲劇役者としてタルマ以後の天才と稱せられる老優の樂屋が案外狭くして質素なのに先づ驚いた。纔に六疊と二疊とに過ぎない部屋は三面の鏡、二脚の椅子、芝居の衣裳、鬘、小道具、其から青枯れた澤山の花環とて埋まつて居る。ムネ・シュリイはドリヴルの細君と若い女弟子のジャンヌ・ルミイとに世話せられて着替をして居る所であつた。ドリヴルが紹介すると、老優は上着を着終るのも待たず白襦袢の上へ袴を穿いた儘、ロダンの彫像が動き出した様な悠然した老軀を進めて、嵐の海の様に見える二つの僻み目で見下しながら、赤い大理石のやうな頬と白い願帯との間に温かい高雅な微笑を湛へて僕等と握手をした。老優の大きな手は僕の手よりも熱かつた。







芝居の後



老優 ムネシ・ユイ 氏

ドリツルは梅原が優  
の熱心な崇拜者である  
ことを告げて、優の扮  
する「エジプ王」の如き  
は三十回以上も見物し  
て居ると語つた。ムネ。  
シユイは傍に立て掛  
けてあるエジプ王の持  
つ黄金の杖やエルナニ  
の剣などを手づから取  
つて僕等に見せ、日本  
でユツゴオ物を演じる  
かと問うた。梅原が近



頃エジプ王を譯したが其れに優の型を書加へて日本へ紹介する積だと言ふと、ムネ・シユリイは喜んで「型の解らない所があつたら自分に聽いて呉れ」と言つた。又名優タルマの持物であつた外套用の大きな釦を見せて「之は自分に氣持がよいからエジプ王に扮する場合に何時も用ひて居る」と語り、其れから「今日一つタルマの遺物を買つたが」と云つてムネ・シユリイ自身も、ドリヴル夫婦も、女優も、今一人樂屋に来て居た若い女畫家も一緒に成つて少時探して居たが、其れは置所を忘れて見附からなかつた。

ムネ・シユリイは「何か淡泊した夜食を一緒に取らう」と言出した。出口の階段を降る時以前は此處にタルマの彫像を据ゑてあつたが、ムネ・シユリイが昔國立劇場へ入る事になつて初めて宣誓式の爲に此處へ遣つて来た時何うした機會かタルマの像が動いた。其れが感激に満ちたムネ・シユリイの若若しい心にはナボレオン一世時代の名優が自分に挨拶をした様に思はれた。之を聞傳へた世人はタルマ自身に匹敵する悲劇役者が國立劇場へ加はつたのを故人の靈が喜んだのであらうと評判した。此有名な話

をドリヴルが僕等に語ると、ムネ・シユリイは微笑んで「然うだ、全くタルマがボン、ジユウルと言つて頷いた様に感ぜられた」と云つた。

芝居前のキャツフェ・ドラ・レジャンヌは俳優と芝居歸の客として一ぱいであつた。ムネ・シユリイは其左に梅原を右に僕を坐らせた。前には三人の女、僕の隣にはドリヴルが坐つた。女優のルミ嬢が隣の部屋に見える大理石の卓に赤い紐を巻いたのを僕等に示して「あれがタルマの用ひた食卓です」と云ふと、ドリヴルが「今にムネ・シユリイの此食卓もあの様に飾られるのだ」と云ふ。此家はナボレオンが最も好んで食事をしに来た家だと云ふ様な話も出た。其處へシルヴンが細君と入つて来た。又女優のゼニアが良人の伯爵に手を執られて入つて来た。皆ムネ・シユリイに挨拶をして通つて行く。ドリヴルがシルヴンに聲を掛けて「あなたの今夜の出来は結構でした」と言ふと、シルヴンは「馬鹿を云つてはいかん。そんな御世辭を言つて呉れるな、舞臺で稽古をする暇が無かつたので自分の宅でほんの型丈の稽古をした。其れて全く今晩は物に成つて居なかつた」と云つた。



ムネ・シユリイの選んだ夕食の種類が一寸變つて居た。「アッセ・アングレエズ」、「サ  
ラド・ルツス」其れからサンドキツチを油で揚げた様な物で名が解らないから假に梅原  
が名を附けた「サンドキツチ・ムネ・シユリイ」に「タルト」と云ふ菓子。酒は麥酒の外  
に「シャルト・リユウズ」、「コアント・ロオ」、「チユリツブ・セリ」の三種。ムネ・シユリイ  
は孫にても對する様に皆の杯へ「一樂し相に手づから酒を注いだ。」  
話しが晝に移つてムネ・シユリイは梅原に「自分の肖像を描いては何うだ」と云つ  
た。ドリブルが「先年瑞西のベルンの旅先で偶然マネの繪の掘出物をして幾四ツラ  
ンで買つて來たが、或手筋の人に望まれて三萬四千フランで手放した」と云ふ様な事  
を話す。ムネ・シユリイは「自分にもそんなのを見附けて呉れ」と云つて笑つた。ドリ  
ブルは又「佛蘭西の南部の例へばツウルウズ邊へ行くと現代の老大家の繪を掘出す事  
が多い。ルノワアルの繪を八千フランで買つた事もある。ロオランなどの作も多い」  
などと話した。

話が服装の上に移つた。ムネ・シユリイは「女は未だ好いが、歐羅巴の男の今日の  
服装は實にきたない。日本の男でも歐洲の服を真似て着るのは賛成が出來ない」と言  
つた。其時あちらの隅の方に居た紳士で象皮病か何かで頰と喉とが瘤で繋がつた男  
が僕等の横を通つて歸つて行つた。女達は目を下に伏せて戦々身振をした。今の  
病人の見苦しいのを御覽に成りましたか」とドンリブルの細君が問ふと、ムネ・シユ  
リイは「いや御蔭で見なかつた。自分はそんな穢ない物は大嫌ひだ。」

ムネ・シユリイは又ユウゴオに就ていろいろ話した。文豪の大食家であつた事など  
をも話した。或晩ユウゴオの宅へ芝居の關係者が招かれ、故人になつた名優モオヴン  
が主人の右に、ムネ・シユリイが左に坐つて居た。或劇場監督の事に就て議論のある  
晩でムネ・シユリイは黙つて聽いて居たが、食事の終ひ際にユウゴオが「君はデイレ  
クツウルと云ふ職を何と考へるか」と訊ねたので、自分は非常に厄介な職業だと思ふ  
と答へた。すると、ユウゴオは「君の厭味は尤もだ」と言ひ乍ら前の大きなトマトを取  
つて一口に頬張り二三度もごもごさせた儘噎下して仕舞つたのは今でも目に見える様  
だと云ふ。夜が更けたので次第に客は歸つて行つた。ムネ・シユリイを圍む僕等の一





巴里のルヴュル園のサーカス場

卓丈は益話(えきわ)が蕭(せう)やかに進(すす)んだ。ムネ・シユ  
 リイは幾度(いくた)も煙草(えんそう)を取(と)つて皆(みな)に勸(すす)めた。巴  
 里(パリ)に着(き)いて以(い)來(らい)煙草(えんそう)を吸(す)はな(な)く成(な)つた僕(わが)は  
 隣(とな)寸(すん)を擦(す)る役(やく)をしてムネ・シユリイや女達(おんなたち)  
 に點(つ)けて遣(や)つて居(ゐ)た。  
 ムネ・シユリイは「おお今夜(こんや)は好(こ)い記(き)念(ねん)  
 を持(も)つて來(き)て居(ゐ)た」と云(い)つて、有(あ)名(な)な皺(しわ)だ  
 らけのフロックコオトの内(うち)衣(い)囊(ふくろ)から一(いつ)通(つう)の  
 手紙(てがみ)を取(と)出した。ユウゴオが王(わう)黨(たう)の一(いつ)人(にん)と  
 して流(りゅう)瀆(とく)せられて居(ゐ)た英(えい)佛(ふつ)海(かい)峽(けつ)の島(しま)からム  
 ネ・シユリイに寄(よ)せた物(もの)である。其(その)れをド  
 リブルが朗(ろう)讀(どく)した。文(ぶん)豪(ごう)の作(さく)「マリオン・  
 ド・ロルム」を巴(ぱ)里(り)で舞(まひ)臺(たい)に上(あ)すに就(つ)て作(さ)者(しや)

の注文(ちゆうもん)を述(の)べ、又(また)口(くち)を極(ごく)めてムネ・シユリイの技(ぎ)倆(りやう)を賞(しょう)讃(さん)し、配(はい)所(じょ)に在(あ)る身(み)は巴(ぱ)里(り)に  
 歸(かへ)つて親(おや)しく其(その)劇(げき)を觀(み)る事(こと)の來(き)ないの(を)を悲(かな)しむと言(い)つてある。其(その)日(ひ)附(つ)は千(せん)八(はち)百(ひゃく)七(しち)  
 三(さん)年(ねん)一(いつ)月(げつ)十(じゅう)日(にち)で、ムネ・シユリイの三(さん)十(じゅう)三(さん)歳(さい)の春(はる)に受(う)取(と)つた手紙(てがみ)であつた。

ユウゴオの「リユイ・ブラス」をムネシユリイが演(えん)じる相(さう)談(だん)の時(とき)に文(ぶん)豪(ごう)は自(じ)分(ぶん)の前(まへ)で  
 朗(ろう)讀(どく)して見(み)て呉(くれ)れと云(い)つた。ムネ・シユリイの朗(ろう)讀(どく)を最(さい)初(しよ)の中(ちゆう)は全(ぜん)く沈(しん)黙(もく)して聽(き)いて  
 居(ゐ)たが、三(さん)幕(まく)目(め)の中(ちゆう)程(ほど)、皇(こう)后(ごう)ドナが「なぜ君(きみ)は神(かみ)様(さま)の樣(よう)にそん(そ)んなに偉(ゐ)大(だい)に、そん(そ)んなに怖(おそ)ろ  
 りしく見(み)えるのでせう」と云(い)ふと、リユイ・ブラスが「其(その)れは自(じ)分(ぶん)が君(きみ)を戀(こひ)慕(ぼ)ふから  
 だ。それ(それ)は自(じ)分(ぶん)が凡(たゞ)ての嫉(しよ)妬(た)を感じ(かん)じてるからだ」云(い)ふと云(い)ふ好(こ)い長(なが)臺(たい)詞(じ)の段(だん)に成(な)つて、  
 ヌオゴオは初(はつ)め「其(その)れは自(じ)分(ぶん)が君(きみ)を戀(こひ)慕(ぼ)ふからだ」を「もつと高(たか)く言(い)へ」と言(い)ふ。三(さん)四(し)回(かい)  
 讀(よ)み直(ただ)した(が)未(ま)だ氣(き)に入(い)らな(な)い「もつと高(たか)く」と云(い)ふ。ムネ・シユリイは「然(さ)ら  
 う初(はつ)めの出(で)ばかりを彌(や)蓋(がい)しく言(い)はな(な)い、姑(なま)く待(まち)つて、次(つぎ)の句(く)を皆(みな)言(い)はせて下(くだ)さい。  
 然(さ)らうした(ら)何(なに)か貴(あなた)下(かた)が發(はつ)見(けん)な(な)さる(さ)るでせう」と云(い)つて讀(よ)み續(つづ)けた所(ところ)が、果(はた)してユオゴオが  
 感(かん)服(ふく)して呉(くれ)れた。以(い)前(ぜん)フ(フ)レ(レ)テ(テ)リ(リ)ツ(ツ)ク(ク)ル(ル)メ(メ)ト(ト)ル(ル)が演(えん)じた時(とき)其(その)處(ところ)の調(てう)子(し)が冷(ひや)や(や)かに低(ひ)



くて作者の熱烈な氣持ちが出なかつたのをユウゴオは記憶して居て、其段を自分に巧く遣らせようと思つて其様に氣にしたらしいとムネ・シユリイは話した。「併しルメルは立派な俳優であつた」と云ひ、其死んだ時に、今のアカデミシヤンである詩人ジャン・リシユバンが未だ其頃は人の目に立つ若若しい美男で、自作の挽詩を棺前で讀んだが、會葬者の中に居たユウゴオが其詩を褒めたので、自分は其場でリシユバンを文豪に紹介したなども語つた。

廣いキヤッフエの中に僕等の組しか話して居ない事に氣が付いて歸り支度をした時は翌日の午前四時前であつた。戸口を出掛に「うっかり話が面白かつたので遅くなつて濟まない」と謙遜なムネ・シユリイは送つて出た主人に挨拶した。主人は外套を着せ掛け乍ら「貴下には何んな事があつても苦情は申しません」と言つて居た。老優はルミイ嬢と自動車に乗つた。あとの僕等と女畫家とはドリブル夫婦の自動車に相乗してモンマルトルへ歸つた。文豪の誕生日の一夜を想ひ掛けなく斯様に面白く過ごしたのは榮譽である。而うして此日は僕の誕生日でもあつた。(二月二十八日)

## 巴里のいろいろ

### (一)

昨日巴里の郊外で十九歳の女流飛行家シユザンヌ・ベルナル嬢が飛行機から落ちて死んだ。飛行機熱の最も盛な此國では平均して毎月二人の飛行家が横死を遂げる比例になつて居るが、女飛行家の死んだのは去年六月のドニイ夫人を始めとして之が二度目である。嬢は飛行機に對する非常な熱心家で専ら其方の研究の爲にトロイと言ふ田舎から上つて来て、丁度ドニイ夫人の亡くなつた月から飛行機に乗り初めたのであつた。岩石の上に落ちたので顔や額が滅茶滅茶に裂けた。序に女の飛行家は未だ巴里に十人程しか無い、但し飛行機に同乗して遊ぶ女は無數である。



此間某新聞が男の髭に對する女の感想を知名な女優から聞いて發表したが、大抵無用な物だと云ふ意見に一致して居た。其理由は接吻に不便だと云ふのが主で、裝飾としても野蠻時代の遺風であり、又寧ろ之があるが爲に男を醜くして居ると云ふのである。中には保存して置いても可いが、もう少し香料でも餘計に附けて手入れを好くして欲しい。一般に佛蘭西の男の髭は悪い臭がすると云ふ答もあつた。

春になつたので女の裝飾が大分變り出した。縁の狭い頭巾帽が止つて縁の廣い圓帽に移つて行く。日本の兜を模した帽の形も最う流行遅れとなつて、横に高價な極樂鳥の羽を附けた物や、鳩の羽を色色に染めたのを附けた物などが盛に行はれる。併し是等は従來から有つた型で今年の流行行と云ふ物は未だ出ない様だ。併し明日にも屹度帽子屋が新形を拵へて知名な女優に贈り夫を被つた姿を寫眞に撮せて貰つて一般に流行らせる事であらう。

マタン紙上で今年の流行服の豫想を各女優から聞いて公にして居る。日本の「キモノ」から影響せられて細くなつた裳の形は未だ當分廣くなるまい。其れて裳に

は改良の餘地が一寸見付からないが、盛裝の裾に幾段も襷を附けたり、又其裾に異つた切目を附けたりするので一生面を開くであらう。而して白又は金茶が流行の色となるのであらう。これが多數の豫想である。何れ四月の各雜誌に流行服の寫眞が幾種も公にせられ、其れを見て米國の贅澤女が電報で註文し、假縫を身に合せ旁巴里見物に續續遣つて來ると云ふ段取である。

僕は折折スルボン大學を覗きに行くが、東京の帝國大學の講師をして居た事のある、而して神道に關する書物を去年巴里で著したルボンと云ふ博士が日本の神話と文學史とを講じて居る。平凡な講座だから男の聴衆は全く無いが、五六人の女大學生が何時でも熱心に筆記をして居るのを見受ける。

此間一年に幾度か催す日本人の會合のパンテオン會が和田三造の幹事で行はれた。僕はコメデイ・フランセエズ座へユウゴオの「エルナニ」を觀に行つたので缺席したが、和田垣博士初め三十幾人の出席者があつて色色の隠し藝が出たと云ふ事だ。現に巴里に在留する日本人は百名近くあつて、其内大使館で何か催す場合に招待を受ける資格



のある者が六十人位ある。其外の四十人には日英博覽會に遣つて來て歸りはぐれた藝妓や相撲なども混じつて居ると云ふ事だが、其連中は何處に何をして居るのか頼と僕らの目には觸れない。此二月まで巴里から汽車で五時間かかるツウルに居た和田垣博士の話に、ツウルへ日本の藝妓が來て居ると或人が云ふので、瀋陽江上の女では無いが異國へ流れ渡つて居る女に逢ふのも奇遇だと考へて、一寸朝の時間に會ひたいと云はせると、女は待つて居るから來て呉れよと云ふ返事だ。物好きに出掛けて見ると其れは比律賓の女であつた相だ。日本人だと云はないと景氣がよくないので日本人で通して居るのであらう。現にモンマルトルの或寄席に出



て居る支那人の曲藝師の一座なども日本人だと稱して居る。

僕は此前の日曜に倫敦から來た二人の友人と一緒に、一時間往復の出来るエルサイエヘ見物に行つた。瀟洒とした佛蘭西ルネッサンス式の、大理石づくめの宮殿の立派さと、自然林の中に池と噴水を満ちた庭園の大規模とに、ルイ十四世時代の榮華を驚歎せず居られ無かつた。宮殿は博物館になつて居て各時代の戰爭畫を多く藏めて居る。但し畫としては殆んど價値のない物だ。最上層の明るい一室では美しい女王達の肖像畫に並んでパウトレエル、シャトゥブリアンなどの文人の肖像畫もあつた。池の邊を逍遙して古い石像の缺けたなどを木立の中に仰ぎ、又林の中に分入つて淡紅の大理石を疊んだ佛蘭西建築の最も醇化されたトリアノンの柱廊に倚り掛り、皇后ジョセフィンに別れた奈破翁一世や、前の夫人に死別したモリエールが常に此處へ來て樂まぬ心を慰めたと云ふ話をし乍ら、少時柔かい春の初めの入日に照されて居た。(三月十一日)

(一)

マロニエの木立が一齊に嫩かい若葉を着けたので、巴里の空の瑠璃色の澄渡つたの



に對し全市の空氣が明るい緑に一變した。之が歐洲の春なのであらうが僕等には冬から直ぐに初夏が來た氣がする。どの公園へ行つても木蔭にチヌウリップが咲いて居る。立木の花は甚だ尠い、純白の八重櫻に連翹と梨位のものである。東洋の様な鶯は啼かないが、メルルといふ鳩の形をした鶯の一種が好い節廻して啼く。一日へエエル・ラセエズの大墓地へ入つて行つたら、文豪ミニツセの墓に一株の柳が青んで文豪の彫像を掩うた其枝にメルルが啼いて居た。立寄つて碑面を讀むと「わが死なば墓には植ゑよ、ひと本のしだれ柳を。わが爲にその這ふ影の、輕やかに優しからまし」といふ文豪の遺作が刻してあつた。モリエールとラ・フォンテエヌの墓が並んで居る。聞けば最初に此墓へ葬られたのがモリエールであつたと云ふ。畫家のコロオヤフルギエエルの墓なども目に附いた。

好い天氣が続くので下宿の窓から眺めて居ると、彼方此方の家で大掃除が始り色色の洗濯物が干される。寢臺の藁蒲團までが日に當てられる。一體に巴里の女の掃除好きなきな事は京都の女と似て居る。或日僕が夜に入つて歸つて見ると僕の亂雜にして置い



巴里のいろいろ

(作エイテウヴ・オロモ)壁るかに墓のズエセラ・ルエヘ里巴

た部屋が見違へる程整理せられて居た。留守中に主婦のブランシュが女中を指揮して大掃除をして呉れたのであつた。僕は日本に居て自分で手を下す外誰にも書齋の物の位置を替へさせ無かつた程の疝性なのに、此主婦の大掃除の仕方は全然僕の氣に入つて仕舞つた。僕自ら整理に取掛つても是以上には出来ないと思はれた。併し困る事には不潔と云ふ事の感じが十分に日本人と異つた點がある。佛蘭西人の多數が便所へ行つて手を洗はないのは何よりも驚かれる。尤も手洗所の設備が次第に普及して行くやうだから衛生的に新しい習慣が生じつつあ



ることは十分に想像せられる。其れから主婦や女中が洗濯するのを見ると食器を洗ふ流しの石で汚れ物を揉んで居る。其れから大きな瓦斯竈の上へ網を渡して其洗濯物が干される。下では色の黄物の鍋が口を開いて湯氣を立てて居る。上の網から女の裋衣や猿股の雪が滴らないとは誰が保證しやう。

僕の隣の部屋へ一月前から移つて来たビエルと云ふ青年は地方官の息子だが、女の爲に巴里の大學を中途で止して親父の仕送で遊んで居る男だ。直ぐ近所にある有名なモニコと云ふ酒場の若い踊子を落着せて細君にして居る。僕は近頃此若夫婦と一緒に食卓に就くが、文學好きなビエルはいろんな文學者の逸話などを聞かせて呉れる。又春に成つたので瑞西のジュネエブ湖畔に隠居して居る下宿の主婦の老母が娘の家へ遊びに来て滞在して居る。亡くなつた良人が辭書などを著した學者であつた丈に婆さんも中文学好で、僕の爲にいろんな古い田舎の俗語などを聞かせて呉る。此婆さんが滞在中寝て居る部屋を見せて貰つたが、下宿の一番頂邊にある謂ゆる屋根裏で、二疊敷程の所に寢臺も据ゑてあれば洗面の道具も揃つて居る。矮い天井に只一つ小さな硝子窓

があつて寝ながら手を延せば開閉が出来る。晝は其窓から日光が直射し、雨の晩などは直ぐ顔の上へ音を立てて降り掛る様で眠られない相である。主婦に聞くと一箇月の部屋代が僅か一フランだと云ふ。四十錢で兎に角巴里に一箇月寝泊りが出来る部屋があるかと想へば僕等の貧乏な旅客には難有い氣がした。

此婆さんを下宿の主人夫婦が大切にすることは日本の美しいと云はれる家庭でも餘り見受けない程である。三度の食事が婆さんが来た爲に一度増して午後五時頃に簡単な淡泊した食事が婆さんに出る。其れに招伴をする者は主婦と、特別に下宿人の中から僕一人が選ばれる。主婦は毎日早起をして天氣さへ好ければ婆さんを馬車や自動車に乗せて散歩に伴れて行く。芝居へも一度度一緒に行く。エルサイユなどの郊外の遊覽地へ巴里から寫眞師を伴れて行つて婆さんと二人で好きな場所で寫眞を撮らせて來たりなんかする。平生から快調な主婦が母親が來たので一層はしやいて居る。婆さんの前では小娘の様に嬉し相な顔附をして物言も甘えたやうな調子である。そして一日に幾度となく額や手に接吻を交換して居る。歐洲に孝道が無いなどと云つた日本の學者を



笑はずに居られない。(四月十二日)

(三)

四月に入つて俄に雪が降つた程寒い變調な朝があつた。僕は其から喉を腫して發熱して居たのを押してアンデバンダンの繪の展覽會を觀に行つたりなんかした。春の人は出を見にプロオニユの森へ自動車を驅りもした。幾つかの大きな雜貨店へ入つて女が春着の買物をする雜沓をも觀た。其れでとうとう四日目の晩から寢込んで仕舞つた。熱が高い。女中のマリイに町醫者を喚ばせたが、餘り信用の置けない醫者で、喉を焼く代りに腎部へ皮下注射をして歸つて行つた。其醫者の處方で幾種かの薬を買はせて飲んで居たが熱は降らない。醫學士大久保榮君が一昨年此處の病院で腸室扶斯で亡くなつたことや、此處で亡くなつた日本人の遺骨が數日前ベル・ラセエズの墓の棚の上に置かれてあつたのを見たことやを聯想して、一人卑怯な顔附をして居ると、梅原君が尋ねて來て驚いて色色と世話をして呉れる。早速醫者を取換へようと云ふので同君

の親しくして居るル・ゴフさんを迎へに行つて呉れた。日本大使館へも十五年來出入し、日本赤十字社の特別社員にも推薦されて居る醫者である。ル・ゴフさんは度度來て



墓のセツユミ・ドツレフ・ルア豪文

呉れた。ツウジガアリ  
 マスカシなど少しの  
 日本語が出来る。此人  
 は梅毒とリウマチスと  
 の治療が得意なので其  
 家へは男女の梅毒患者  
 が多く行くと聞いて、  
 神經の昂つて居る僕は  
 喉を焼いて貰ふ度に其

器械が無氣味でならなかつた。其れから日本で喉を焼けば直ぐ含嗽をするのだが、此  
 醫者はぐつと嚥下して仕舞へ、然うすると薬が喉の奥へ善く浸込むからと云ふ。随分



悪辣な治療法である。

ル・ゴフさんの處方て病氣が癒つたので再びアンデパンダンの繪を觀に行つた。セエヌ河の下流の左岸の空地に細長い粗末な假屋を建てて千七百點からの出品が陳べてある。會の名の示す如く飽く迄放縱な展覽會で、三十フランさへ添へて出せば何人でも三點の出品が出来、三點を超過する毎に三十フランを増して出品すれば幾點でも採用される。選擇も無ければ審査も授賞も無い。黒人も素人も玉石混淆である。繪が主であるけれど、彫塑や其他の工藝美術品も對等の取扱を受けて毫も會自身に價値を定めようとする所が無く、全く觀衆の批評に一任して居る。繪の取材に概して東洋（日本をも含む）諸國や南洋の風俗自然が多いのは此會ばかりで無く、立體派、後期印象派、未來派は勿論、一般に此國の繪に共通した近頃の一特色であらう。アンデパンダンと云へば怪物の様な奇體な繪が多い様に想はれるが、實際は純正な繪が多く、純正なおとなしい繪が土臺に成つて奇抜な新畫を作らうとして居る。拙い畫家も上手な畫家も皆自分の心の赴く儘に筆を動かして眞面目に自分の世界を作り上げることが楽しんで

居る。自分達の生じた生活を發揮する事が如何にも著しく樂し相である。恐らく彼等の間に所謂天才は少いてあらう。併し彼等は僕等と同じ呼吸をして居る生々しい現代人である。其自由を通り越して惡平等に流れた陳列法も甚だ痛快で、何と云ふことも無く僕等を昂奮させて呉れる。其れから二度目に來て觀たら賣約濟の札が澤山下つて居た。其れが必ずしも場中で何人にも氣に入る佳作と云ふても無い。巴里人が繪を鑑賞するにも一概に他人の意見に雷同することなく獨自の鑑識を信ずる事の厚いのに感服した。

日本でも何とか云ふ男が文部省の去年の展覽會の繪に墨を塗つたが、巴里でも此間或二三の畫家の催して居る小展覽會へ夜間に忍入つて或婦人の肖像を抹殺した者があつた。之は審査員に對する遺恨と云ふ様な事で無く、其畫がよくよく氣に入らなかつた爲だと云ふ。惡戯の主は未だ捕らない。(四月十四日)



### 「日本の譽」

オデオン座で新しく演じて居るバウル・アンテルムの新作劇「日本の譽」はその藝術的價値は兎も角、目先が異つて居るので大入を續けて居る。筋は忠臣蔵を大分穿き違へて、否わざわざ曲解して仕組んだものだ。鹽谷判官が「大阪侯」高師直が「仙臺侯」由良之助が「彌五郎」と作替へられ、仙臺侯が大阪侯に託して「頼信」と云ふ一流の畫家に帝へ獻上する扇の繪を描かせると、大阪侯の家來の吉良(九太夫)が其畫家への禮金を着服して偽筆の扇を主君に差出す。大阪侯は其扇を宮廷で仙臺侯に渡す。其場へ頼信が來合せて之は自分の筆で無いと云ふ。兩侯が争ふ。大阪侯が激して仙臺侯に斬り附けると云ふのが序幕で、次には大阪侯の切腹、其れから仇打の相談が済むと力彌に當

る彌五郎の息子が敵の仙臺侯に仕へて居て仇打を父に思ひ止まれと忠告したり、彌五郎の娘と戀をして居る大阪侯方の或武士が仇打に加らうか結婚しようかと煩悶したり、又彌五郎の茶屋遊びの場などがあつて、最後に仙臺侯の邸に打入り武人の面目を保たせて侯に切腹をさせる。其處へ帝が白い高張提灯を二つ點けた衛士を前驅にして行幸になり、四十七士の國法を犯した罪を赦し各の忠義を御褒めに成ると云ふ筋である。(四月十五日)

### 「モリエールの家庭」

國立劇場コメデイ・フランセエズの舞臺へ近頃初めて上され現に一週三度も演じて居る韻文劇「モリエールの家庭」は文藝院學士マウリス・ドンネ氏が文豪の傳記から

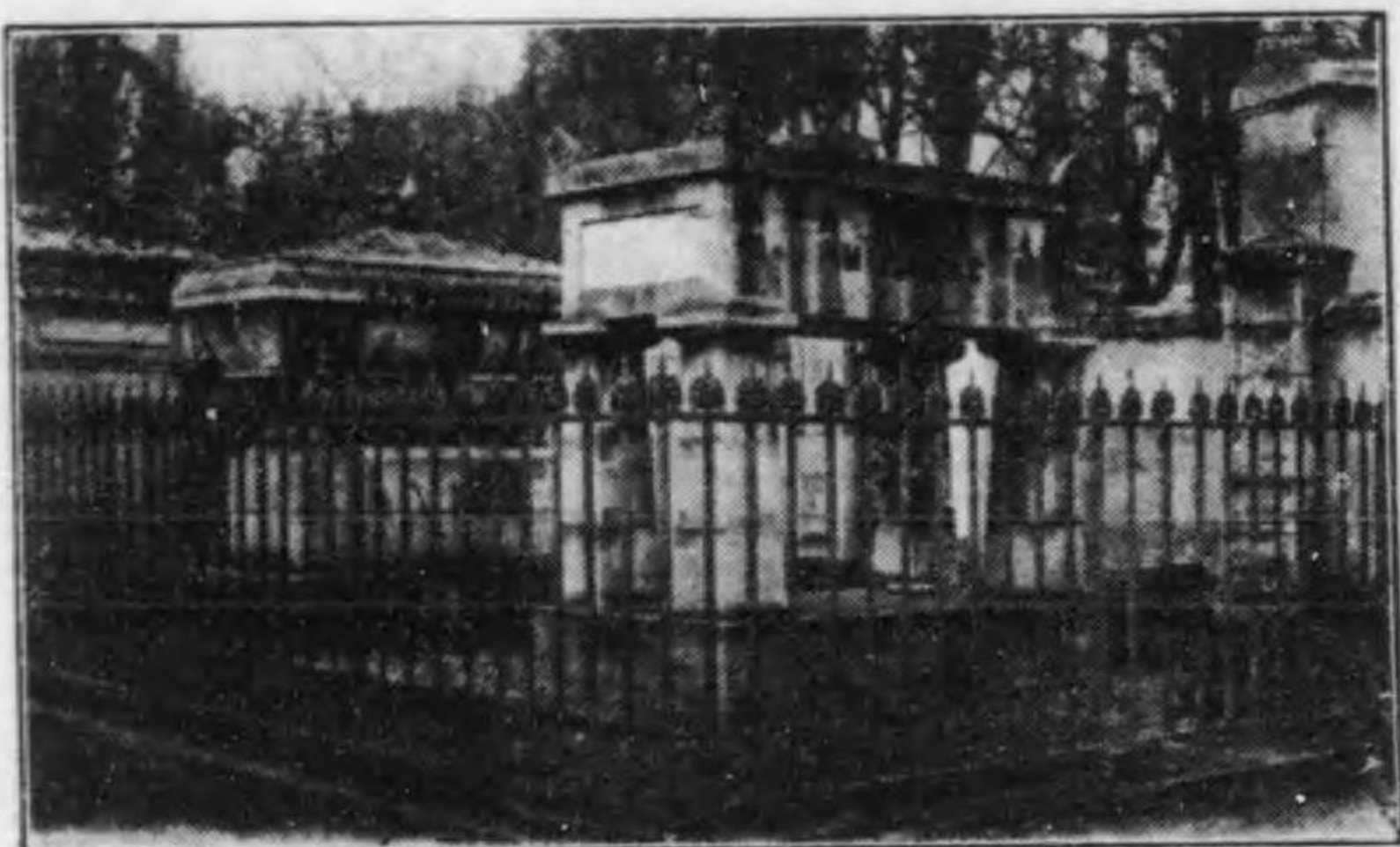
モリエールの家庭



脚色した五幕六場の新作で、モリエールと第二の夫人アルマンとの戀を具體化し、アルマンの亂行に對する文豪の煩悶を主として描かうとした爲、却て偉大なモリエールの他の雑多な性格、例へば其冷靜な哲學者的な方面、其剛愎執拗な方面等を没了し、必ずしもモリエールと限らず何の藝術家を假り來つて主人公としても差支の無い様な憾みはあるが、第一の夫人マドレエヌの聰明貞淑な性格が善く活躍して居ると、部分部分に作者の才氣の見えるデリカアな所が多いのと、舞臺面が一寸異つて居ると、昨冬來俗衆の間に評判のよいブリム・ロオズの様な單調な感を與へず、相應に藝術上の効果を備へて居る。諸新聞の批評も概して悪くない。甘い物には違ないが、之なら日本に移しても「不如歸」で廉價な涙を流させるより功德の多い事だと思ふから一寸簡單に僕の觀た所を紹介しよう。

初の幕は文豪の書齋である。モリエールは机に向つて脚本「良人學校」に筆を着けて居る。其處へ小娘のアルマンが入つて來る。四十歳を越した文豪の心は豫て愛くるしい此小娘に動かされて居て二人の間にデリカアな話が交換される。其處へ第一の夫人で

ある女優マドレエヌが現れてアルマンを叱り飛ばして其部屋へ追遣る。マドレエヌは良



モリエールと文豪の墓

人の原稿を読み乍ら「貴方の心は近頃大變に若やいで來た。其は解つて居る。年寄つた自分に飽が來て、あのアルマンに移つて行くのでせう。あんな年の違つた女と結婚するのは決して貴方の幸ひでない。屹度貴方を苦める日がある。其れから、あのアルマンを今日まで自分の妹だと言つて居たが、實は自分の件子です。義理の間にせよ父子で結婚は許されないのでせう」と云ふと、モリエールは苦悶し乍ら「是非結婚する事を許して呉れ」と云ふ。次の幕はエルサイエヌの宮廷の大節會で假裝した幾多の諸侯と貴婦人が華麗な園内の其處彼處に舞踏の團を作つて遊び狂つて居る。此眩しい様な豪華な光景の中へ盛裝したモリエールの第二の夫人アルマン



も加はつて居て、其ブリヤントな容姿が水際立つて衆目を惹き附ける。モリエールと結婚して既に十餘年を経た後なのである。美しい一人の青年の諸侯に口説かれて木蔭で接吻をする。其を偶然來掛つたモリエールが瞥見した。戀に落ちた若い男女は林の奥へ逃げた。

次の場は同じくエルサイエの宮庭内にある劇場の樂屋で、王室附俳優の部屋が左右に設けられ、右手にモリエール夫婦の部屋と先妻マドレエスの部屋とが並び、扉には各俳優の名が白墨で記されて居る。夜更である。宮庭の宴會から細君の手を執つて歸つて來たモリエールの顔は蒼醒めて居る。薄暗い樂屋の板間で突然アルマンの手に絶る男がある。アルマンが「此處に居るのはわたしの良人です」と云ふ一語に驚いて其男は逃げ去つた。又他の若い諸侯がアルマンに懸想して忍び寄つたのである。モリエールは年若な妻に對する誘惑の多い事を感じて人知れず煩悶する。細君に向つて其れとなく「自重せよ、良人の愛を反省せよ」と云ふ。歡樂を追ふ若い細君の心は良人の忠告も上の空に聞流し、はては「何事もわたしの自由だ」と云ふ。モリエールは堪まり

兼ねて「今日の園遊會での密會は何のさまたち」と云ふ。二人は言ひ争ふ。細君は怒つて先に部屋へ入つて仕舞ふ。隣の部屋から先の夫人のマドレエスが手燭を執つて現はれ一人残つたモリエールを慰める。

三幕目は又モリエールの家である。文豪は久しい間病氣に悩んで居る。細君のアルマンは病床を訪はうともせず常に外出がちで、一人下廻りの女優カトリスが親切に介抱して居る。モリエールは彼れや是やで氣を腐らし脚本「厭世家」に溢溢筆を着けて居る。醫者が來て牛乳を飲めと勧める。牛乳嫌ひのモリエールは飲まうとしない。先の細君のマドレエスが自分の部屋から出て來て「モリエールよ、貴方の天才を等閑にして下さるな。貴方の詩才は笑の神だ。世界は其れに樂まされる。貴方の天職を沮喪させでは成らない」と云ふ。之に勵まされて強ひて牛乳を口にす。マドレエスが退くと部下の女優の一人ブライが訪ねて來て病氣見舞を言ふ。ブライの御世辭が巧いのでモリエールは何時にない機嫌を善くして「お前を見るのは嬉しい。其處へお掛け。お互に芝居を打つて歩いて面白い夜もあつた。併し今の自分は非常に煩悶を持つて居る。



何事も大目に見て居なければ成らない」と云ふ。少時して、ブライイは今度の芝居の役不足を述べる。實は其れが爲に訪ねて来たのであつた。モリエールが毅然として其希望を容れないので初めの御世辭に似ず悪體を吐いて歸つて行く。モリエールは机上の稿本を攫んで足下に抛ち長太息して長椅子に倒れる。

四幕目は又前のエルサイユ宮廷の劇場の樂屋で、右手に舞臺を半据ゑ、扉の開閉に今演じて居るモリエールの作の「詐僞漢」の舞臺の人物が見える仕掛に成つて居る。幕が明くと登場時間を待つ俳優がモリエール夫人を取巻いて居る。いろんな諸侯が樂屋へ来て美しい夫人に媚を呈して行く。七十近い老文豪コルネユ迄が出て来る。舞臺から青年俳優のバロンが下りて来ると、入れ替りに他の俳優が登場し、樂屋は夫人とバロン二人きりに成る。豫てバロンに意を寄せて居る夫人はバロンを口説いて「お前は確かな接吻をわたしから受取つたか」などと云ふ。二人は相抱く。其時舞臺から下りて来たモリエールは愕然として是を眺めた。其處へ引續いて他の俳優が多勢舞臺から下りて来た。二人の男女は急いで他の室へ隠れて仕舞つた。幕間に成つたので老文



モリエールの家庭

(モリエールの家庭の舞臺面)

豪コルネユが再び樂屋へ入つて来たが、モリエールが何時になく不興な顔付をして冷淡な應答をするので、コルネユは自分がモリエール夫人に懸想して居る事に就てモリエールが煩問して居るのだと解釋してモリエールの前に懺悔をする。モリエールに取つては其れも亦悲痛の種である。而していや其爲ては無い」と云つたが、バロンと我妻との關係を言ふには忍び無かつた。

最後の幕もまたモリエールの家であるが、舞臺は先妻マドレエヌの病室に成つて居る。舞臺の上のマドレエヌは肺患で



死に瀕して居る。モリエールが見舞に來て話の序に細君の亂行に就て歎息する。モリエールが部屋へ退くと、女中代の女優カトリスとアルマンが生んだ十歳になるモリエールの娘マダウとが入つて來る。マドレヌスは「マダウさん、よい物を祖母さんが上げよう」と云つて人形を與へる。マダウは「父さんに見せる」と云つて出て行く。其處へアルマンが外から歸つて來て自分の部屋の方へ行き過ぎようとするのを、マドレヌスが呼止めて「あ、好い夕日が窓から射す。少し今日は気分も好いから話も出来る。お前そこへお掛け」と云ふ。アルマンが「何か御本でも讀みませうか」と云ふといや、書物はよませう。其れよりカトリスに命ひつけて、あの幾つかの箱からわたしの衣類を出して其處等へ陳べて御呉れ」と云ふ。寢臺、卓、椅子の上へ掛けて澤山の古い舞臺着が並べられ、其れを明るい夕日が照す。マドレヌスは「嬉しうに眺めて追懐に耽つてゐる。アルマンが「可笑しな母さんだこと。こんな物を眺めて、流行遅れの襪はかちぢやありませんか」と云ふと、マドレヌスは目に涙を浮べて「何を云ふ、アルマン。わたしは是等の衣裳を眺めると、わたしの若い時、またモリエールの若い時、其

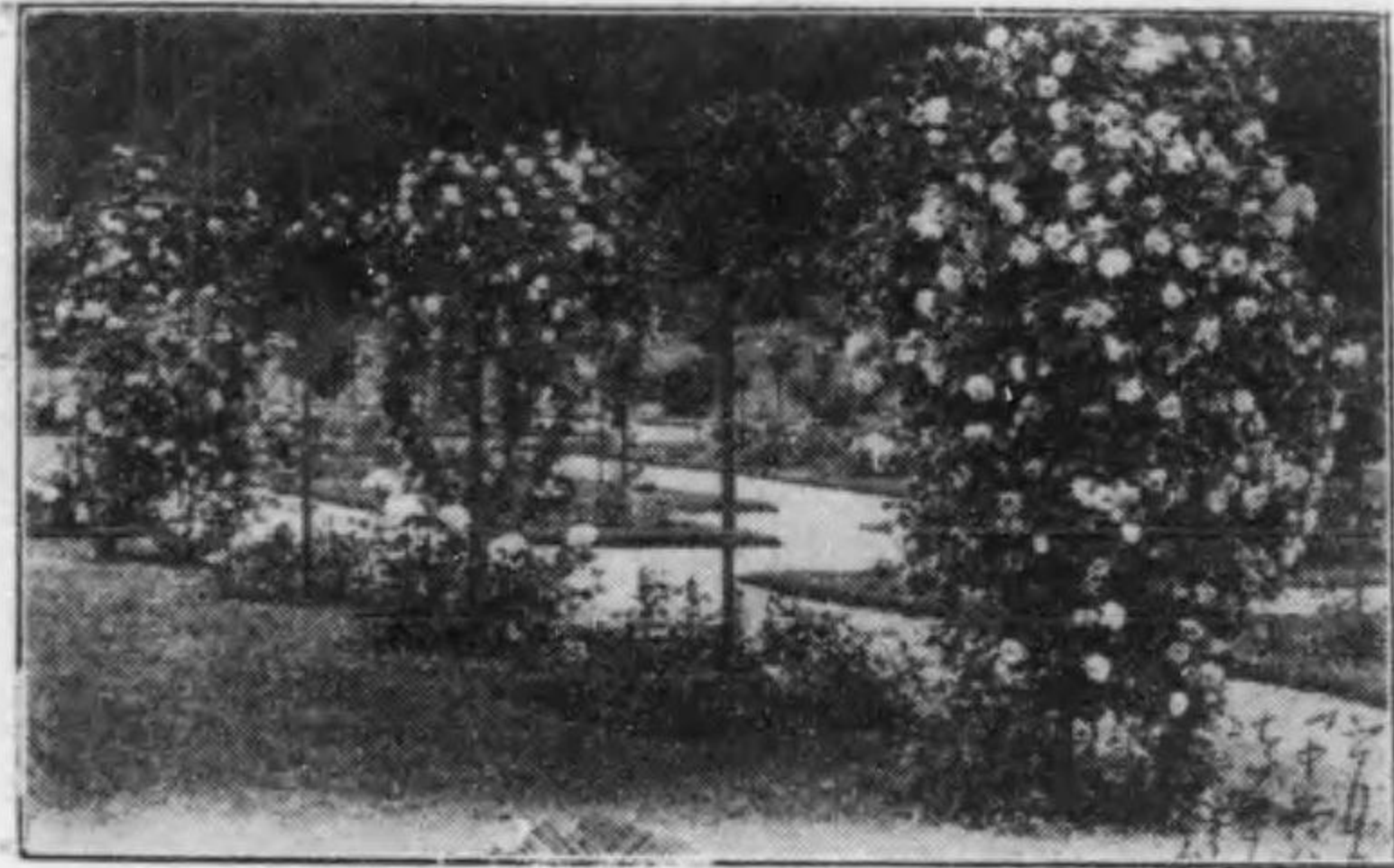


(一) 園 薇 薔 の ル テ が バ 里 巴

モリエールの傑作を幾百度と無くモリエールと一所に舞臺の上で演じた楽しい日が憶ひ出される。モリエールは一作毎に世界の人を喜ばせ、而うして世界の偉大なる詩人と成つた。アルマン、お前さんは何だ、其偉大なる天才の妻であると云ふ光榮を忘れはしまいね。お前さんはモリエールを領解して居るかい。お前さんの近頃の行爲は、あれでモリエール夫人として恥しくは無いかね」と聲みかけて詰る。茲にアルマンは驕然として夢から覺めた。此時モリエールが入つて來た。アルマンは良人の胸に泣き倒れて今日迄の不貞を懺悔した。モリエールは感激して左の手に妻を抱へ、右の手にマドエレスの手を執つて泣いた。娘のマダウが元氣よく「驅け來て、パパ、ママ、晩御飯が出来ました」と云ふので幕が下りる。此最後の幕



て泣かされる観客が多い。實際僕なども目の潤んだ一人である。或評家は胡麻鹽頭のア



(二) 園 薔 薔 の ル テ ガ バ

カデミシヤンが是丈涙つばい戯曲を書いた事は近頃の成功だと半冷笑的ではあるが讀めて居る。惜しいことにはジオルジュ・グランと云ふ俳優が世話物に掛けてこそ一流だが、今度始めて斯う云ふ時代物に手を着けたので、其モリエールは未成品だと云ふ外は無い。一體に伊井峯峰の様に軽く動く人でモリエールの様な大人物に扮するには不向である。マドレエヌに扮したベルテセルニイ夫人、アルマンに扮したルコント夫人、コルネエユに扮したパウ・ムネは申分の無い出来である。(四月十五日)

### 魔術街

巴里にも随分田舎らしい方面が少くない。リユナ・バクや魔術街が其れた。リユナ・バクはプロオニユの森の側にある見世物小屋だが、前を通る丈にまた入つて見ない。魔術街と云へば、セエヌの左岸のアルマの橋を渡つた街角にある大規模な見世物小屋だ。冬の間は休んで居たが四月から開場したのである。夜毎に盛んな電燈裝飾を施して客を呼ぶので、未だ川風が薄ら寒いに拘はらず物見だかい巴里の中流以下の市民が押掛けて何の遊技館も大繁昌である。中に一寸痛快に感じるのは、棚に澤山の皿や鉢を立て並べて其れを客に重い毯を投げさせて思ふ存分壊させる趣向の店だ。看板に「澤山道具をお壊しなさい、其が貴君のお幸福」と書いてある。如何にも破壊を好む氣



早な佛蘭西人の氣に入り相な遊戯だ。店には壊れた陶器が山を爲し、壊される端から店の女が莞爾して新しい皿や鉢を棚に並べて居る。或晩和田垣博士と僕とて取替へ取替へ片端から一品も餘さず壊して見たが、僕の様な疝癪持には真に便利なきして安價で胸の透く遊戯だと思つた。一回分の毬を六個盆に載せたのが日本貨の貳拾錢である。此魔術街の一部に新しく日本街が出来た。永年歐米を廻つて居る櫛曳と云ふ日本人の興行師が經營して居る相だ。春日風の朱塗門を入ると、日本畫に漢詩や狂歌の贊のある萬燈が客を中央の池へ導く。池を繞るのは粗末な幾軒かの日本建築の喫茶店、藝妓の手踊、越後獅子を初め、錦繪、小間物、日光細工、樂焼、饅頭屋、易者などの店である。四方の畫割には富士山や日本の田舎を現し、松や櫻の間に大佛やお社なども出来て居る。白晝に観ては殺風景だが夜の燈の明て觀る景色は一寸日本らしい。幻覺を起させる。關係して居る日本人は四十人近い。中には女が十人程居る。大抵日英博覽會から引續き歐洲に居残つて居る連中だが、此春日本から巴里へ直接出掛けて來た女なども混つて居る。或一人の女は東京の實踐女學校に居た者で先生の御講演を聞いた事があ



モルマンの高地に遺る一五八〇年代の鞍車

ると和田垣博士に話して居た。又一人馬場吉野と云ふ愛くるしい十二歳の娘が居る。倫敦で生れて英國の小學校で育つた丈に達者に英語を話す。此日本街に加はつて日本畫を描いたり日本陶器を賣つたりして居る眞面目な兩親の愛嬢である。日本語は英語程に話せないらしく、東京を「トオ、キ、ヨ」と發音するのが却て僕達には嬉しく感ぜられた。日本に居て想像すると歐洲世界へ斯んな風にして出稼ぎして居る男女は大抵自墮落な人間の様だが、實際は反對に極めて眞面目な量見を持って居る者が多い。少くとも此日本街の日本人に就て僕は



然う斷言する事が出来る。

此連中は雑多な人間の寄合で純粹の興行師は案外に少く、已を得ず此仲間自身を寄せて居るものの、何がな一藝を修めて日本へ歸りたいと心掛けて居る者が多い相である。女優の見習ひをしないと云つて居る女などもある。併し一時の腰掛に斯う云ふ興行をして居る連中としては、唯通りすがりに何んな事をしてなりとも金儲けさへすれば好いと云ふ様な薄情な態度が無いのは感心だ。彼等は自分の力の可能を盡して兎も角も祖國の趣味を歐洲人に紹介しようと思つて居る。試みに此日本街に入つて見ると、彼等の微力で以て善く是丈の日本品を取寄せ、不自由な材料を以て巧に日本風の設備を爲し得た事だと誰も感ずるであらう。之に附けても僕は日本大使館の無風流を歎かざるを得ない。大使代理の安達君は甚だ精勤家で會ふ度に忙し相であるが、祖國の藝術學問を歐洲人に紹介すると云ふ様な精神的方面に對しては餘りに等閑に附せられて居る。大使館の應接室を覗いた者は誰も其書架に飾られた内外書籍の貧弱に驚くであらう。殊に何時も冷汗をかくのは大小の客間の日本的裝飾が内地の田舎芝居の書割

にも見る事の出来ない程亂雑と俗悪とを極めて居る事である。場所もあらうに巴里の真中へ東洋の一等國を代表して斯様な非美術的裝飾を見せびらかすのは國辱も甚だしい。勿論之は安達君の所爲では空も無い、日本の外務省の心掛が悪いのである。僕は十五萬圓も費したと云ふ大使館の客間に全く失望して居るが、却て微力な中からは或種の調和的な日本趣味を具體し得た日本街を感心だと思ふ。惜しい事には女達の衣裳が拙い。其品の悪いメリンス友染を取巻いて珍らしげに佛蘭西婦人が眺めて居るのを見ると冷汗の出る氣がする。(四月十八日)

五月一日

歐洲人の喜ぶ五月第一日を僕も面白く暮したいと思つて居たら、獨逸の留學を終つ



て日本へ歸る長野軍醫正が立寄つたので、晝間は一緒に醫科大學を訪ふやら、バスツ  
ウルの研究所を観るやら、眼科醫學の泰斗として名高いランドルト教授父子の私宅を  
驚かさずら、大分見當りがひの案内に忙しかつたが、夜は梅原の所へオデオン座から  
寄越した招待状で梅原、ロオド・ピサロオ、マウリス・アスランの三人の畫家と忠臣藏  
を諷刺した新劇「日本の譽」を観に行つた。此ロオド・ピサロオ君は有名な風景畫家故  
ピサロオ氏の息子で温厚な青年畫家である。芝居は噂の如く今夜も大入りであつた。僕  
等と向ひ合つた觀棚に小林萬吾、和田三造外二人の日本人も來て居た。僕が勸めて置  
いたので長野軍醫正の顔も土間の方に見えて居た。

僕は前に此「日本の譽」を變な物だと報じて置いたが、其れは忠臣藏の諷刺だと思へ  
ばこそ僕等日本人に其支離滅裂な點が目障りなる物の、全く忠臣藏の原作を知らない  
佛蘭西人が觀れば非常に珍らしいエキゾテイツクの味に富んだ物に違ない。又忠臣藏  
に關係の無い別個の新作だとして考へれば筋も可なり通つて居る。殊に舞臺面の裝置、  
背景、光線の使用等が巧く出來て居るし、役者の扮装も、初の幕から義士が討入の晩

の裝束をして居たり、左衽に着て居たりする間違は多いにしても、大體に配色が巧め  
あるから見た眼の感じが快い。東京で演じる翻譯劇と云ふ物も西洋人が觀たら定め  
て可笑しな物であらうから、日本の習慣に通じない佛蘭西人の演じる物としては丈に  
調つて居れば先づ褒めて置かずば成るまい。中にも茶屋場の彌五郎(實は由良之助)は  
好い出來てあつた。日本では九太夫が縁の下に居るのを、此芝居では反對に彌五郎の  
亂辭を吉良(實は九太夫)が二階から觀て居るのである。

何が最も好くないかと云ふと音楽に東京で廣目屋が遣るブカブカ調に似た物を用ひ  
た事だ。先年貞奴が巴里へ來た時に用ひた樂譜から採つたと云ふ事だが、大阪侯(實  
は判官)切腹の場で其陽氣な調子を奏するのだから僕等日本人には堪らない。其れに  
切腹の場に立會ふ立烏帽子を着た二人の勅使が「勅使旗」を前に樹てさせて臨場し、草  
鞋穿の儘上段の間に跌坐を掻き、背後に二人の小姓が各二本の刀を兩手に攫んで捧  
げた形には思はず梅原と二人で吹出して仕舞つた。稽古の時に和田垣博士が切腹の場  
で笛を用ひる様に注意せられたのであつたが、舞臺監督のアントワンが笛の音を聞く





日本舞臺の大詰

と縮み上る程嫌ひだと云ふので見合せに成つたのだ相だ。

腹切の形も最初は真中へ棒差に突込んで直ぐ後へ倒れるのであつたが、最後の稽古の日に徳永柳洲が教へて遣つたので何うにか見られる様に成つた。併し俯伏するのは形が悪いと云つて前へズツと乗出して腹這に成つて仕舞ふのであるが、其れが又新しい味のある形になつて居て、決して變てなかつた。其外最敬禮の場合に皆が度度腹這に成る。勅使に對しても大阪侯の夫人侍女家臣等が腹這に成るのを始め、大詰の仇討の場へ日の丸の提灯を先に立て乍ら帝の行幸がある時にも舞臺の人間は一切寝るのである。舞

臺監督の意向は日本の習慣などは何うでも可い、唯歐洲に無い野蠻趣味と新しい形とを出して観せたいのらしい。

観客は幕毎に大喝采をする。切腹の場では女客の目に手巾が當てられるのも少く無かつた。四幕目にキニセイと云ふ妙な名の若侍が彌五郎の娘である許嫁の愛情に絆されて、今宵に迫る仇打の首途に随分思ひ切つて非武人的に未練な所を見せる。其處へ多勢の義士が誘ひに来て散散に辱めた上飽迄も躊躇して居るキニセイに告別して行つて仕舞ふと、キニセイ先生も終に決心して許嫁を突除け同志の後を追つて行く。其れから大詰に仇方に仕へて居る彌五郎の息子野助(實は力彌)が主人の爲に父と戦ひ一刀に斬られる所がある。是等も變つて居るので観客に大受である。想ふに英國で書かれた「ムスメ」此國で既に演じて居る「バツタアフライ」と並んで當分歐洲の俗衆に歡迎せられる日本劇は此「日本の譽」であらう。併し僕の尤も感服する事は巴里の一流の劇評家が之に對して大袈裟な批評を試みない事である。

芝居の後はピサロ君の發議でモンマルトルに引返し、或賑かな酒場で朝の三時近



くまで話して居た。キャバレエには伊太利人の音楽や踊子の踊があり、又氣取つた風をした即興詩人が二三人も居て當意即妙の新作を歌ふ。其れから客と美しい女連との踊が曉方まで續くのである。(五月二日)

### 巴里のいろいろ

ル・バルヂイ氏は佛蘭西一の喜劇役者だが、硬骨な氏は去年の春舞臺監督と衝突して即座に辭職を申出て、多勢の名士の仲裁も其效なく、昔女優サラベル・ナルが奮然辭職した以來の大悶着を惹起して居た。愈辭職と決したので此十七日に氏の御名殘狂言がコメデイ・フランセズ座で催され、氏の得意の物を一幕宛出し、ムネ・シユロイ其他の名優が一座する筈である。三週間前から切符を賣出したが、平生の十倍に當

る價格の切符が僕が五日目に出掛けた時大抵賣切れて居たので其盛な人氣が解る。當日の總収入は一切ル氏に贈る定めなので、他の俳優は全く無報酬で一座し、凡ての費用は劇場の負擔である。

ル氏は未だ五十四五歳だから此後を何うするかと云ふ事は巴里人の間に興味ある問題となつた。氏に對してコメデイ・フランセズ座から豫て捧げて居る劇場株は十八萬圓ある。氏が辭職と共に俳優を廢めて仕舞へば永久此恩給に浴する事が出来るが、他の劇場へ出れば十八萬圓は一切沒收される規定なのである。然るに氏は飽迄も藝術の人として進みたいのであるから、其等には頓着せず、ホルト・サン・マルタン座へ首席俳優として入る事に決めて仕舞つた。國立劇場の方でも氏の多年の功勞に對し全く從來の持株を取上げる具合にも行かないから、結局は幾分を他の名義で贈呈する事になるであらう。其れから姑く適當な役者を缺いて居たので上場せずに居たロスタンの「シラノ・ド・ベルジュラック」を、ル・バルヂイ氏のシラノで演ずるであらう、其れが大變な適り役であらうと評判されて居る。(五月四日)



サロンが新舊とも開かれて居る。未だ二度しか行つて見ないし、其れに點數が兩方で一萬に近い事であり、加之に佛蘭西人許りて無く春の見物に來た世界のお客様がうようよしてゐる中で忙しく一瞥して歩くのだから確な評判も出來ないが、斯う量が多ければ概して普通の作物許りになるのは勿論だ。其れに巴里へ來てから僕の目も贅澤に成つて居るだらうから、自然之はと特に感服する繪は少い様だ。其中でアマン・ジャン氏の「地下水火風」セカリエ・ベリユウス氏の「踊子」などが目を惹くのを思ふと矢張群を抜いて居るのであらう。

同時に個人の繪が幾つも初まつて居るので中忙しい。ギヤアル氏は若手の中の流行子で一作毎に技巧の變化を見せ過ぎる嫌ひはあるが、浮調子で無く、全體に内から燃える豊かな同情に融合した強い色調で葡萄酒の窖に入つて居る様な甘い温かな感に人に與へる。人間を描く巴里の青年畫家の中で僕の今日迄に最も感服したのは此人である。又新しく印度内地の旅行から歸つて來たベナル氏の印度土産の繪が目下大變な人氣を集めて居る。異國の風情を好む近年の流行心理に投じた爲もあるが、歐洲人



巴里のいるいる

室刻彫の館物博レアンサリユリ

にして此畫家程印度人を領解した人は無いと云ふ諸新聞の推讃も決して諛辭で無い。氏は多く河邊に下り立つて聖水に浴する印度婦人に興味を持ち、其れに就いて幾多の面白い作を成就して居る。開會以來半月も経たぬ間に七分まで賣約済に成つて仕舞つた。又此月は仕合せな事に二人の老大家の新作に接することが出来る。ルノワアル翁は既に其新作許りをジュラン・リュイルの店の數室に陳べて居るが、何よりも先づ老いて益精力の壯なのに驚く。僕には未だ翁の近年の作の妙味が十分會得せられないが飽



迄も若しい此翁の心境は例の眞夏の花を嗅ぐ様な豊艶多肉な女を倦む色も無く描いて居る。姑く畫を廢して庭作りを樂んで居ると云ふ噂のあつたモネ翁が此二十七日から其新作を見せて呉れる事になつたのは嬉しい。又多年眼を病んで居るドカ翁も近頃は折折繪筆を取る相である。まだマチスの繪を見る機会がない。

歐洲へ来て未だ日の淺い僕の觀察に大した自信も無い事ながら、從來日本に居て新歸朝者の報告で聞いて居たのと實際と大分相違のあるらしいのに事に觸れて氣が附く。例へば選姪が盛だと云つても其れは佛蘭西全體の事では無く、巴里其他の都會に主として行はれる事實である。如何にも一生涯子を産まない女が巴里に多い。産むに



屋の寺ムダ・ルトオノ  
一の刻彫物怪るな上

しても大抵一人の子に限られ二人の子を育て居るのは甚だ稀である。併し少し田舎へ行けば三人以上の子供のある家は決して珍らしく無い。僕の知つて居る或田舎の婆さんなどは十七人の子を産んで十人丈育つて居る。是等は特例であらうが、

兎に角選姪は都會生活の複雑な事情から由來するので簡素な地方生活には其必要が無い。然れば之を以て直に人口の減少を論じ佛蘭西の衰頽を唱へるのは杞憂であつて、設ひ都會人の出產數は減少しても常に地方人が之を補充するから都會の人口は寧ろ加はるとも減る事は無い譯である。又佛蘭西全體に一時人口の減少する事實があるにしても其れが永久に續くとは斷ぜられず、殊に人口の減少が頓て國家の萎靡を招く原因だとは思はれ無い。現に佛蘭西の富は年毎に増して行くし、學問藝術に就いてはロダンの彫刻、マスネエの音楽、ボアンカレエの科學、ルノワアル、モネ、セザンヌ、ゴッホ、ゴッガン、マチス等の繪畫、エルハアレンの詩、ベルグソンの哲學、キユウリイ夫妻のラジウム發見に至るまで常に世界文明の先頭に立つて居る。衣食足つて深沈大勇な思索研究に耽つた爲め、或は表面的な士氣に聊か弛緩の姿を示したかも知らぬが、其れは一時の事であつて、光榮あるラテン文明の歴史に根ざした國民の實質は衰へる由も無く、獨逸近年の外眼に奮起して尙武の氣風は頓に揚がつて居る。今春の議會に海軍擴張案を提出した政府が頻に日本を例に引いて反對黨の氣勢を挫いたのは目覺し



い現象であつた。  
 日本では近年何事にも官營が流行し、其れが必ずしも國庫の收入を増す結果に成つて居ないらしいが、民衆の利益を主として萬事を経営する佛蘭西政府の遣り口を見るに、民業として利益あり官營として損失のある性質の物は勿論民營に任す方針を取つて居る。斯う云ふ事に就ても從來歐洲を視察して歸る日本の官人の報告が粗漏だと思ふ。例へば日本の逓信省は去年あたりから東京市内の小包制度に繁雜な擴張を實施し、米俵から洋傘辨當に到る迄迅速に配達する事に成つたが、之が爲に何れ丈市内労働者の仕事を奪つたか知れない。其割に逓信省の收入が殖えたかと云ふと、其れには係員や配達夫を増したであらうし、一時にせよ其等の品物を受入れる場所の設備も要したであらう、而して配達料はと云へば麻布の奥から本郷の奥まで米一俵を配達するにも一人の配達夫と一輛の車とを要し乍ら纔に四錢か六錢である以上、決して大した實益は無いに違ない。巴里の市内小包は何うかと云ふと東京の様に迅速な配達制度は無く唯一日に三回配達する普通小包丈である。其外に至急を要する物は各自の家の



巴里のいる

湖の森のユニオロブ

使用人に持たせて遣るか、使ひ歩きを業とする者に託する。郵便局で受入れる普通小包は直接に郵便局が配達するので無く、逓信省は之を或會社へ一手に委託して配達させて居る。會社は逓信省へ一年纔に七千六百フラン(三百十四圓)の請負料を納める丈で其他の小包料は一切會社の所得である。巴里の小包は一日平均七千個だと云ふから、之を若し郵便局で配達するとすれば係員の多くを要し事務の繁雜な割に利する所は少いが、會社の方では唯一人の社長が機敏に差圖し市内二十幾箇所の出張所に百五十人の係員、八十人の配達夫、十人の補助



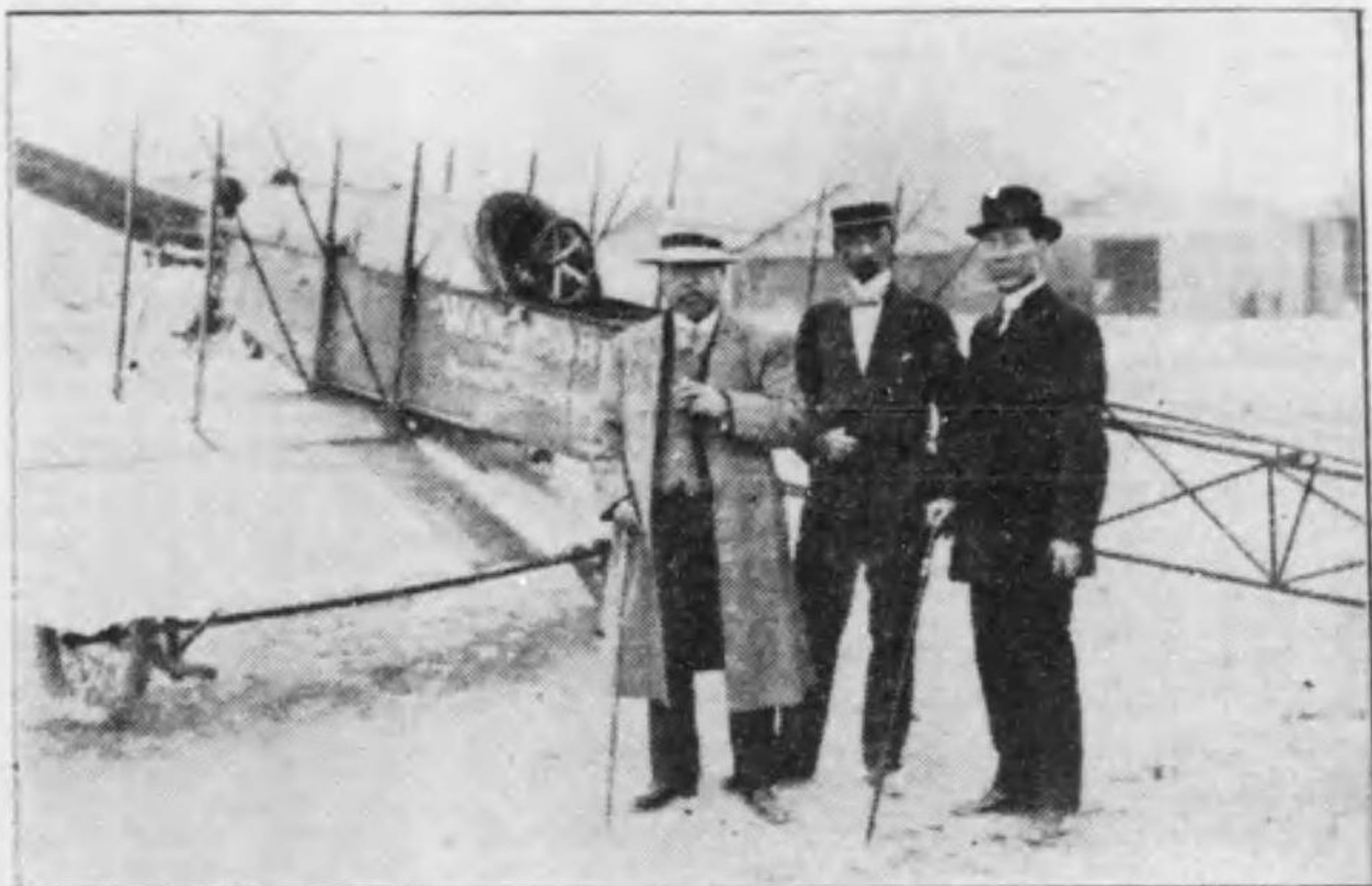
配達夫を使用する事で事が捗取つて行くから民業として立派な収益を得て居る。僕は日本と比較して此國の逓信省の賢さを歎稱せずに居られない。日本の役所は一體に無用な記録が好きで、郵便局の何の口を覗いても大きな幾冊かの帳簿の番人が控へて居るが、巴里で爲替を組んでも小包を出しても、小さく三枚に切れる用紙で事が済み、一枚は受取證、一枚は爲替券若くは小包に貼付ける物、後に郵便局に残る小さな一枚が日本の大帳簿に相當する物である。斯う云ふ事に簡潔なのが何れ丈便利で且つ経済的だか知れない。僕は學校の卒業證書と云つても好き相な立派な大きい爲替用紙を思出して日本人の無用な贅澤に呆れる。(五月十日)

### 飛行機

東京の音楽學校を卒業した音楽家として併せて近年歐洲の飛行機界に名を知られた飛行機家である「男爵シゲノ」が、其創意に成つた滋野式飛行機若鳥號を携へ遠からず巴里を立つて日本へ歸る筈だ。氏は去年の今頃飛行機から落ちて輕傷を負うたが、其一週年とても云ふ譯か近頃少し背部が痛むと云つて居る。其れで飛行は試みないが矢張毎日イツシイ・レ・ムリアウにある飛行場へ出掛けて行く。和田垣博士と僕とが氏の出立前に其飛行場へ一度案内して貰ふ約束をして置いたので一昨日の午後風の無さ相な空を見込んで氏の下宿を尋ねると、下宿の主人が氏はパンテオンの横町の自動車を買つて、滋野會社へ行つたと云ふ。二町足らずの近い處にある會社へ直ぐ跡を追つて行くと、滋野君は半月前に買った新しい自動車を會社の入口に引出して頻に掃除して居た。華族様に似合はない器用な男で、何時の間にか自動車の練習所を卒業して巴里市廳からの免状をも取つて居る。

二人でリュクサンブル公園の裏の下宿へ和田垣博士を誘ひに寄ると、博士はフレデリック・ノエル・ヌエ君と云ふ巴里の青年詩人を相手に佛蘭西語の稽古をして居られる





飛行場に於ける野謝・野滋・垣田

一六四  
處であつた。僕はスエ君の新しい處女詩集に就てスエ君と語つた。詩はまだ感得主義を脱して居ないが、ひどく純粹な所がある。甚だ孝心深い男で、巴里の下宿の屋根裏に住んで語學教師や其外の内職で自活し乍ら毎週二度田舎の母親を訪ふのを樂みにして居る。スエ君と下宿の門で別れて三人は自動車に乗つた。有名な瀾波洞の前まで来て其筋向ひの珈琲店で一寸憩まうと滋野君が云つた。同じく飛行場を觀たいと云ふ或お嬢さんを其處で待合す約束に成つて居た。麥酒を飲んで居ると約束の午後四時に其お嬢さんが遣つて來た。併し今日は俄に差支

が起つて行かれない、只其斷りに來たのだと言ふ。目附の憂鬱な、首筋の細りとした、小柄な女である。其歸つて行つた後で「お嬢さんと云ふ言葉は勿體なからう」と云ふと、滋野は笑つて「もとは帽子に附ける造花を内職にして居た物堅い家のお嬢さんだが、近頃は少し怪しいお嬢さんに成掛けて居る。併し何となく雨に打たれた様な女であるのが好いちやないか」と云ふ。博士曰く、「油繪に描く女だね。」  
東京の路の様で無く、目まぐるしい程自動車や其他雑多な車の行交ふ巴里の大道を巧に縫つて自動車を驅る滋野君の手腕は感服すべき物であつた。巴里の城門を出るのに税關吏が尺度を以て自動車の貯へて居る揮發油の分量を調べた。之は市内と田舎とで揮發油の價格が違つて居るから、若し歸途に其れ以上の分量を持つて居れば課税するのである。飛行場は東京の青山練兵場に少し廣い位の場處で、大小二十幾所の格納庫が其れを取巻いて居る。猶之と同じ飛行練習場が巴里の近郊丈に十箇所から有ると聞いて如何に飛行機の研究が盛であるかが想はれる。飛行場は一切陸軍省に屬して居るから出入の人を騎馬の憲兵が誰何する。



どの格納庫にも幾つかの飛行機が納められて居て一様式が異つて居る。墜落して壊れたものもある。不備な所を修繕して居るものもある。飛行場は陸軍省に屬して居ても、官營萬能熱に罹つて居る日本と違つて格納庫も其れに納めてある飛行機も總て私人の所有である。此處は一番古い飛行練習場丈に何の格納庫も飛行機史上に逸し難い最初の面白い記録を持つて居る。滋野君は其等を語り乍ら一一飛行機の特徴を説明して呉れた。ナボガツシヨン・アリエンスに屬する格納庫に兩日前發動機の装置の改善を終つた滋野君の若鳥號が納められて居る。全部鋼鐵で出来て居る事が一見して他と異つて居る。其外細部に互つた特色は數月の後之が日本へ持歸られた時明瞭となるであらう。重量は三百キロ、馬力は六十である。ナボガツシヨン・アリエンスの飛行家長ルシヤン・ド・ユマアゼル君が僕等より先に來て、風さへ風いだならば今日此若鳥の修繕後第一回の飛行を試みやうとして居た。此ドユマアゼル君は十四歳位の時から毎日飛行機に乗つて居るので巴里屈指の飛行家であるが、年齢が足らなかつたので政府から免狀を得て以來未だ二箇月にしか成らない。漸く十八歳二箇月なのである。



在巴里畫生假裝會

午後五時前に十許りの飛行機が引出されたが、風が強いので皆地を這つて發動機の具合を試したり、滑走試験を續けたりして居る。其が砂煙を蹴立てるので廣い場内が眞白に曇つて仕舞つた。ドユマアゼル君は斷念して歸つて行つた。僕達は場

外へ出て少時珈琲店で憩んだ。和田垣博士の駄洒落が澤山に出た。巴里に多い物は盡しを並べて種種の頭韻を冠つた句などが出来る。其内に二隻の飛行機が風を侵して



飛び初めたので僕達は場内に引返した。僕は巴里へ来て頭の上を飛ぶ飛行機は度々見て居るが、地を離れたり着陸したりする光景を観るのは今日初めてである。其れが飄然として如何にも容易い。どの飛行機にも飛行家以外に物好きな男女の見物が乗つて居る。和田垣博士も僕も自然と気が昂つて乗つて見たく成つた。飛行機から落ちると云ふ事は最早萬一の不幸に属して居る。萬一の不幸を氣にして居たら土の上も踏めない訣だ。自動車に轢かれて死ぬる事もあるのである。乗るなら頼んで見ようと滋野が云つたけれど今日は其外に飛ぶ飛行機が無かつた。其處へ飛行機を専門に寫す寫真師が自轉車で造つて來たのを呼止めて、記念の爲に若鳥號を引出させて其前で三人が撮影した。

滋野の話によると、修繕前の若鳥號に屢乗つて飛行を試験して居た飛行家にナルデニイと云ふ伊太利人が居た。其男は佛蘭西政府の飛行免狀を取つて居る巧者な飛行家であるが、伊太利人であり乍ら土耳其軍へ數隻の飛行機を取次いで賣つたと云ふので本國政府から佛蘭西政府へ取押へ方を請求して來た。其れて佛蘭西政府は本人に退



(ラベオがのるを見に面正) 街の前のラベオ

去命令を下すと、ナルデニイは「宜しい」と云つて、即日ドユベル・ドゥツサンと云ふ單葉式五十馬力の飛行機に乗つて、巴里の郊外井ロソングアレエから英國のロンドンへ「雲を霞」とお手の物で飛んで仕舞つたのは人人を一寸痛快がらせた。未だ十日前の事だ相である。今日あたりから倫敦のデライ・メル新聞社が三十萬圓を提供して英國の各州へ數隻の飛行機を飛ばせ、最早飛行の可能は議論の餘地が無い、唯實際の飛行を示して國民の飛行機熱を盛んにしようとして居るが、其飛行家は總て佛國から招聘した。斯様な話を自動車の上でしながら歸途はセヌ河の右岸に沿